秋田県文化財調査報告書第199集

大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

－ヲフキ遺跡－

1990・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

－ヲフキ遺跡－

１９９０・３

秋田県教育委員会

序

埋蔵文化財は、郷土の歴史文化を築いてきた先人の足跡であり、現在の文化創造の基礎を成すものであります。私達は、この埋蔵文化財を保護・保存すると共に、過去の文化を学びとり、より良き文化をつくりあげ、継承していくべきであります。

このたび、象潟町大砂川地区農免農道整備事業の路線が、周知の遺跡であるヲフキ遺跡の一部を通過することが判明したので、秋田県教育委員会では、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代の墓跡と考えられる土坑、土器埋設遺構、縄文時代前期の土器や石器、及び平安時代の土師器と須恵器などの遺物を検出しました。

本報告書は、これらの調査記録をまとめたものでありますが、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、御協力を賜りました秋田県農政部由利農林事務所、象潟町教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成２年３月５日

秋田県教育委員会
教育長　橋本顕信

例　　言

1．本書は、大砂川地区農免農道整備事業に係るヲフキ遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の第１章、第４章、第５章を栗澤光男、第２章、第３章を鎌田茂が執筆した。

3．石器の石質鑑定は、秋田県立博物館佐々木厚学芸主事にお願いした。

4．本書に使用した地図は、国土地理院発行の５万分の１『象潟』『吹浦』、秋田県農政部由利農林事務所土地改良課提供の５百分の１及び１千分の１地形図である。

5．遺構土層図中の土色・土師器・須恵器の色調の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』によった。

6．挿図中の須恵器断面は、土師器と区別するため黒く塗りつぶした。

7．挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、土器・石器ごとに通し番号を付してあり、その番号は、図版中の遺物番号と対応している。

8．遺構外の出土遺物の挿図中には、その出土地点のグリッド名を( )内に明記した。

9．遺構番号は、その種類ごとに略号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また遺構・遺物には下記の略記号を使用した。

ＳＫ　土坑　　ＳＲ　土器埋設遺構　　ＳＸ　その他の遺構

ＲＰ　一括出土土器　ＲＱ　石器

10．挿図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。

目　　次

序
例言
第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……1
第２章　遺跡の立地と環境……2
　第１節　立地と環境……2
　第２節　歴史的環境……3
第３章　発掘調査の概要……6
　第１節　遺跡の概観……6
　第２節　調査の方法……6
　第３節　調査の経過……6
第４章　調査の記録……9
　第１節　検出遺構と遺物……9
　　１　縄文時代……9
　　(1)遺構とその出土遺物……9
　　①土坑……9
　　②土器埋設遺構……19
　　③その他の遺構……20
　　(2)遺構外出土遺物……25
　　①土器……25
　　②石器……35
　　③石製品……40
　　２　平安時代……66
　　(1)出土遺物……66
第５章　まとめ……71

挿　図　目　次

第１図　ヲフキ遺跡と周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・5
第２図　調査区及び周辺地形図・・・・・・・・・・・・・7
第３図　遺構配置図・遺跡基本土層図・・・・・・・・11・12
第４図　ＳＫ05・06・07・08・09・10・・・・・・・・・・13
第５図　ＳＫ11・12・16・18・24・・・・・・・・・・・・15
第６図　ＳＫ14・22・23・25・26・28、ＳＸ01・・・・・・17
第７図　ＳＲ02・03・04・13・・・・・・・・・・・・・・19
第８図　ＳＫ05・07・08・09・11・12・22・24・25・26出土土器・・・21
第９図　ＳＫ14・26・28出土土器・・・・・・・・・・・・22
第10図　ＳＲ03、ＳＸ01出土土器・・・・・・・・・・・・23
第11図　ＳＫ05・11・12・14・16・18・22・28、SX01出土石器・・・24
第12図　遺構外出土土器(１)・・・・・・・・・・・・・・28
第13図　遺構外出土土器(２)・・・・・・・・・・・・・・29
第14図　遺構外出土土器(３)・・・・・・・・・・・・・・30
第15図　遺構外出土土器(４)・・・・・・・・・・・・・・31
第16図　遺構外出土土器(５)・・・・・・・・・・・・・・32
第17図　遺構外出土土器(６)・・・・・・・・・・・・・・33
第18図　遺構外出土土器(７)・・・・・・・・・・・・・・34
第19図　遺構外出土石器(１)・・・・・・・・・・・・・・41
第20図　遺構外出土石器(２)・・・・・・・・・・・・・・42
第21図　遺構外出土石器(３)・・・・・・・・・・・・・・43
第22図　遺構外出土石器(４)・・・・・・・・・・・・・・44
第23図　遺構外出土石器(５)・・・・・・・・・・・・・・45
第24図　遺構外出土石器(６)・・・・・・・・・・・・・・46
第25図　遺構外出土石器(７)・・・・・・・・・・・・・・47
第26図　遺構外出土石器(８)・・・・・・・・・・・・・・48
第27図　遺構外出土石器(９)・・・・・・・・・・・・・・49
第28図　遺構外出土石器(10)・・・・・・・・・・・・・・50
第29図　遺構外出土石器(11)・・・・・・・・・・・・・・51
第30図　遺構外出土石器(12)・・・・・・・・・・・・・・52
第31図　遺構外出土石器(13)・・・・・・・・・・・・・・53
第32図　遺構外出土石器(14)・・・・・・・・・・・・・・54
第33図　遺構外出土石器(15)・・・・・・・・・・・・・・55
第34図　遺構外出土石器(16)・・・・・・・・・・・・・・56
第35図　遺構外出土石器(17)・・・・・・・・・・・・・・57
第36図　遺構外出土石器(18)・・・・・・・・・・・・・・58
第37図　遺構外出土石器(19)・・・・・・・・・・・・・・59
第38図　遺構外出土石器(20)・・・・・・・・・・・・・・60
第39図　遺構外出土石器(21)・・・・・・・・・・・・・・61
第40図　遺構外出土石器(22)・・・・・・・・・・・・・・62
第41図　遺構外出土石器(23)・・・・・・・・・・・・・・63
第42図　遺構外出土石器(24)・・・・・・・・・・・・・・64
第43図　遺構外出土石器・石製品(25)・・・・・・・・・・65
第44図　遺構外出土土器(土師器)(８)・・・・・・・・・・67
第45図　遺構外出土土器(須恵器)(９)・・・・・・・・・・68
第46図　遺構外出土土器(須恵器)(10)・・・・・・・・・・69
第47図　遺構外出土土器(須恵器)(11)・・・・・・・・・・70

図　版　目　次

図版１　１．遺跡遠景(東→西)・・・・・・・・・・・・・・73
　　　　２．遺跡遠景(南西→北東)・・・・・・・・・・・・73
図版２　１．調査前全景(北→南)・・・・・・・・・・・・・74
　　　　２．調査前全景(北西→南東)・・・・・・・・・・・74
図版３　１．調査後全景(北→南)・・・・・・・・・・・・・75
　　　　２．調査後全景(南→北)・・・・・・・・・・・・・75
図版４　１．調査風景(北→南)・・・・・・・・・・・・・・76
　　　　２．調査風景(西→東)・・・・・・・・・・・・・・76
図版５　１．ＳＫ05(南西→北東)・・・・・・・・・・・・・77
　　　　２．ＳＫ06(南→北)・・・・・・・・・・・・・・・77
　　　　３．ＳＫ07(西→東)・・・・・・・・・・・・・・・77
図版６　１．ＳＫ08礫検出状況(南西→北東)・・・・・・・・78
　　　　２．ＳＫ08(南西→北東)・・・・・・・・・・・・・78
　　　　３．ＳＫ09(西→東)・・・・・・・・・・・・・・・78
図版７　１．ＳＫ10(西→東)・・・・・・・・・・・・・・・79
　　　　２．ＳＫ11(南西→北東)・・・・・・・・・・・・・79
　　　　３．ＳＫ11遺物出土状況(南西→北東)・・・・・・・79
図版８　１．ＳＫ12礫検出状況(南→北)・・・・・・・・・・80
　　　　２．ＳＫ12土層断面(南→北)・・・・・・・・・・・80
　　　　３．ＳＫ12(南→北)・・・・・・・・・・・・・・・80
図版９　１．ＳＫ14土層断面(北東→南西)・・・・・・・・・81
　　　　２．ＳＫ14遺物及び礫検出状況(北→南)・・・・・・81
　　　　３．ＳＫ14(北→南)・・・・・・・・・・・・・・・81
図版10　１．ＳＫ16検出状況(南→北)・・・・・・・・・・・82
　　　　２．ＳＫ16(西→東)・・・・・・・・・・・・・・・82
　　　　３．ＳＫ18遺物及び礫検出状況(西→東)・・・・・・82
図版11　１．ＳＫ18(西→東)・・・・・・・・・・・・・・・83
　　　　２．ＳＫ22(左)・23(右)(東→西)・・・・・・・・・83
　　　　３．ＳＫ24(南→北)・・・・・・・・・・・・・・・83
図版12　１．ＳＫ25礫検出状況(東→西)・・・・・・・・・・84
　　　　２．ＳＫ25(南→北)・・・・・・・・・・・・・・・84
　　　　３．ＳＫ28(南→北)・・・・・・・・・・・・・・・84
図版13　１．ＳＲ02(南→北)・・・・・・・・・・・・・・・85
　　　　２．ＳＲ03(西→東)・・・・・・・・・・・・・・・85
　　　　３．ＳＲ04(西→東)・・・・・・・・・・・・・・・85
　　　　４．ＳＲ13(西→東)・・・・・・・・・・・・・・・85
図版14　１．ＳＸ01礫検出状況(南→北)・・・・・・・・・・86
　　　　２．ＳＸ01遺物検出状況(西→東)・・・・・・・・・86
　　　　３．ＳＸ01完掘状況(北→南)・・・・・・・・・・・86
図版15　遺構内出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・87
図版16　遺構内出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・88
図版17　遺構内出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・89
図版18　遺構内出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・90
図版19　遺構内出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・91
図版20　遺構外出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・92
図版21　遺構外出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・93
図版22　遺構外出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・94
図版23　遺構外出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・95
図版24　遺構外出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・96
図版25　遺構外出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・97
図版26　遺構外出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・98
図版27　遺構外出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・99
図版28　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・100
図版29　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・101
図版30　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・102
図版31　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・103
図版32　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・104
図版33　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・105
図版34　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・106
図版35　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・107
図版36　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・108
図版37　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・109
図版38　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・110
図版39　遺構外出土石器・石製品・・・・・・・・・・・・・111
図版40　遺構外出土土器(土師器・須恵器)・・・・・・・・・112
図版41　遺構外出土土器(須恵器)・・・・・・・・・・・・・113

表　目　次

表１．遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

秋田県農政部は、象潟町大砂川地区の農業基幹道路として、大砂川地区農免農道整備事業を計画立案し、昭和62年度に大須郷から川袋に至るⅠ期工事を、翌昭和63年度に川袋から大砂川に至るⅡ期工事を施行することにした。しかし、工事計画路線の周辺には、周知の遺跡がありこの一部を通過することが予測されるため、秋田県教育委員会では、Ⅰ・Ⅱ期工事計画路線を合わせた総延長2,184m、幅6mの計画路線内における埋蔵文化財の分布調査を行った。その結果、周知の遺跡２箇所と新発見の遺跡１箇所が路線上にかかる可能性が出てきた。そこで、この結果を基に、昭和63年6月7日から6月11日までと同年12月20日から12月24日までの２回にわたって、遺跡範囲確認調査を行った。その結果、１遺跡は路線外にあったが、Ⅰ期工事路線内には、新発見の上熊ノ沢遺跡、Ⅱ期工事路線内には、周知の遺跡であるヲフキ遺跡の一部がかかることが判明した。このため秋田県教育委員会は、遺跡保護について工事主体者の秋田県農政部と協議し、工事着工に先立って発掘調査を行い、記録保存をはかることとした。ヲフキ遺跡の発掘調査は、平成元年度５月８日から２カ月間にわたって実施した。

第２節　調査の組織と構成

遺　跡　名	ヲフキ遺跡
遺跡所在地	秋田県由利郡象潟町大砂川字ヲフキ27番地他
調査期間	平成元年5月8日～6月30日
調査面積	900㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	栗澤　光男　（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）
	鎌田　　茂　（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
調査総務担当者	佐田　　茂　（秋田県埋蔵文化財センター主　　査）
	高橋　忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主　　事）
調査協力機関	秋田県農政部由利農林事務所土地改良課　象潟町役場農林水産課　象潟町教育委員会　象潟町郷土資料館

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境

今回調査が行われたヲフキ遺跡は、北緯39°9'18"、東経139°54'24"、ＪＲ羽越本線上浜駅から南南東約700m、台地西端を洗う日本海の汀線からは直線で約500m程の地点にあり、鳥海山の山腹に水源を発する川袋川の支流、川袋小川右岸の標高32m前後の台地上に立地している。この台地は、日本海に向かって緩やかに傾斜する地形を呈しており、現在は大部分が水田として利用されている。

遺跡のある象潟町は秋田県の西南端にあって、東は仁賀保町(東経140度3分15秒)に接し、西は日本海に面し(139度52分08秒)、南端は山形県遊佐町(北緯39度6分17秒)に接し、北は金浦町(北緯39度14分02秒)に接している。東西は約9.6km、南北は約10.8kmで、総面積は約125.09㎢で、由利郡市の中で第５位である。町全体の標高は約1,350mから西側にいくにつれて高さを減じており、標高別にして50～400mと400m以上の地がそれぞれ約４割を占め、50m以下の地が約２割である。町全体としては山林原野が多く、標高50m以下の地は、ほとんどが日本海に面しており、これらの大部分は宅地として利用されている。

気候は、本県では最も温暖な地域であり、桜の開花も県内一早く、田植えも５月上旬から行われる。本格的な冬は12月下旬以降で、積雪量は山間部を除いて最深30cm前後と少ない。そのため植物も暖地性のものが多く自生している。特にタブノ木、オオバグミ、カラスザンショウ等は同町が自生の最北限(註１)とみられている。

また、町の南東には秋田県と山形県にまたがり、東北地方第２位の標高を誇る鳥海山(2,236m)がそびえ、西には象潟海岸の砂丘と、県境小砂川の火山性岩石海岸が形成されている。特に小砂川海岸の断層崖などは、鳥海火山帯の断層群の一部で、南北に細長く延びた地塁、地溝によってできたものと考えられている(註２)。これら火山性岩石が、海水の侵食を受けて現在の奇岩、怪石となり国道７号線沿いにまれに見る景観を誇っている。また、鳥海山は酸性度の強い火山である為、本来、山肌を流れ落ちる水も酸性度が強いが山麓に自生しているブナの原生林によって、酸性水が中和され、良質の水が麓に流出しており、現在でもなお数箇所で涸れることなく湧きでる清水を見ることができる。

このように象潟町は、古来から自然のもたらす大きな恩恵を受け続けてきたと考えられる。それは現在でも多くの自然環境に恵まれた地域であることからも窺い知ることができる。

第２節　歴史的環境

ヲフキ遺跡が所在する象潟町には、原始・古代・中世などの遺跡が多く分布している。これらの遺跡は、日本海に注ぐ川袋川、白雪川、奈曽川などや、その支流の諸河川によって形成された河岸段丘上と鳥海山西麓の台地上に立地している。特に大砂川地区周辺は早くから土器、石器、土偶などの出土が報じられており、埋蔵文化財包蔵地として全県的にもしられている場所である。

象潟町では、旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代の遺跡は、数が少ないものの前期から晩期まで各期を通じて発見されている。これらの遺跡から出土した土器には、青森県を中心に東北北部に分布する円筒土器様式土器、宮城県を中心として東北南部に分布する大木土器様式土器があり、縄文人の広範囲に亘る地域交流をうかがうことができる。 県内でも調査例の少ない弥生時代の遺跡としては、象潟町では九十九島遺跡(14)１箇所であったが、平成元年に発掘調査が行われた上熊ノ沢遺跡(２)でも弥生時代の土器などが発見され、この時代の遺跡が１つ追加された。

古代の遺跡としては、奈良・平安期にわたる製塩遺跡であるカウヤ遺跡(15)、今年度調査されたヲフキ遺跡(１)の２遺跡がある。また、奈良時代(733年)に造営された秋田市高清水にある秋田城への道筋にあり、これに関係する遺跡などがまだ多く埋蔵されているものと思われる。

なお、本遺跡がある大砂川は、金環等が出土した管ケ崎(くだがさき)古墳(註３)の所在地とされている地区である。

中世の遺跡では、 この地を支配した小笠原氏、仁賀保氏、十二頭などの居城の跡である、汐(塩)越城(16)、関新館(17)、国見館(18)などの城館がある。

近世に至っては、江戸期の俳人松尾芭蕉が訪れた蚶満寺(註４)や、 その末寺光岸寺がある。

※（）内の数字は、第１図の表示番号に対応

註１・２　象潟町教育委員会 『象潟町史』 1968(昭和43年)

註３　秋田県『秋田県史』考古編　1977(昭和52年)

註４　853（仁寿３）年、天台宗の慈覚大師円仁の開創と伝えられている。

参考文献

１．奈良修介・豊島 昂 『秋田県の考古学』 郷土考古学叢書　1967(昭和42年)

２．象潟町教育委員会 『象潟町史』 1968(昭和43年)

３．秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図』 1976(昭和51年)

４．秋田県 『秋田県史』 考古編　1977(昭和52年)

５．秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56年)

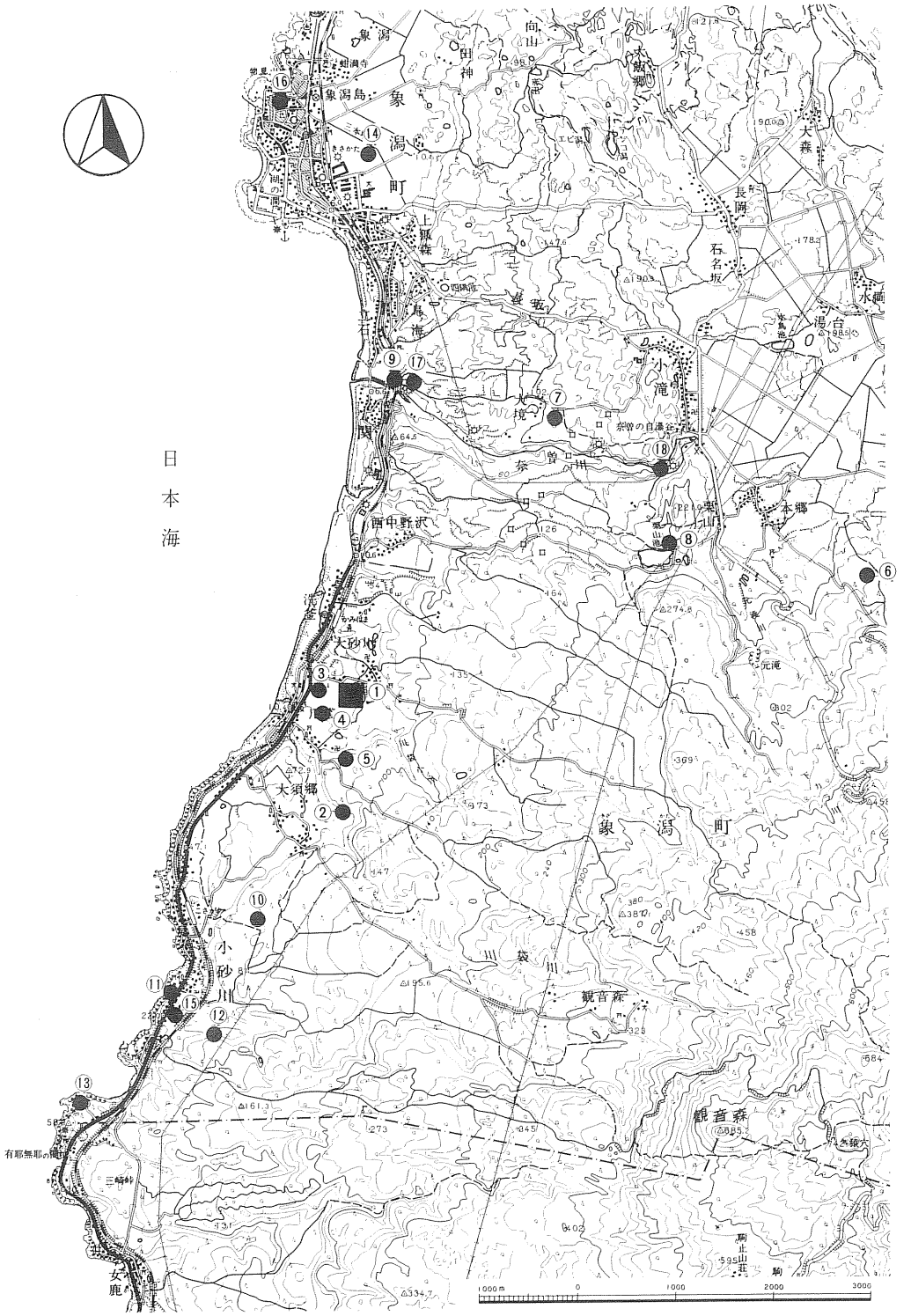
6．秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第103集　1983
（昭和58年）
7．秋田県教育委員会『カウヤ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第123集　1985
（昭和60年）
8．秋田県教育委員会『カウヤ遺跡第２次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第135集
1986（昭和61年）
9．秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第179集　1989
（平成元年）

※参考文献の番号は、表１の文献番号に対応

表１　遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	文献番号
1	ヲフキ	象潟町大砂川字ヲフキ27	縄文・平安	3・7・8・9
2	上熊ノ沢	象潟町大須郷字上熊ノ沢３	縄文・弥生	9
3	菅先	象潟町大砂川字菅先	縄文（中・後期）	3・7・8・9
4	川崎	象潟町川袋字川崎42・44	縄文（中・晩期）	7・8
5	滝ノ下	象潟町川袋字滝ノ下42・44	縄文（中・晩期）	7・8
6	萩坂	象潟町本郷字上の平(萩坂)	縄文（後期）	3
7	ヨシハ沢	象潟町関字ヨシハ沢	縄文（晩期）	3・7・8
8	栗山池	象潟町本郷字栗山池	縄文（晩期）	3・7・8
9	下居権現森	象潟町関字下居権現森	縄文	3・7・8
10	小砂川下向坂	象潟町小砂川字下向坂	縄文	3・7・8
11	小砂川中磯	象潟町小砂川字中磯	縄文	3・7・8
12	小砂川水上	象潟町小砂川字水上	縄文	3・7・8
13	小砂川三崎	象潟町小砂川字三崎	縄文	3・7・8
14	九十九島	象潟町九十九島の内の一つ	弥生	3・7・8
15	カウヤ	象潟町小砂川字カウヤ	縄文・奈良・平安・近世	6・7・8
16	汐(塩)越城	象潟町塩越字二の丸	中世	2・5・8
17	関新館	象潟町関字赤坂	中世	5・8
18	国見館	象潟町横岡字国見館	中世	5・8

※表１の遺跡番号は、第１図の表示番号に対応



第１図　ヲフキ遺跡と周辺遺跡位置図（■がヲフキ遺跡）

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

ヲフキ遺跡は、標高32m前後の台地上に立地している。 現在は水田として利用されており、水田は日本海に向かって低くなる階段状をなしている。

遺跡の現況は、中央部を南流する小川の西縁に沿って、ほぼ南北に農道が走っている。その東・西側が水田で、東側の水田部分は小川以西より一段高くなっている。

なお、調査区全域は過去に行われた水田造成および農道改良工事によって、遺構確認面である地山面まで攪乱がおよんでいた。とくに農道部分は、岩盤の上部まで攪乱されており、遺構、遺物は検出されなかった。西側水田部分もかなり攪乱を受けており、検出遺構は土坑１基で、遺物は若干出土したにとどまり、他の遺構、遺物は東側水田部分から検出された。

また、47ライン以南では、土取りによって全層が部分的に欠如しているが、調査区の基本層序は、56ラインの東西トレンチの北壁の観察からⅦ層に分層できた(第３図参照)。

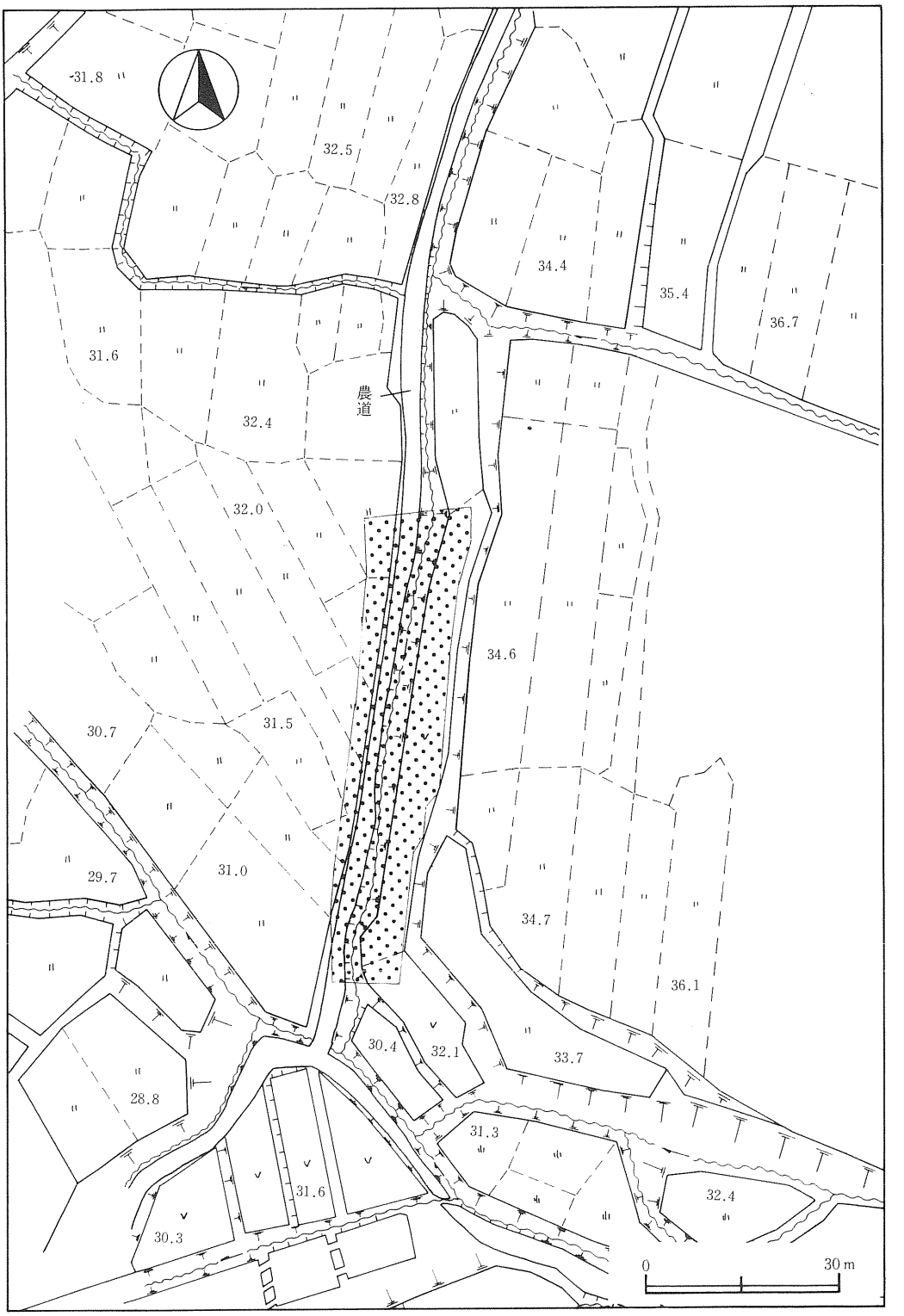
第２節　調査の方法

調査区中央部に打設した任意のグリッド原点をＭＡ50として、この杭から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。また、南北基線には２桁の算用数字、東西基線にはアルファベット２文字の組み合わせを付し、各グリッドの名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

遺構等の実測は、各グリッド杭を利用して遣り方測量で行い、原則として縮尺は20分の１としたが、埋設土器は10分の１とした。 調査区範囲図と農道等の地形図は、平板測量で行い、縮尺は200分の１とした。さらに、これらの遺構平面図と調査範囲図等から遺構配置図など必要な図面を作成した。

第３節　調査の経過

５月８日、調査に先立って、発掘調査説明会を現場にて行う。引き続き午後よりプレハブ設置場所の整地作業にはいる。９日、発掘器材が到着。器材整理の後、範囲確認トレンチの排土



第２図　調査区及び周辺地形図　　調査区域

除去を開始する。10日、56ラインの東側水田部に土層観察の為のトレンチを入れる。12日、範囲確認のトレンチ排土除去作業を終了、続いて農道東側の調査区北端より表土除去を開始する。16日、グリッド杭の打設を行う。土器の遺存状態は極めて悪いが遺物の出土量は多い。17日、基本土層の写真撮影及び図面の作成を行う。ＬＲ57グリッドでは縄文土器が一括して出土した。19日、ＬＲ57グリッドで遺構らしいプランを第Ⅶ層上面で確認しＳＸ01とする。粗堀は、第Ⅱ層～第Ⅲ層の掘り下げを行う。22日、ＬＴ53グリッドの第Ⅶ層上面でＳＲ02を検出した。23日、ＳＲ02の調査を終了し遺物の取り上げを行った。土器が著しく磨滅しているうえ、体部が若干残っている程度である。23日、ＬＴ51グリッドでＳＲ03、04を検出した。昨日から行われた駐車場の造成工事が完了した。25日、路線内の南側に新たな排土場所を設ける。31日、48ラインの東側水田部に土層観察用のトレンチを入れる。ＬＴ47グリッドでＳＫ12を検出した。本日で47ライン以北の粗堀を終了し、遺構の精査及び調査を残すのみである。遺構の確認は地山面まで掘り下げないと不可能であった。本日まで、ＳＸ01からＳＫ12までの12遺構を検出した。６月１日、東側の47ライン以南と、農道西側の表土除去を行う。東西両側の水田より水の浸透があり予想以上の難作業となる。６日、56ラインの農道部に土層観察用の幅1.5ｍのトレンチを入れる。７日、ＳＸ01の北東部にＳＫ14、ＬＴ50グリッドでＳＲ13を検出、調査を行う。土器は上面が削平されている。８日、ＬＳ55グリッドでＳＫ15～18と、ＬＴ48グリッドからＬＳ56グリッドにかけてピットを検出、堀り下げを行う。ＳＫ15からは確認面で玦状耳飾が１点出土した。ＳＫ16では石鏃が１点、人頭大の石の上に乗った状態で出土した。ＳＫ18では底面から石匙が２点出土した。12日、農道西側水田の、北側より粗堀を開始した。ＳＫ12及び周辺ピットの掘り下げを行う。14日、農道西側水田の精査を終了、地山まで攪乱が及んでいることを確認する。遺構はＭＡ55グリッドで検出したＳＫ25のみである。農道部分はトレンチ調査の結果、地山まで削平されており、遺物も現代の陶器と一緒に出土しているため、調査不要と判断した。15日、ＳＫ15は木の根の攪乱であると判明、欠番とした。16日、遺跡遠景撮影の為の準備及び撮影、検出ピットの掘り下げを行う。これらは攪乱によるものが多かった。19日、本日までＳＲ13からＳＫ28までの16遺構を検出した。このうちＳＫ17が木の根の攪乱、ＳＱ19、ＳＱ20、ＳＱ21、ＳＫ27が現代の攪乱と判明、欠番とした。21日、ＳＫ25の調査終了をもって農道西側の全調査を終える。22日、早朝、日の出とともに鳥海山五合目鉾立に登り遺跡の遠景撮影を行う。23日、調査区全景撮影の準備及び撮影。29日、検出された遺構の実測作業及び調査区地形の平板測量を完了した。30日、発掘器材の搬出、プレハブの撤去をして、ヲフキ遺跡の発掘調査を終了した。

第４章　調査の記録

本調査では、土坑17基、土器埋設遺構４基、その他の遺構１基の計22遺構が検出された。このうちＳＲ03・13は第Ⅲ層中で検出されたが、他の遺構は第Ⅶ層上面で検出された。遺物は第Ⅰ～Ⅲ層及び遺構覆土中から縄文時代の土器と石器、平安時代の土師器と須恵器が出土した。

第１節　検出遺構と遺物

１．縄文時代

(1) 遺構とその出土遺物

①土坑

ＳＫ０５(第３・４図、図版５)

ＬＳ57グリッドで確認された。平面形は長軸(北西－南東)110cm×短軸(北東－南西)95cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－72°－Ｗ、確認面からの深さ68cmである。底面は幾分起伏をもち、東から西へ傾斜している。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は７層に分けられた。１～４層は炭化物少量と黄色土、褐色土粒子を多量に含み、５層は黒褐色土粒子を少量含んでいる。また、各層とも堅くしまっており、２層には長さ７～10cmの細長い礫２個と拳大の礫１個が含まれている。人為的埋土と考えられる。遺物(第８・11図、図版15・19)は全層から縄文土器片が45片と２層から石鏃１点が出土した。１は深鉢形土器の口縁部、２～４は深鉢形土器の体部の破片である。１と４にはＬＲ縄文が横位回転施文され、２と３にはＲ撚糸文が施されている。いずれも胎土に繊維を含み軽い土器である。Ｓ１は凹基無茎鏃である。両面に二次加工を施しているが、片面には素材の剝離面を残している。長さ25mm、幅19mm、厚さ５mmで、重さ1.19ｇである。石質は頁岩である。

ＳＫ０６(第３・４図、図版５)

ＬＲ57、ＬＳ57グリッドにかけて確認された。平面形は長軸(南西－北東)110cm×短軸(北西－南東)67cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－84°－Ｗ、確認面からの深さは９～20cmである。底面はほぼ平坦で、西から東へ傾斜している。壁はほぼ垂直に近く立ち上がっている。覆土は２層に分けられ、両層とも炭化物と赤褐色土粒子を含み、堅くしまっている層である。遺物は縄文土器が１片出土したが、細片でもろく図示できなかった。

ＳＫ０７(第３・４図、図版５)

ＬＲ56・57、ＬＳ56グリッドにかけて確認された。平面形は長軸(北東－南西)128cm×短軸

(北西－南東)57cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－25°－Ｅ、確認面からの深さ８～15cmである。底面はほぼ平坦で、北から東へ傾斜している。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。両層には、黄褐色土ブロックが混在しており、人為的埋土と考えられる。遺物(第８図、図版15)は１層から縄文土器片が16片出土した。５は深鉢形土器の口縁部の破片で、Ｌ撚糸文が斜位回転施文さてれいる。６・７は体部の破片で、ＬＲ縄文が横位回転施文されている。８はドングリ圧痕が認められる底部の破片である。

ＳＫ０８(第３・４図、図版６)

ＬＳ56グリッドで確認された。平面形は長軸(北西－南東)78cm×短軸(北東－南西)49cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－50°－Ｗ、確認面からの深さ６cmである。底面は平坦で、その東側にはピットがあり、ピットを塞ぐ様に、長さ32cm、幅18cmの偏平な河原石とその上に拳大の礫があり、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は１層で、層下部にも拳大の礫が２個含まれており、炭化物を少量含み、黄褐色土ブロックと暗褐色土粒子が混在しており、人為的埋土と考えられる。遺物(第８図、図版15)は縄文土器片が13片出土した。９は深鉢形土器の口縁部、10は体部の破片で、いずれもＬＲ縄文が横位回転施文されている。また、９の口唇部にはＬＲ縄文が回転施文されている。

ＳＫ０９(第３・４図、図版６)

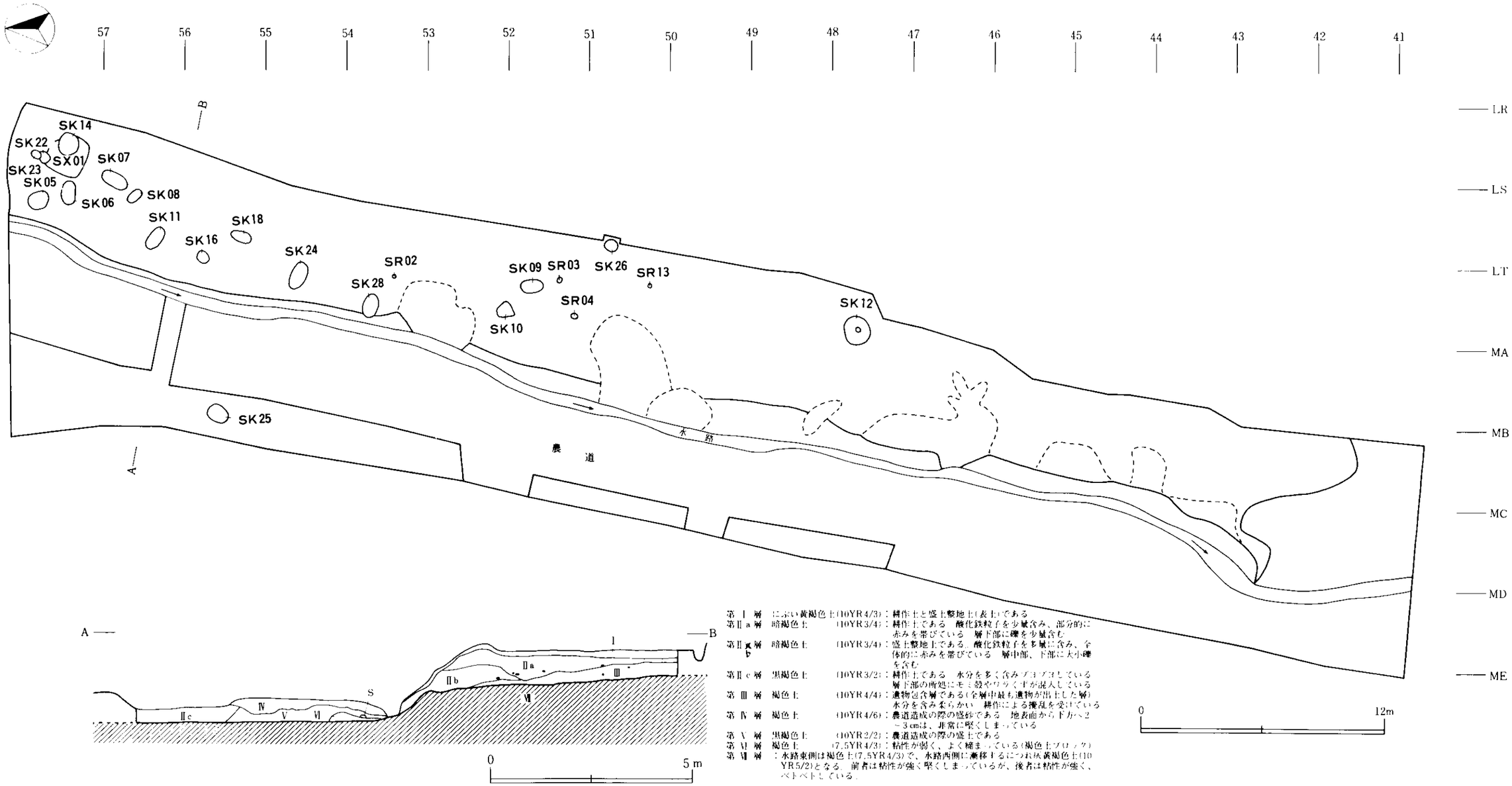
ＬＴ51グリッドで確認された。平面形は長軸(北西－南東)107cm×短軸(北東－南西)66cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－15°－Ｗ、確認面からの深さ８cmである。底面はほぼ平坦であるが北側と南側にピットがある。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層である。炭化物と黄褐色土ブロックを少量含み、断面図右側のピットには黄褐色土ブロックが多量に含まれ、左側のピットには礫が１個含まれている。人為的埋土と考えられる。遺物(第８図、図版15)は縄文土器片が14片出土した。11・12は深鉢形土器の口縁部の破片である。11は細い棒状工具による沈線が斜めに平行して施されている。12はＲ撚糸文が縦位回転施文されている。

ＳＫ１０(第３・４図、図版７)

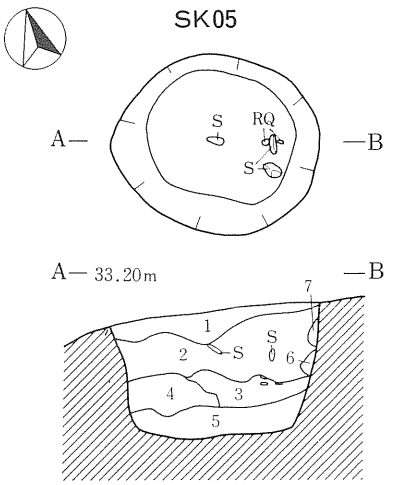
ＬＴ51･52グリッドにかけて確認された。平面形は長軸(北西－南東)80cm×短軸(北東－南西)62cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－29°－Ｗ、確認面からの深さ６cmである。底面はほぼ平坦であるが、北側にピットをもっている。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は１層で、炭化物少量と黄褐色土ブロック及び礫を含み、堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ１１(第３・５図、図版７)

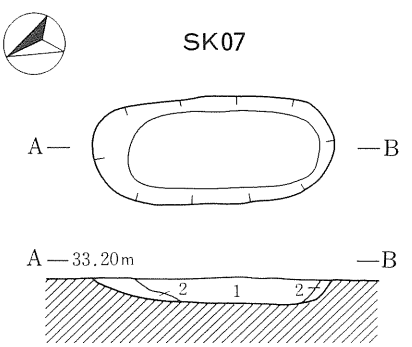
ＬＳ56グリッドで確認された。平面形は長軸(北西－南東)119cm×短軸(北東－南西)58cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－58°－Ｗ、確認面からの深さは10～18cmである。底面は西側から東へ傾斜している。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は１層で、炭化物少量と黄褐色土ブ



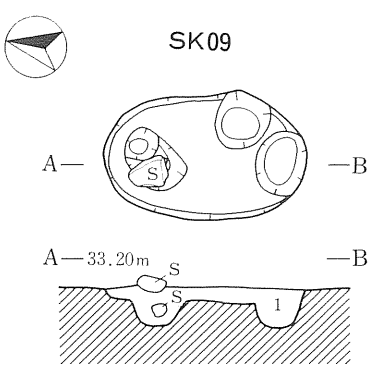
第3図　遺構配置図・遺跡基本土層図



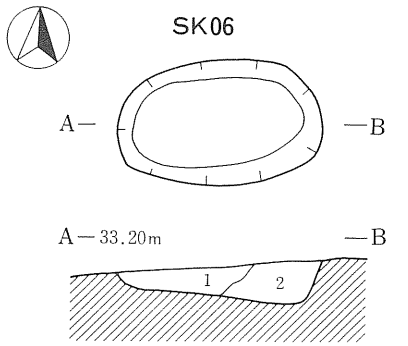
1層　暗褐色土(10YR 3/3)
2層　暗褐色土(10YR 3/4)
3層　黒褐色土(10YR 3/2)
4層　にぶい黄褐色土(10YR 5/4)
5層　黄褐色土(10YR 5/6)
6層　黄褐色土ブロック(10YR 5/6)
7層　黒褐色土ブロック(10YR 3/1)



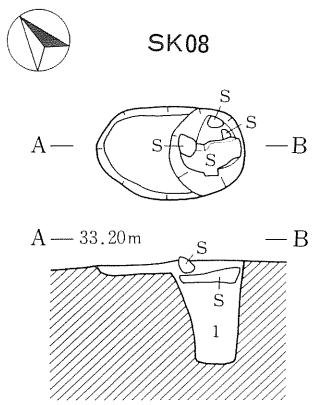
1層　黒褐色土(10YR 2/3)
2層　暗褐色土(10YR 3/3)



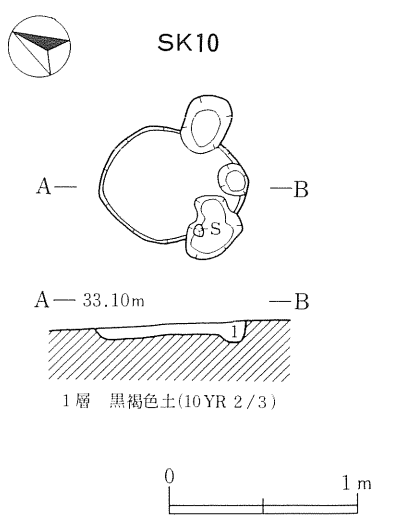
1層　黒褐色土(10YR 2/3)



1層　暗褐色土(10YR 3/3)
2層　にぶい黄褐色土(10YR 4/3)



1層　黒褐色土(10YR 2/3)



1層　黒褐色土(10YR 2/3)

第４図　SK05・06・07・08・09・10

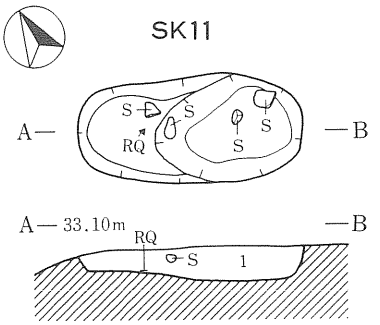
ロック、拳大前後の礫数個が混入しており、人為的埋土と考えられる。遺物(第８・11図、図版15・19)は縄文土器片が18片と、底面から石鏃が１点出土した。13・14は深鉢形土器の口縁部、15は体部の破片である。13はＲＬ縄文が横位回転施文されている。14は器面が磨滅しているが、縦方向に浅い沈線が施文されているのがわずかに見られ、口唇部には刻み目が加えられている。15はＬ撚糸文が縦位回転施文されている。Ｓ２は凹基無茎鏃である。両面とも全面に二次加工が施されている。長さ24mm、幅15mm、厚さ3mm、重さ0.91gである。石質は珪質頁岩である。

ＳＫ１２(第３・５図、図版８)

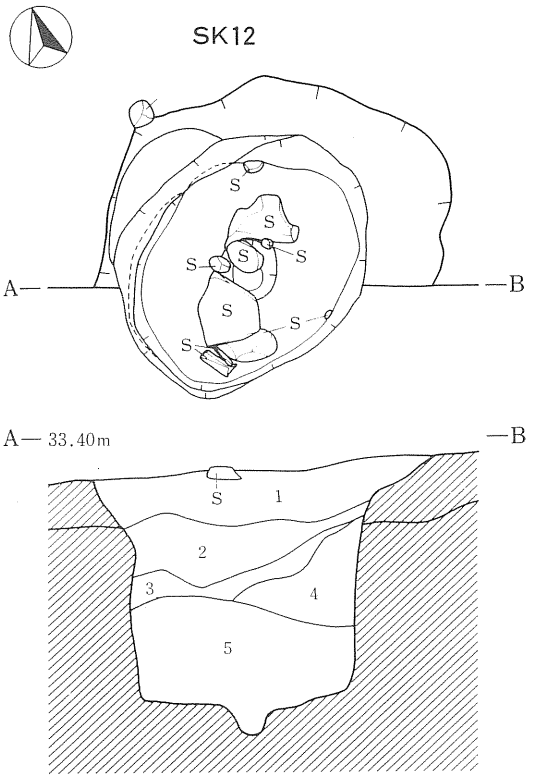
ＬＴ47グリッドで確認された。平面形は長軸(北東－南西)147cm×短軸(北西－南東)118cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－66°－Ｅ、確認面からの深さ126cmである。底面はほぼ平坦で、中央部にピットがあり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は５層に分けられた。５層は黄褐色土ブロックを多く含む黒色土で、人為的埋土と考えられ、５層部分を埋め戻して平坦面を作り出した後、その上面を底面として再度利用された土坑と思われる。５層以上の層も人為的埋土と考えられる。したがって、ピットのあり方と土坑の深さから、当初陥し穴として作り、その後別の目的に使用された土坑と考えられる。遺物(第８・11図、図版15・19)は縄文土器片が93片と石鏃１点、欠損した石槍１点が出土した。16は深鉢形土器の口縁部の破片で、17～21は体部の破片である。17はＲ撚糸文が縦位、19～21はＬＲ縄文が横位回転施文されている。Ｓ４は凹基無茎鏃である。基部の抉りは浅く、鏃身が反っている。両面に素材の剝離面を残し、その周縁に二次加工を施している。長さ31mm、幅17mm、厚さ4mm、重さ1.82gである。石質は珪質頁岩である。Ｓ５は両面とも全面に二次加工を施し、先端部を尖らせている。全体の形状は木葉形をなすものと思われる。石質は黒色頁岩である。

ＳＫ１４(第３・６図、図版９)

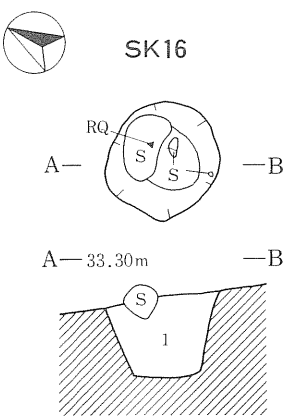
ＬＲ57グリッドで確認された。平面形は長軸(北東－南西)121cm×短軸(北西－南東)101cmの楕円形を呈し、 長軸方位Ｎ－70°－Ｅ、確認面からの深さは17cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。両層とも堅くしまっており、炭化物と褐色土粒子を少量及び2.5～23cmの礫４個を含んでいる。人為的埋土と考えられる。遺物(第９・11図、図版17・19)は縄文土器片が45片と石鏃１点が出土した。46は深鉢形土器の体部～口縁部の破片で、ＬＲ縄文を口縁から数cm斜位に転がした後、縦位回転施文している。47・48は体部の破片で、47はＬ撚糸文が斜めと縦方向に、48はＲ撚糸文が斜めに施文されている。49は底部、50は底部～体部の破片であり、両方の底部は上げ底である。49はＬＲ縄文が、50はＬ撚糸文が縦位回転施文されている。これらの土器は胎土に繊維を含んでいる。Ｓ３は平基無茎鏃である。両面とも二次加工されているが、素材の剝離面を残している。気さ30mm、幅14mm、



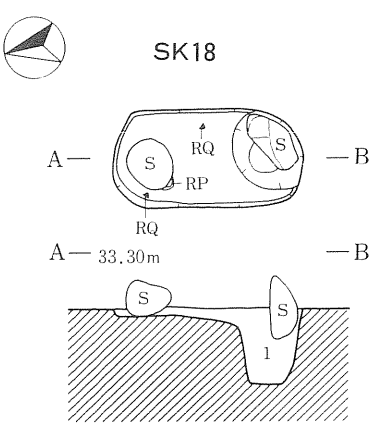
１層　暗褐色土(10YR 3/4)



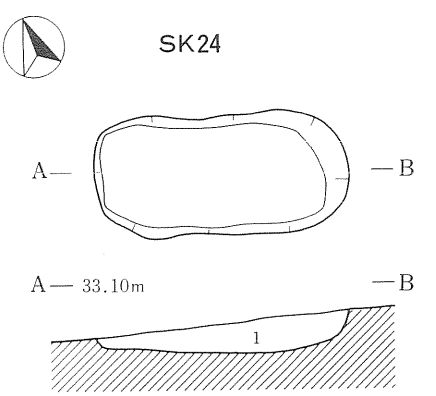
１層　黒褐色土(10YR 2/2)
２層　黒褐色土(10YR 2/2)
３層　暗褐色土(10YR 3/3)
４層　褐色土(10YR 4/4)
５層　灰黄褐色土(10YR 4/2)



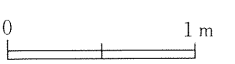
１層　黒褐色土(10YR 2/3)



１層　黒褐色土(10YR 2/3)



１層　暗褐色土(10YR 3/3)



第５図　SK11・12・16・18・24

厚さ４㎜、重さ1.60gである。石質は珪質頁岩である。

ＳＫ１６(第３・５図、図版10)

ＬＳ55グリッドで確認された。平面形は径60cmのほぼ円形を呈しており、確認面からの深さ43cmである。底面はほぼ平坦で壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土には確認面上に露出している36cmほどある礫１個と３～11cmの礫２個を含んでいる。遺物(第11図、図版19)は一番大きい礫上面から石鏃が１点出土した。Ｓ６は凹基無茎鏃である。両面とも全面に二次加工が施されている。長さ27㎜、幅15㎜、厚さ５㎜、重さ1.44gである。石質は頁岩である。

ＳＫ１８(第３・５図、図版10・11)

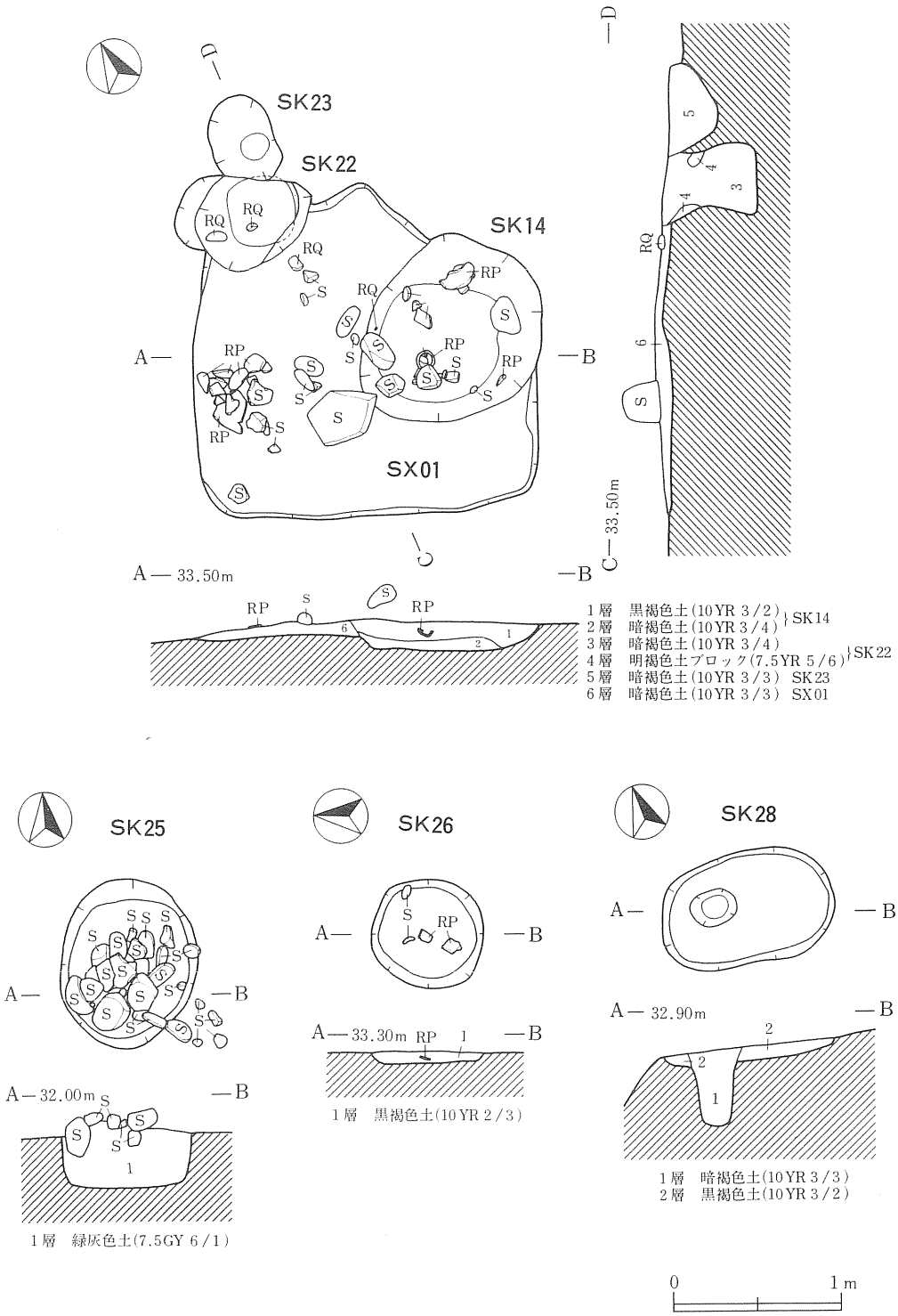
ＬＳ55グリッドで確認された。平面形は長軸(北東－南西)100cm×短軸(北西－南東)52cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－13°－Ｅ、確認面からの深さ５cmである。底面はほぼ平坦であり、南壁下に長軸46cm×短軸35cm、底面からの深さ35cmの掘り込みがある。この掘り込みには、大きさ36cm程の礫１個が縦に埋設されている。また、北壁近くに大きさ28cm程で楕円形を呈する礫１個を配している。壁は急傾斜で立ち上がっている。遺物(第11図、図版19)は縄文土器片が４片と底面から石匙が２点出土した。なお、土器は細片のうえに磨滅しており図示できなかった。Ｓ７は縦型、Ｓ８は横型の石匙である。いずれも両面に素材の剥離面を大きく残し、つまみ部はバルブ付近に作出されている。両方とも石質は珪質頁岩である。

ＳＫ２２(第３・６図、図版11)

ＬＲ55グリッドで確認された。平面形は長軸(北西－南東)84cm×短軸(北東－南西)59cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－70°－Ｗ、確認面からの深さ55cmである。底面は丸底ぎみであり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層である。炭化物と小礫及び明褐色土ブロックを少量含み、堅くしまっている層である。人為的埋土と考えられる。遺物（第８・11図、図版15・19）は縄文土器片が12片と凹石１点、磨石１点が出土した。22は深鉢形土器の頸部の破片で、粘土紐による隆帯が１条貼付され、その上には指頭圧痕が施されている。Ｓ９は円礫を素材とした凹石で、片面の１箇所に凹が作られている。石質は凝灰岩である。Ｓ10は楕円礫を素材とした磨石である。片面と長軸方向の片側縁が磨られ、平滑な面となっている。石質は安山岩である。

ＳＫ２３(第３・６図、図版11)

ＬＲ57グリッドで確認された。平面形は長軸(北－南)54cm×短軸(東－西)38cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－３°－Ｅ、確認面からの深さ29cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層である。炭化物と褐色土粒子を少量含み、堅くしまっている。人為的埋土と考えられる。遺物は縄文土器片が７片出土したが、細片で磨滅しており図示できなかった。



第６図　SK14・22・23・25・26・28、SX01

ＳＫ２４(第３・５図、図版11)

ＬＳ54、ＬＴ54グリッドにかけて確認された。平面形は長軸(北西－南東)134cm×短軸(北東－南西)65cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－68°－Ｗ、確認面からの深さは北西側で７cm、南東側で19cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は援やかに立ち上がっている。覆土は１層で、炭化物少量と黄褐色土ブロックと褐色土粒子を多量に含み、堅くしまっている。遺物(第８図、図版15)は縄文土器片が60片出土した。23は深鉢形土器の口縁部の破片で、ＬＲ縄文が横位回転施文されている。24・25は体部の破片である。24はＬ撚糸文が、25はＲ撚糸文が施されている。

ＳＫ２５(第３・６図、図版12)

ＭＡ55グリッドで確認された。覆土上部に礫が組まれており、その平面形は北東－南西に長い楕円形を呈している。また、崩れ落ちたと思われる礫が、東・南東側にある。これらの礫を取り除いた下部には、平面形が長軸(北－南)100cm×短軸(東－西)82cmの楕円形を呈し、長軸方位が磁北を向き、確認面からの深さ30cmを測る土坑が構築されている。土坑底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に立ち上がっている。覆土は１層で、黒褐色土と褐色砂質土が不規則に混入する暗灰色粘質土であり、人為的埋土と考えられる。遺物(第８図、図版16)は土坑上部の礫と礫の間と、覆土にめり込んだ礫下部から縄文土器片が27片出土した。26・27はやや波状をなすと思われる深鉢形土器の口縁部の破片で、口縁に平行に４条の沈線が施され、この直下には、指頭圧痕が施された隆帯が１条施されている。28・29は体部の破片で、横方向に数条の沈線が施されている。30は体部の破片で、横方向に１条の沈線と斜めに刻み目をもつ隆帯１条が施されている。31・32は体部の破片で、横方向に２条の粘土紐が平行に貼付され、その下にはＲＬ縄文が横位回転施文されている。粘土紐は剝落している。

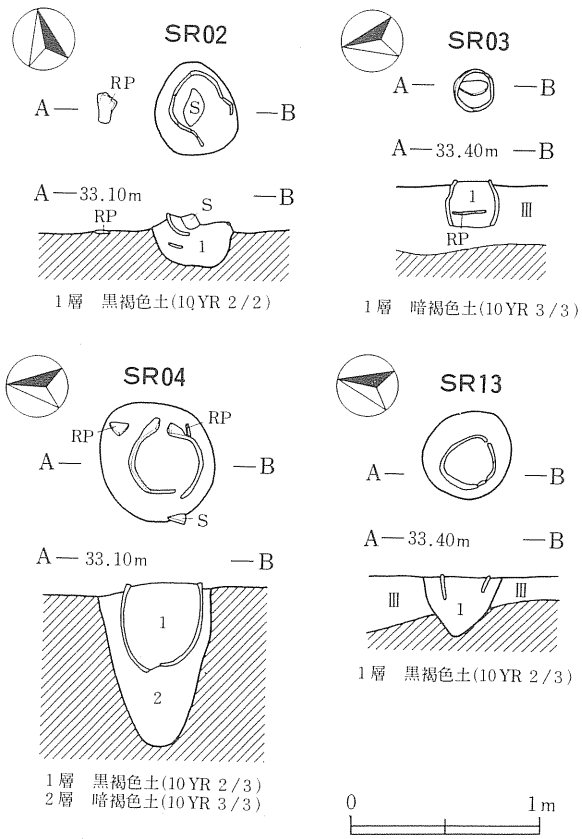
ＳＫ２６(第３・６図)

ＬＳ50グリッドで確認された。平面形は径約66cmの円形を呈し、確認面からの深さ５～７cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層である。多量の炭化物と黄褐色土粒子を少量含み、しまりの弱い軟質土である。人為的埋土と考えられる。遺物(第８・９図、図版16)は縄文土器片が102片出土した。33・34は深鉢形土器の体部～口縁部の破片で、ＲＬ縄文が横位回転施文されている。35～44は体部の破片である。36・40・41はＬＲ縄文が横位に、39は縦位に回転施文され、37はＬＲ原体の側面圧痕が斜めに施されている。42は沈線が施されている。

ＳＫ２８(第３・６図、図版12)

ＬＴ53グリッドで確認された。坑中央から西寄りを、径46cm、深さ46cmのピットに切られている。平面形は長軸(東－西)105cm×短軸(北－南)66cmの楕円形を呈し、長軸方位Ｎ－70°－Ｗ、確認面からの深さ８cmである。底面はほぼ平坦であり壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は

炭化物と褐色土ブロックを少量含み、堅くしまっている。人為的埋土と考えられる。遺物(第９・11図、図版16・19）は縄文土器片が15片と凹石１点が出土した。43～45は深鉢形土器の体部の破片である。43にはＬＲ縄文、44にはＬＲ原体の撚糸文、45にはＲ撚糸文が縦位回転施文されている。いずれも胎土には繊維を含んでいる土器である。　Ｓ11は凹石で棒状の礫の両面に敲打による凹みがあり、片面には磨面も認められる。石質は凝灰岩である。



第７図　SR02・03・04・13

②土器埋設遺構

ＳＲ０２(第３・７図、図版13)

ＬT53グリッドで確認された。土器は正立して埋設されていたが、削平を受けてその大半を失っていた。土器埋設穴は平面形が径約25cmの円形を呈し、確認面からの深さ14cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は炭化物を少量含む黒褐色土である。埋設土器は深鉢形土器の底部～体部下半の破片のみで、その残存部位の器高は60mmである。なお、埋設土器は細片で磨滅が著しく、その上もろいため復原図示できなかった。

ＳＲ０３(第３・７図、図版13)

ＬＴ51グリッドで確認された。土器は倒立して埋設されていたが、削平を受けて底部を失っていた。土器埋設穴は土器の大きさとほぼ同じで、平面形が径11cmの円形を呈し、確認面からの深さは17cmである。底面は平坦で、壁は土器外面に接している。覆土は炭化物を少量含む褐色土である。埋設土器(第10図、図版19)の59は深鉢形土器の体部で、指頭圧痕の施された隆帯が１条めぐり、ＬＲＬ縄文が横位回転施文されている。残存部位の器高は120mmである。

ＳＲ０４(第３・７図、図版13)

ＬＴ51グリッドで確認された。土器は正立して埋設されていたが、削平を受けて上部を失っていた。土器埋設穴は平面形が径約30cmの円形を呈し、確認面からの深さ43cmである。底面は

丸底で、壁は急傾斜で立ち上がっている。土器埋設穴の覆土は炭化物と褐色土粒子を多量に含む暗褐色土で、土器内の覆土は炭化物と褐色土粒子を少量含む黒褐色土である。両覆土ともしまりの弱い軟質土である。埋設土器は深鉢形土器の体部である。残存部位の器高は240mmである。なお、埋設土器は非常にもろく、取り上げの際に細片となったため、図示することができなかったが、取り上げ前の観察で、器面にはわずかに木目状撚糸文が縦位回転施文されているのが認められた。

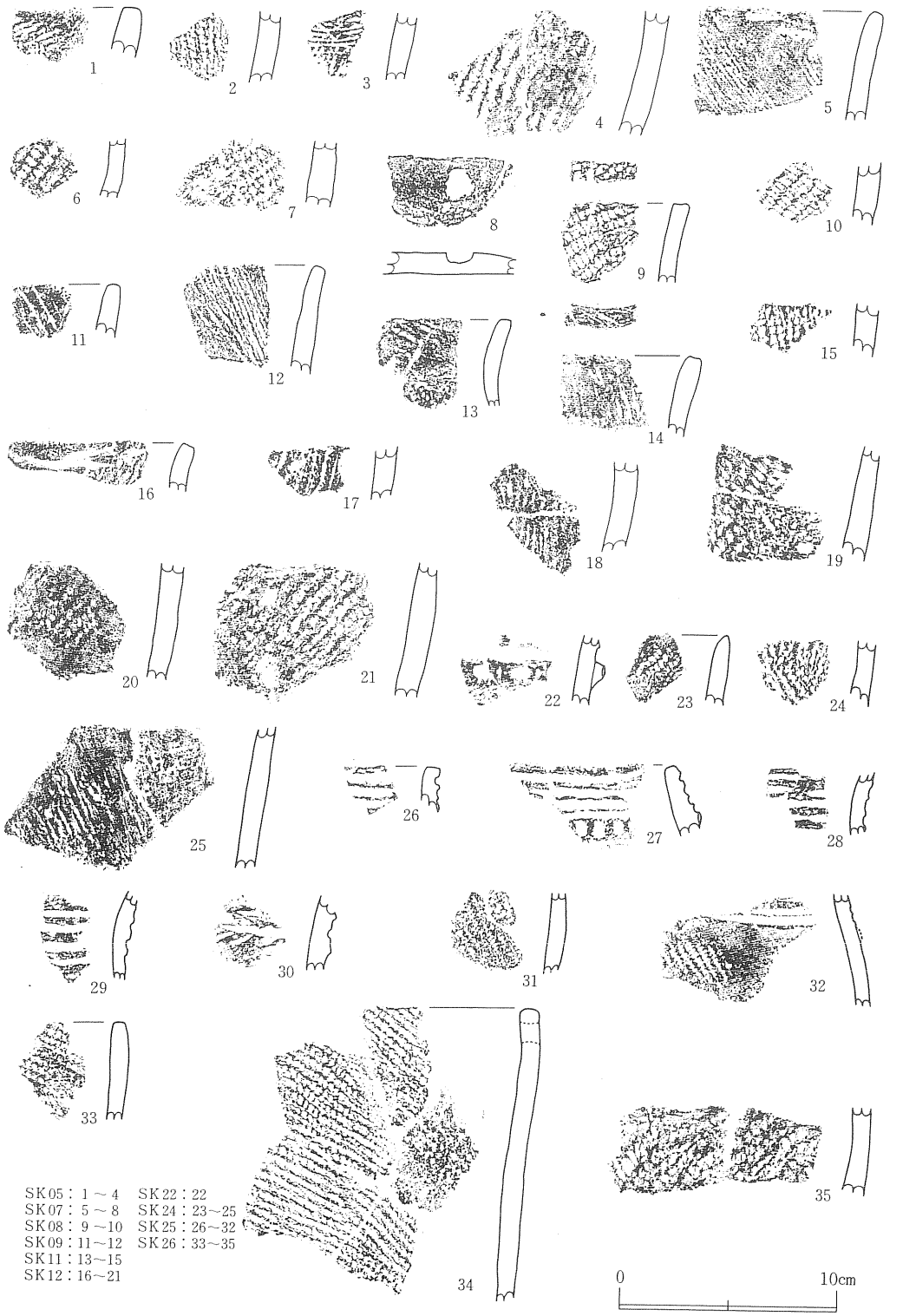
ＳＲ１３(第３・７図、図版13)

ＬＴ50グリッドで確認された。土器は正立して埋設されていたが、削平を受けてその大半を失っていた。土器埋設穴は平面形が径約24cmの円形を呈し、確認面からの深さ17cmである。底面は丸底で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は炭化物と褐色土粒子を少量含む黒褐色土で、堅くしまっている。埋設土器は深鉢形土器の体部である。残存部位の器高は70mmである。なお、埋設土器は非常にもろく、取り上げの際に細片となったため、図示することができなかった。

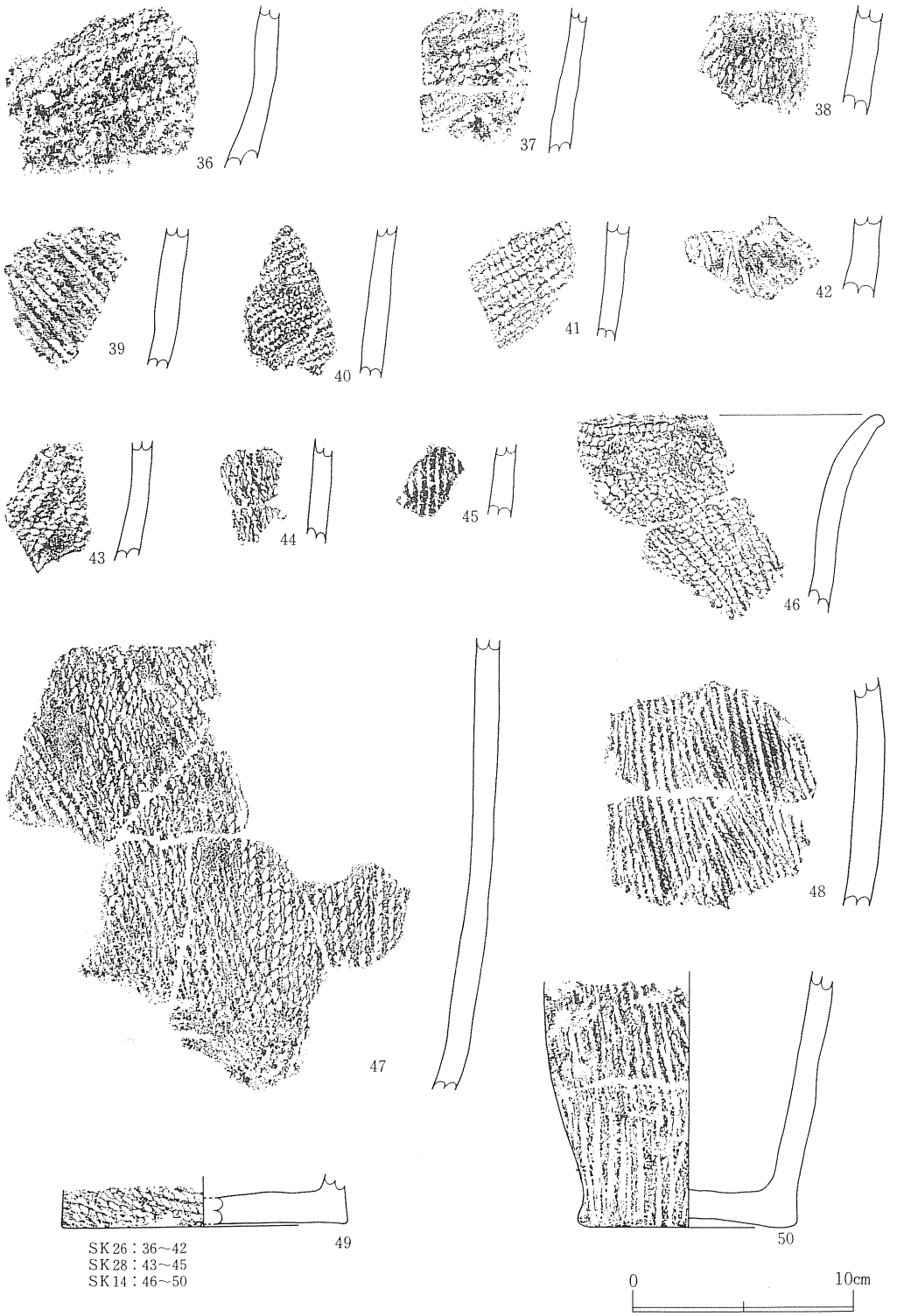
③その他の遺構

ＳＸ０１(第３・６図、図版14)

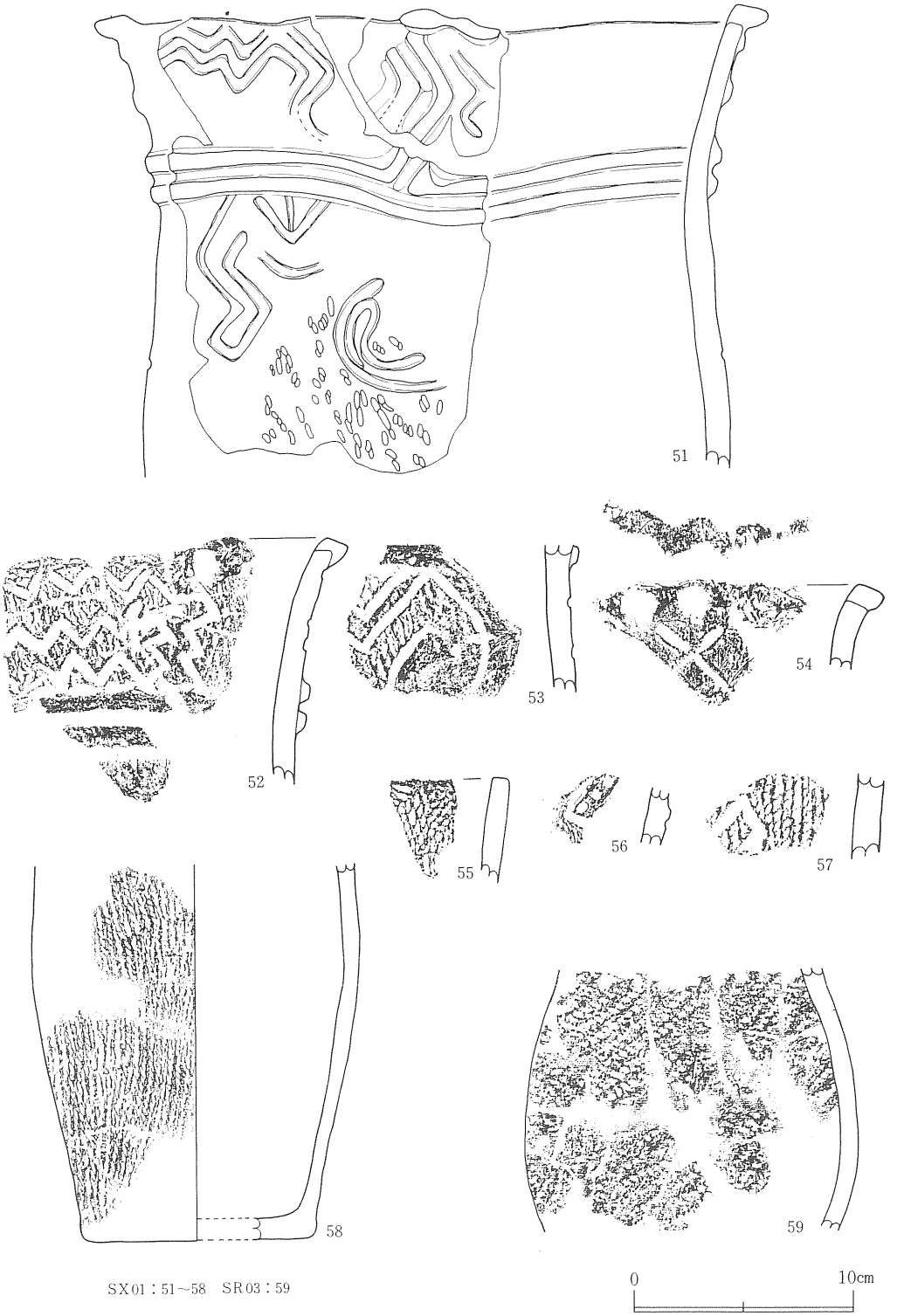
ＬＲ57グリッドで確認された。東側をＳＫ14に、北側をＳＫ22に切られている。大きさは残存する部位から長軸(北西ー南東)204cm×短軸(北東ー南西)176cmを測り、その平面形は隅丸方形を呈している。長軸方位はＮ－60°－Ｗで、確認面からの深さは約８cmである。 底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層で堅くしまっている。遺物(第10・11図、 図版18)は南西隅の１層上面から一括して出土した縄文土器片150片と、ＳＫ22寄りから出土した凹石１点である。51～53は同一個体で、深鉢形土器の体部～口縁部の破片である。口唇部には部分的に扁平な粘土塊の突帯が付けられており、口頸部にも粘土紐による２条１組の隆帯が波状に貼付され、この隆帯は口唇部の突帯に対応する位置で垂下する。体部と頸部は２条１条の隆帯で画される。体部には地文として縄文が施され、上半には波状や弧状の沈線文が描かれている。54は波状をなすと思われる深鉢形土器の口縁部の破片で、竹管状工具の外側で引かれた沈線が『×』状に施されている。 55は平縁をなすと思われる深鉢形土器の口縁部の破片で、Ｌ撚糸文が施文されている。56と57は体部の破片である。56は縄文を地文として、沈線と円形竹管文が施文され、57はＲＬ縄文を地文として、沈線が施されている。58は底部～体部の破片である。底部は平坦で、図上復原による底径は17cmである。体部にはＲ撚糸文が縦位回転施文されている。Ｓ12は扁平な礫を素材としており、両面には敲打による凹みを有している。石質は凝灰岩である。



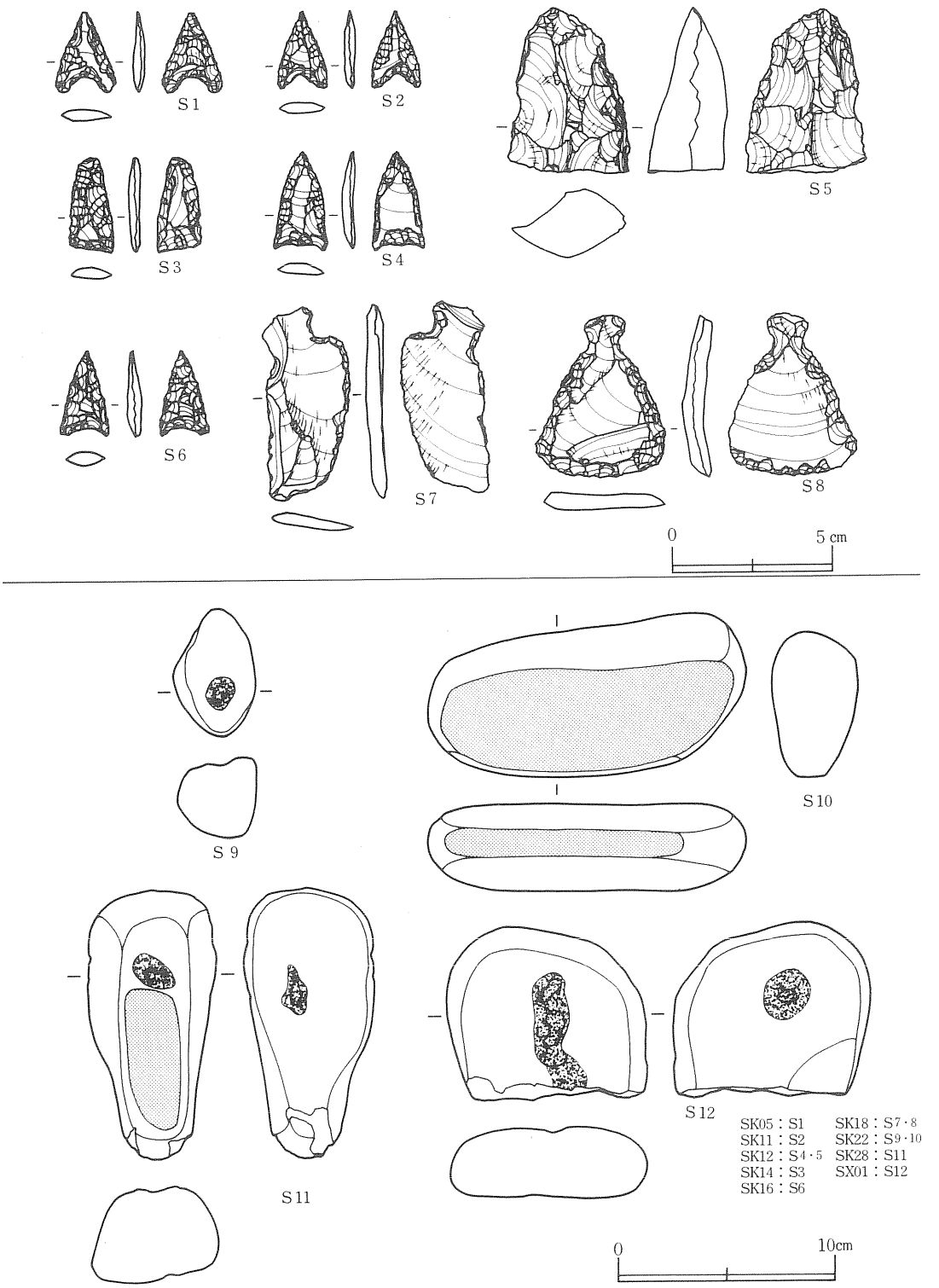
第８図　遺構内出土土器（１）



第９図　遺構内出土土器（２）



第10図　遺構内出土土器（３）



第11図　遺構内出土石器

（2）　遺構外出土遺物

①土　器（第12～18図、図版20～27）

出土した土器資料は破片で磨滅したものが多く、全体の形状を知り得ることのできる接合資料はなかったが、以下のとおり第Ⅰ類～第Ⅴ類に類別できた。

第Ⅰ類：粘土紐が貼付されている土器を本類とした(第12図、図版20)。

60・61は同一個体で、口縁が大きな波状をなすと思われる深鉢形土器の体部～口縁部の破片である。口縁に沿って粘土紐が梯子状に貼付され、この他にも粘土紐貼付が見られるが、本体の文様は不明である。62・63は体部上半から大きく外反し、口縁が大きな波状をなすと思われる深鉢形土器の口縁部の破片である。いずれも口唇部には円形竹管文が施された鋸歯状装飾体をもち、ＬＲ縄文を地文として、鋸歯状に折り曲げられた粘土紐が２本並列して、口縁に平行に貼付されている。63には２本並列する鋸歯状の粘土紐が間隔をおいて２段にわたって貼付されいる。また、粘土紐３本が口縁に平行に貼付され、上段の２本の間には短くちぎられた粘土紐が数本、縦に等間隔に貼付されている。64・65は深鉢形土器の体部の破片である。地文はＬＲ縄文で、63と同様に鋸歯状に粘土紐が２本並列して貼付されている。66は口縁が大きな波状をなすと思われる深鉢形土器の口縁部の破片である。口唇部には円形竹管文が施された環状装飾体をもち、ＬＲ縄文を地文として、山形に折り曲げられた粘土紐が２本並列して貼付されている。67・68は同一個体で、口縁部が頸部からゆるく外反する深鉢形土器の口縁部及び体部の破片である。横方向に施された羽状縄文を地文として、波状をなす粘土紐が口縁に平行に貼付されており、67は口唇部に粘土紐１本と波状をなす粘土紐が並列して貼付されている。69は深鉢形土器の口縁部の破片である。外反する口縁部の口唇部には渦巻状をなす粘土紐と短くちぎられた粘土紐が貼付され、屈曲部には波状をなすと思われる粘土紐の末端が見られる。70～72は深鉢形土器の頸部の破片である。70はＬＲ縄文を地文として、粘土紐が横方向に貼付され、それに重ねて『ハ』字状に粘土紐を貼付している。71は幅広の粘土紐が横方向に貼付され、その上の中央に沈線が加えられて２条の隆帯が作出されている。この隆帯上にはＲ撚糸文の側面圧痕、隆帯下方の器面にはＲ撚糸文が縦位回転施文され、隆帯の上下には隆帯に平行に沈線を加えている。72は粘土紐を横方向に貼付して隆帯を作出し、その上に指頭圧痕を施している。隆帯の上方の器面にはＬＲ縄文が施されている。

第Ⅱ類：沈線文が施されている土器を本類とした(第13・14図、図版21・22)。

73は体部上半からゆるやかに外反し、口縁が小波状をなすと思われる深鉢形土器の体部～口縁部の破片である。ＬＲ縄文を地文として、鋸歯状と渦巻状の沈線文が施されている。74・75は深鉢形土器の体部～口縁部の破片である。74は鋸歯状の沈線文が横と縦方向に連続して施され、75はＬＲ縄文を地文として、沈線が施され幾何学的文様が描かれている。76～78は深鉢形

土器の口縁部と体部の破片で、菱形をなすと思われる沈線文が施されている。79～83は深鉢形土器の体部の破片で、ＬＲ縄文を地文として、クランク状の沈線文が施されている。84～86は深鉢形土器の口縁部と体部の破片で、横方向に波状をなす沈線文が施されており、84・86はＬＲ縄文を地文とし、85はＲ撚糸文を地文としている。87は深鉢形土器の口縁部の破片で、ＬＲ縄文を地文として、口縁に平行に２条の沈線文と縦に２条の波状をなす沈線文が施されている。88～92は深鉢形土器の口縁部の破片である。88・89は口縁に平行に３条の沈線文が施され、90・91は縄文を地文として、口縁に平行に1条の沈線文が施されている。また、90は『×』状の沈線文が施されており、91は斜めにも沈線文を施している。92は口縁に平行に２条の沈線文とその間に波状をなす沈線文を施している。また、肥厚する口唇部には刻み目が加えられている。93・94は深鉢形土器の体部の破片で、93は横方向に施された羽状縄文を地文として、横方向に数条の沈線文が施され、94は横方向に数条の沈線文とこの下に縦方向に弧状をなす沈線文が等間隔に施されている。96～99は深鉢形土器の体部の破片である。竹管状工具の外側で沈線文が施文され、その沈線文に沿って円形竹管文が施されている。100は頸部で『く』字状に屈曲し、口縁部が外反する深鉢形土器の体部～口縁部の破片である。先端の平らな櫛歯状工具により、６～７本の沈線がクランク状に施されている。全体の文様は幾何学的文様で、右下がりと左下がりに施され縦方向に菱形文が連続して施されている。101～105は深鉢形土器の口縁部の破片である。101は鋸歯状をなす沈線文が施され、肥厚する口唇部には円形竹管文が等間隔に施されている。102は先端の平らな櫛歯状工具により、沈線が斜めに施されている。103～105は格子目状の沈線が施されている。106～111は深鉢形土器の体部の破片である。いずれも格子目状の沈線が施されている。

第Ⅲ類：押引文が施されている土器を本類とした（第13図95、第15図112～117、 図版23・24）。

95は深鉢形土器の体部の破片で、２条の平行沈線が施された下に、半截竹管による押引文が横方向に１条施されて、爪形様に施されている。 112～~~135~~118は同一個体である。112は口縁部、113は頸部、114～116は体部の破片で、各部位には半截竹管による押引文が２条並列して施されている。また、114の弧状を呈する押引文の内側に沿って幅広の粘土紐が貼付されており、その上に沈線を加えている。115・116はＬＲ縄文を地文として、体部には押引文が横方向に施されている。117は深鉢形土器の口縁部の破片で、口縁に平行に２条の沈線文とその間に半截竹管による押引文が施されている。

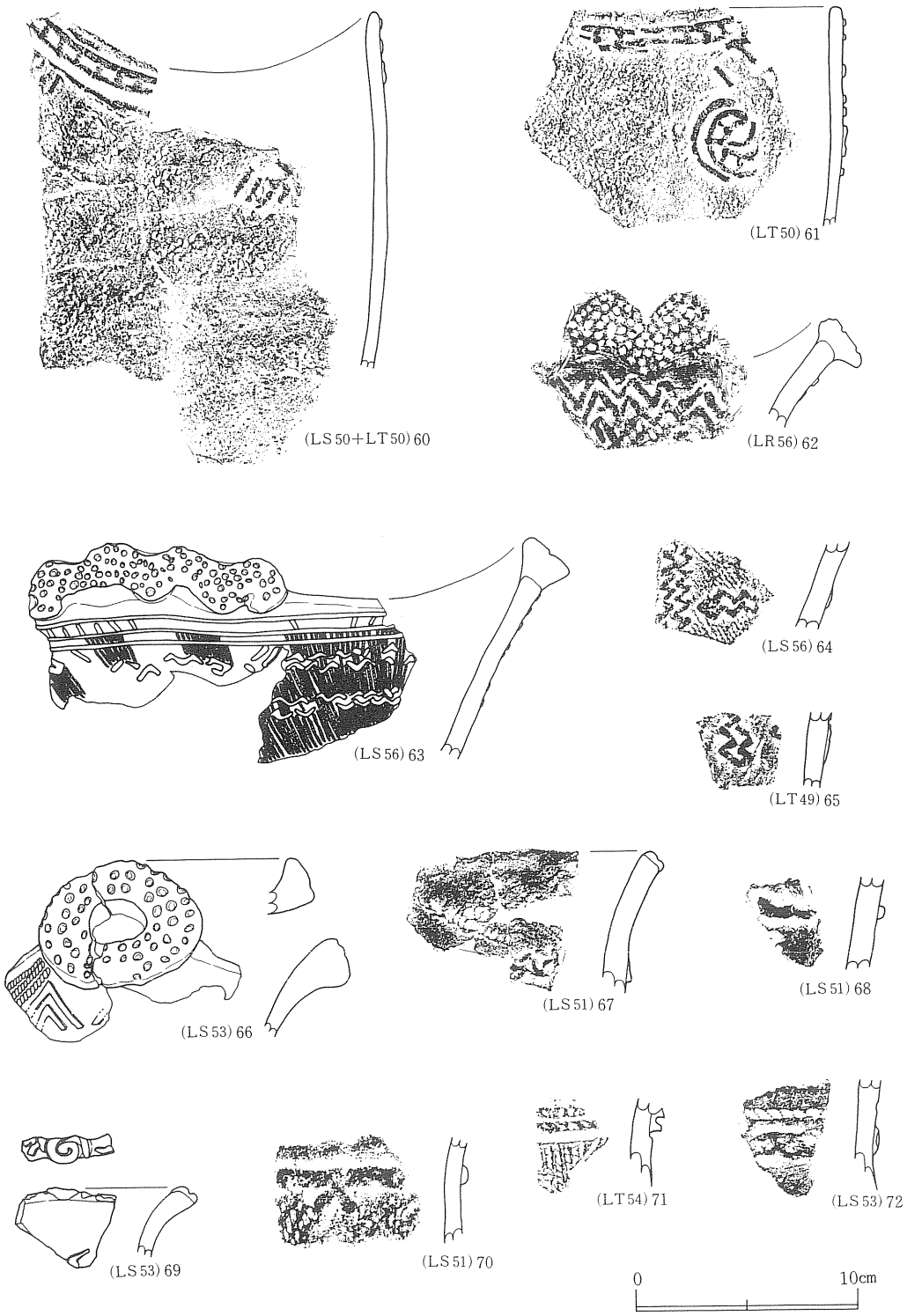
第Ⅳ類：撚糸文が施文されている土器を本類とした（第15図118～135、図版）。

118～120は深鉢形土器の口縁部の破片である。118・119はＲ撚糸文が、120はＬ撚糸文が縦位回転施文されている。うち、118は口唇部に斜めに刻み目が施されている。121・122～130は深鉢形土器の体部の破片である。122・124～126はＲ撚糸文が、123はＬ撚糸文が縦位回転施文

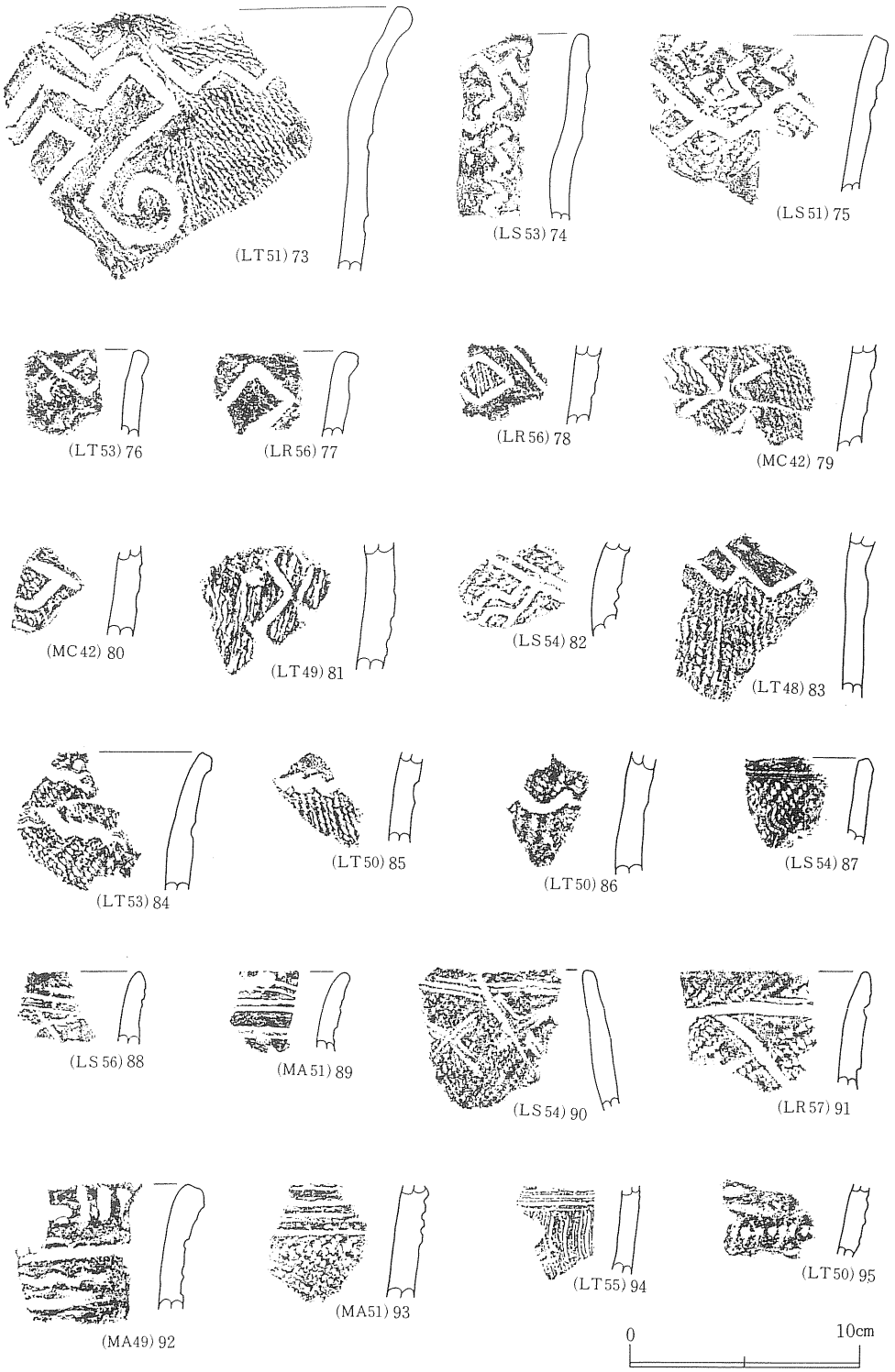
されている。127・128はＲ原体の多軸絡条体が縦位回転施文されている。129・130は同一個体で、木目状撚糸文が施されている。131・132は同一個体で、深鉢形土器の体部～口縁部の破片である。棒状原体が等間隔に斜めに押圧されたあとで、太めのＲ撚糸文が斜めに施され、網目状文が表出されている。また、口唇部には棒状原体の圧痕が斜めに等間隔に施されている。133･134は深鉢形土器の体部の破片で、Ｒ原体の網目状撚糸文が縦位回転施文されている。135は深鉢形土器の底部～体部の破片で、Ｒ撚糸文が縦位回転施文されている。

第Ⅴ類：縄文のみが施されている土器を本類とした(第16～18図、図版24～27)。

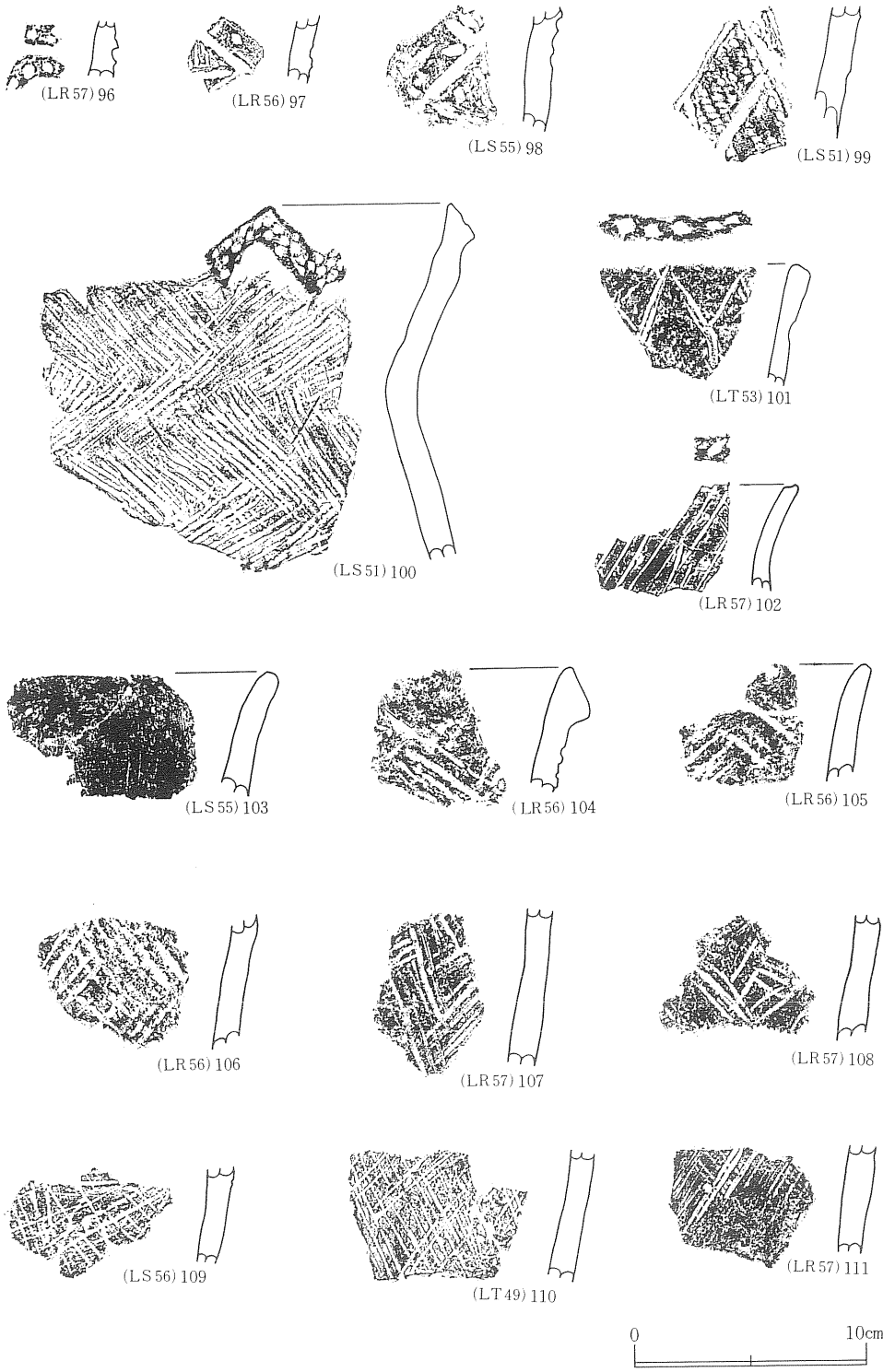
136～165・167～177は深鉢形土器の口縁部の破片で、166は深鉢形土器の体部～口縁部の破片である。136～154はＬＲ縄文が横位回転施文され、139・147・148・150の口唇部には縄文が回転施文されている。原体は139・148がＬＲ、147・150がＲＬである。また、154はＬＲ原体の結節による、綾絡文が表出されている。155～160はＬＲ縄文が縦位回転施文され、155・157～159の口唇部にはＬＲ縄文が回転施文され、157・160の口唇部には指頭圧痕が施文されている。161はＬＲ原体による側面圧痕が施されている。162はＬＲ縄文が斜位回転施文され、口唇部にはＬＲ原体が回転施文されている。163・164はＬＲ縄文が横位と斜位に回転施文されている。165・167・168はＲＬ縄文が横位回転施文され、165・168の口唇部にはＲＬ縄文が回転施文され、167の口唇部には指頭圧痕が施されている。166はＲＬ縄文が横位回転施文され、部分的に同原体を縦位回転して羽状縄文を表出している。169・170はRL縄文が斜位回転施文され、169の口唇部には指頭圧痕が施され、170の口唇部には縄文の側面圧痕が施されている。171はＲＬ縄文が縦位と斜位に回転施文されている。172～174はＲＬとＬＲ縄文が横位回転施文されて、羽状縄文が表出されている。172は原体を結束しているが、173・174は原体を結束していない。175はＲＬとＬＲ縄文が縦位回転施文されて、羽状縄文が表出されている。原体は結束している。また、口唇部にはＬＲ原体の先端と思われる圧痕が認められる。176はＲＬ原体の側面圧痕が施されている。177はＬＲ原体を結節して横位回転施文し、綾絡文が表出されている。178～190は深鉢形土器の体部の破片である。178～184はＬＲ縄文が横位回転施文されいる。178と179、183と184は各々同一個体である。185はＲＬとＬＲ縄文が縦位回転施文されて、羽状縄文が表出されている。原体は結束している。186はＬＲ縄文が縦位回転施文されている。器面には煤状炭化物が付着している。187はＬＲ原体を結節して横位回転施文し、綾絡文が表出されている。器面には煤状炭化物が付着している。188・189はＲＬＲ縄文が斜位回転施文されいる。190は正撚(ＬＲℓ)と反撚(ＲＲℓ)の合撚(Ｒ)の原体が斜位回転施文されている。191～194は深鉢形土器の底部～体部の破片である。191・192はＬＲ縄文が斜位回転施文され、193・194はＬＲ縄文が縦位回転施文されている。



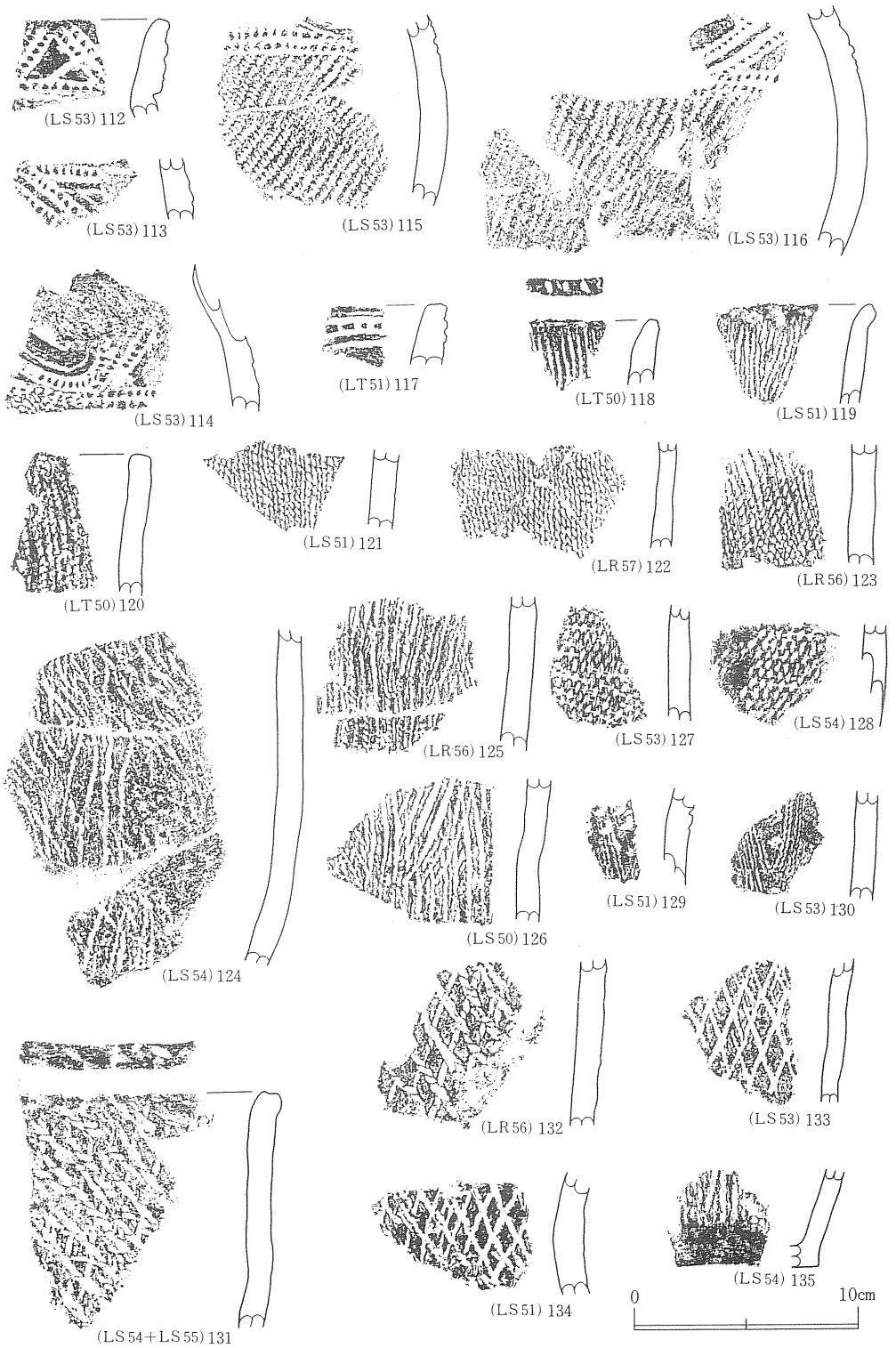
第12図　遺構外出土土器（１）



第13図　遺構外出土土器（２）



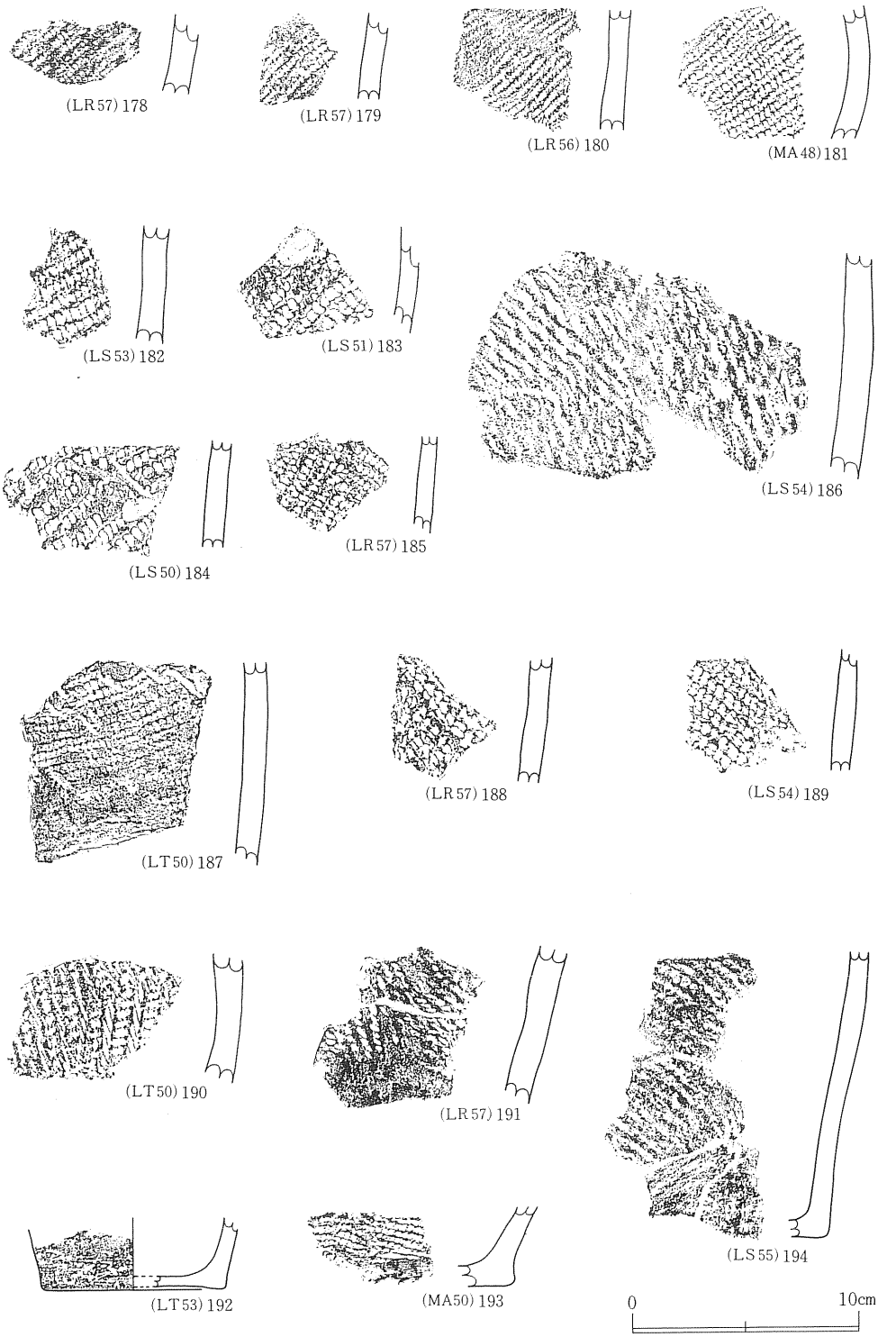
第14図　遺構外出土土器（３）



第15図　遺構外出土土器（４）

第16図　遺構外出土土器（５）

第17図　遺構外出土土器（６）



第18図　遺構外出土土器（７）

② 石　器

遺構外出土の石器は、石鏃・石槍・石錐・石匙・スクレイパー・磨製石斧・扁平打製石器・凹石・磨石・異形石器などある。その出土点数は完形のものと欠損したものを合わせて457点出土した。また、フレーク・チップが、コンテナ(545×340×120㎜)で約1箱分出土した。この中には黒耀石のフレイク８点とその原石(直径４㎝前後の卵形を呈している)が１点あった。石器及びフレーク・チップは、主に農道東側の一段高い水田部の第Ⅱａ～Ⅲ層で出土した。

石鏃(第19～25図、図版28・29)

出土した石器のなかでは、最も多く142点出土した。基部の形態から５種類に分けられた。

①平基有茎鏃(Ｓ13・14)：直線的な基部に茎部が作出されたものである。

②凸基有茎鏃(Ｓ15～21)：基部両端から茎部先端までの縁辺が弧状(Ｓ15～20)や直線的(Ｓ21)なものである。

③凹基無茎鏃(Ｓ22～90)：基部に抉りのあるもので、本類の中でその出土量が圧倒的に多い。抉りの形状には、Ｖ字状、弧状をなすものなどがみられ、抉りの深度も一定でない。この中で抉りの最も浅いものは抉り1㎜のＳ25・46で、最も深いものは抉り9㎜のＳ45である。また、基部両端の脚に長短があり、左右非相称形を呈するものがある(Ｓ49～79)。

④平基無茎鏃(Ｓ91～112)：基部が直線的なもので、その基部両端が角張っているもの(Ｓ91～95)と丸みをもつものがある(Ｓ96～112)。

⑤円基鏃(Ｓ113～124)：基部に丸みを帯びたものである。

これらの石鏃は、素材の剝離面を残しているものもあるが、ほとんどは両面に丁寧な押圧剝離が施されている。断面形は三角形、凸レンズ状、菱形などの形状を呈している。アスファルトの付着したものはなかった。また、大きさは長さ20～59㎜、幅は12～26㎜、厚さ３～９㎜で、重さ0.73g～8.05gの範囲内に入るものである。

石質は珪質頁岩(Ｓ13～15・17・19～21・25・26・28・29・31・32・34・36・38～41・44～48・51～61・63～68・70～72・76・77・79・80～87・90～102・104～108・110・111・114・117・119・120・122～124)、頁岩(Ｓ24・27・30・33・35・73・78・103・115・116・118)、黒色頁岩(Ｓ18・22・37・42・43・89・112・113・121)、瑪瑙(Ｓ16)、チャート(Ｓ62・69・74・88・109)、碧玉(Ｓ23)、黒耀石(Ｓ75)、凝灰岩(Ｓ49)である。

石槍(第26図、図版30)

30点出土した。その大半は尖頭部や胴部などを欠損しており、完形品はＳ125～127・129のみである。

Ｓ125～127は平面形が木葉形で、最大幅はほぼ胴部中央にある。３点とも両面の全面に二次加工が施されており、断面形は凸レンズ状を呈している。基部の形状は、Ｓ125・126が尖って

おり、Ｓ127が丸みを帯びている。Ｓ128～130は平面形が細長い柳葉形を呈している。このうち、Ｓ128は両端を欠損しており、Ｓ130は基部を欠損しているものである。Ｓ128・130は両面の全面に二次加工が施されており、断面形は凸レンズ状を呈している。Ｓ129は両面に素材の剝離面を残し、その周縁のみに二次加工を施している。断面形は三角形状を呈しており、基部の形状は直線的である。また、Ｓ129・130はともに器体が幾分弓なりに反っている。Ｓ131～133は、尖頭部から胴部を欠損しているが、平面形は細長い柳葉形を呈するものと思われる。３点とも両面の全面に二次加工が施され、断面形は凸レンズ状を呈している。基部の形状は、Ｓ131が丸みを帯びており、Ｓ132・133が基部の両側縁が幾分抉られ、丸みのあるつまみ状を呈している。また、Ｓ131は火熱を受け、両面には大きく剝落した面がある。

なお、掲載しなかった欠損品は、その平面形が残存する基部の形状から、柳葉形を呈するであろう。

石質は珪質頁岩(Ｓ128･130)、頁岩(Ｓ125･127･129･132)、チャート(Ｓ126･133)、粘板岩(Ｓ131)である。

石錐(第27図、図版30)

17点出土した。錐として使用される部位の断面形が菱形や三角形を呈し、回転穿孔した時などに生じたと思われる磨滅痕が認められるものである。

Ｓ134・136～139は基部両面の中央部及びその付近に素材の剝離面を残し、その周縁を二次加工しており、135・140は両面とも全面が二次加工されている。いずれも断面形は菱形を呈している。Ｓ141は二次加工が粗雑で、素材の剝片の形状をそのまま残し、一側縁の両端を打ち欠いて短い錐部を作出している。錐部の断面形は菱形を呈する。Ｓ142は錐部両面の全面を二次加工しているが、基部両面には素材の剝離面を広く残し、背面の片側縁の一部と主要剝離面の両側縁にのみ二次加工を施している。錐部の断面形は菱形を呈している。また、最大厚が基部と錐部の境目付近に位置するものである。Ｓ143は背面の錐部と基部両側縁及び主要剝離面の錐部のみに二次加工を施して、基部両面には素材の剝離面を広く残している。錐部の断面形は菱形を呈し、弓なりに反っている。Ｓ144は両面に素材の剝離面を残し、背面の周縁と主要剝離面の片側縁にのみ二次加工を施している。錐部に最大厚をもち、その断面形は三角形を呈している。Ｓ145は両面とも全面が二次加工されている。錐部の断面形は三角形を呈している。Ｓ146～149は棒状に近い形状を呈するものである。Ｓ146～148は背面の全面を二次加工しているが、主要剝離面の二次加工はＳ146が錐部に、Ｓ147が周縁に、Ｓ148が錐部の片側縁にのみ施して、素材の剝離面を残している。錐部の断面形はＳ146・Ｓ147が菱形、Ｓ148が三角形状を呈しいる。Ｓ149は基部の両側縁に抉りを入れて、つまみ部を作出しているものである。両面には素材の剝離面を残し、背面の周縁と主要剝離面の先端部とつまみ部側縁のみを二次加工

している。錐部の断面形は三角形状を呈している。また素材の剝片は左方向にねじれている。

以上、これらの大きさは長さ27～75mm、幅９～26mm、厚さ４～11mmであり、重さは1.76～11.55 gの範疇に入る。また、Ｓ134～140は本遺跡出土の石鏃の形態と平均的な大きさが近似しており、石鏃の類と混同するおそれのあるものである。

石質は珪質頁岩(Ｓ134～139･141･143･146･148)、頁岩(Ｓ140・142・144)、チャート(Ｓ145)、黒色頁岩(Ｓ147)、碧玉(Ｓ149)である。

石匙(第28～32図、図版31・32)

51点出土した。その形態から縦型と横型に分けられた。

①縦型(Ｓ150～185)：主に縦長剝片を素材としており、つまみ部はバルブ部に作られているものが大半であるが、150～152・172・173・178・181は素材の末端側に、横長剝片を素材とするＳ159・161は、図の上側につまみ部を作出している。また､150・155・160・169・170は背面の大部分を二次加工して素材の剝離面をあまり残していないが、他は両面ともに素材の剝離面を残している。

②横型(Ｓ186～193)：主に横長剝片を素材としており、つまみ部はＳ186が末端側に作られている以外は、バルブ部に作出されている。また、縦型石匙と同様に両面加工されているものはなく、全て両面に素材の剝離面を残している。

石質は珪質頁岩(Ｓ150･152～154･156･157･159･160･163･165･166･168･170･171･174･177･179･182･184～192)、頁岩(Ｓ151･158･161･162･164･167･175･176･178･180･181･183･193)、チャート(Ｓ155･172)、黒耀石(Ｓ169)、黒色頁岩(Ｓ173)である。

石箆(第33～35図、図版33)

29点出土した。その大半は基部が狭く下方が広がる箆形を呈し、ほぼ左右対称となるものである。これらは剝片に施された二次加工の度合によって、半両面加工のもの、片面加工のもの、両面加工のものとに分けられた。また、いずれも最大幅を刃部付近にもつものである。

①半両面加工のもの(Ｓ194～200・202～209・213)：両面に二次加工が施されているが、素材の剝離面を片面もしくは両面に残しているものである。刃部は片刃で急角度をなすものが多く、Ｓ194・200・202・204・205・213は円刃、Ｓ203・208は直刃で、以外は偏刃をなしている。また､Ｓ202・213は基部を欠損しており､Ｓ202の主要剝離面の図の上端は再加工が施されている。

②片面加工のもの(Ｓ201)：片面のみに二次加工が施されているものである。刃部は直刃の片刃で急角度をなしている。全面に二次加工が施されている。

③両面加工のもの(Ｓ210～212・214～219)：両面とも全面が二次加工されているものである。刃部は片刃で急角度をなすものであり、Ｓ210・216・219は偏刃、Ｓ212は直刃で、以外は円刃をなしている。

大きさは、両面加工をされたもので最大長9.3cm、最大幅4.3cm、片面加工されたもので最大長6.5cm、最大幅3.3cm、半両面加工されたもので最大長6.9cm、最大幅4.9cmである。

石質は珪質頁岩(Ｓ195･196･198･202･204･208･211･212~214･216～219)、頁岩(Ｓ194・200・201・205～207・209・210・215)、凝灰岩(Ｓ197)、碧玉(Ｓ199)、粘板岩(Ｓ203)である。

スクレイパー(第36・37図、図版34)

53点出土した。素材剥片の側縁に二次加工が施されて、刃部が作出されている石器である。Ｓ220・221・223・224・228・234～236は素材の末端に刃部が作出されおり、Ｓ236は刃部の中央付近に抉りをもっている。これらの刃部の形状は、Ｓ220・221・223・224が弧状、Ｓ234・235が『く』字状、Ｓ228・236が直線状を呈している。また、Ｓ220・221・234は主要剥離面を残しているが、背面の全面に二次加工が施されており、他は素材の剥離面を両面に残している。Ｓ222は素材の基端と末端に刃部が作出されている。刃部の形状は基端が直線状、末端が『Ｌ』字状を呈している。両面とも素材の剥離面を残している。Ｓ225～227・232は側縁に刃部が作出されている。刃部は弧状を呈している。Ｓ232は刃部の中央部が抉れており、Ｓ233は身部中央から末端付近まで抉れている。

Ｓ229～231は身部下端に刃部が作られている。刃部の形状はＳ229・231が直線状、Ｓ230が『く』字状を呈している。また、Ｓ229・231は両面とも全面に二次加工、Ｓ230は両面に二次加工が施されているが、主要剥離面を残している。

石質は珪質頁岩(Ｓ221・222・228～233)、頁岩(Ｓ223～227・234～236)、チャート(Ｓ220)である。

磨製石斧(第38・39図、図版35)

26点出土した。完形のものはＳ235・251の２点だけで、他は基部や刃部などを欠損している。

Ｓ237は片側面に擦切痕を残しているものである。大きさは長さ72mm、幅18mm、厚さ９mmである。Ｓ236～248は、断面形が隅丸方形を呈し、定角式磨製石斧に属するものである。また、刃部を残存しているもののうちＳ247は偏刃で、それ以外は円刃の両刃をなしている。Ｓ249は研磨が粗雑で、両側縁に部分的に打撃による素材整形時の剥離痕が残っている。Ｓ250も残存する片側縁に打撃による素材整形時の剥離痕が残っている。Ｓ251は素材とした礫の形状を変えずに、全面を研磨しているものである。また、図の左側の刃部には刃部再生の剥離痕、右側の刃部には使用による刃こぼれが認められる。大きさは長さ153mm、幅60mm、厚さ37mmを測る。なお、欠損の度合が大きく掲載しなかった９点は、定角式磨製石斧に属するものである。

石質は緑色凝灰岩(Ｓ237～239･242･243･247･251)、玄武岩(Ｓ240･245･250)、凝灰岩(Ｓ241)、砂岩(Ｓ244・249・252)、頁岩(Ｓ248)、黒色頁岩(Ｓ246)、安山岩(Ｓ253)である。

半円状扁平打製石器(第40図、図版36)

20点出土した。これらは楕円形を呈する礫を素材として、その一方の長側縁(図の下側縁)を両面から打ち欠いて刃部を作出しているものである。また、刃部とした部位以外の側縁を打ち欠いているものもあるが、両面に大きく自然面を残しており、素材の形状はあまり変えていないものと思われる。

Ｓ254・255は刃部と一方の短側縁、Ｓ258は両短側縁も打ち欠かれているもので、このうちＳ254は両面から施されている。Ｓ259は刃部をなす側縁に対する片面の長側縁を除いた全縁が打ち欠きされているものである。Ｓ256・257・260は短側縁の一方を折損している。Ｓ256～264・266は刃部の先端が磨耗して生じたと思われる磨面が認められるものである。また、磨面の状態は、Ｓ256～260・264は断続的で幅が狭く滑らかさを欠くが、Ｓ261～263・266は連続しており、滑らかな面となっている。

石質は安山岩(Ｓ255・257・259～266)、頁岩(Ｓ254)、石英安山岩(Ｓ256・258)である。

凹石(第41図、図版37)

57点出土した。円形や楕円形の礫を素材として、同一面の１～３箇所に２・３個の重複する凹みがつくられているものである。

Ｓ267～272・279・280は片面に、Ｓ273～277は両面に凹みをもつもの、Ｓ278は三面に凹みをもっている。またＳ279・280は凹みをもたない片面が磨られてかなり円滑な面となっており、磨石としても用いられたものである。

石質は安山岩(Ｓ267・268・270・273・275・279・280)、石英安山岩(Ｓ269)、凝灰岩(Ｓ271・272・274・277・278)、緑色凝灰岩(Ｓ276)である。

磨石(第42図、図版38)

33点出土した。円形や楕円形の礫を素材として、その平面や側面を磨面としたものである。

Ｓ281・282・288は両面を、Ｓ283～287は片面を、Ｓ289～292は両面と片側面を、Ｓ293は両面を磨面としている。また、Ｓ283～287・288・289の磨面は磨減って凹んでいる。このうちＳ287・288は磨減り方が著しい。

石質は安山岩(Ｓ281・282・285・286・289・291～293)、凝灰岩(Ｓ283・284・287・288・290)である。

異形石器(第43図、図版39)

２点出土した。Ｓ294は凹基無茎鏃に形態が近似し、Ｓ295はつまみがあり石匙に近似しているが、いずれも一部位が特異な形態をなすものである。

Ｓ294は先端部が両側から剝離され乳頭状を呈し、基部は抉れているものである。両面に素材の剝離面を残し、両面の周縁のみ二次加工している。Ｓ295は全体の形状が釣り針状を呈しているもので、基部の両側に抉りを入れてつまみ部を作出している。両面とも二次加工が施されているが、素材の剝離面を残している。

石質は碧玉(Ｓ294)、チャート(Ｓ295)である。

③ 石製品

出土した石製品は、玦状耳飾（ＬＴ55グリッド第Ⅲ層・ＭＡ49グリッドⅡａ層・ＭＡ42グリッド第Ⅱｂ層出土）３点と石冠（ＬＴ48グリッド第Ⅲ層出土）１点の計４点である。

玦状耳飾(第43図、図版39)

３点出土したが、完形品は１点(Ｓ296)で他の２点は欠損品である。

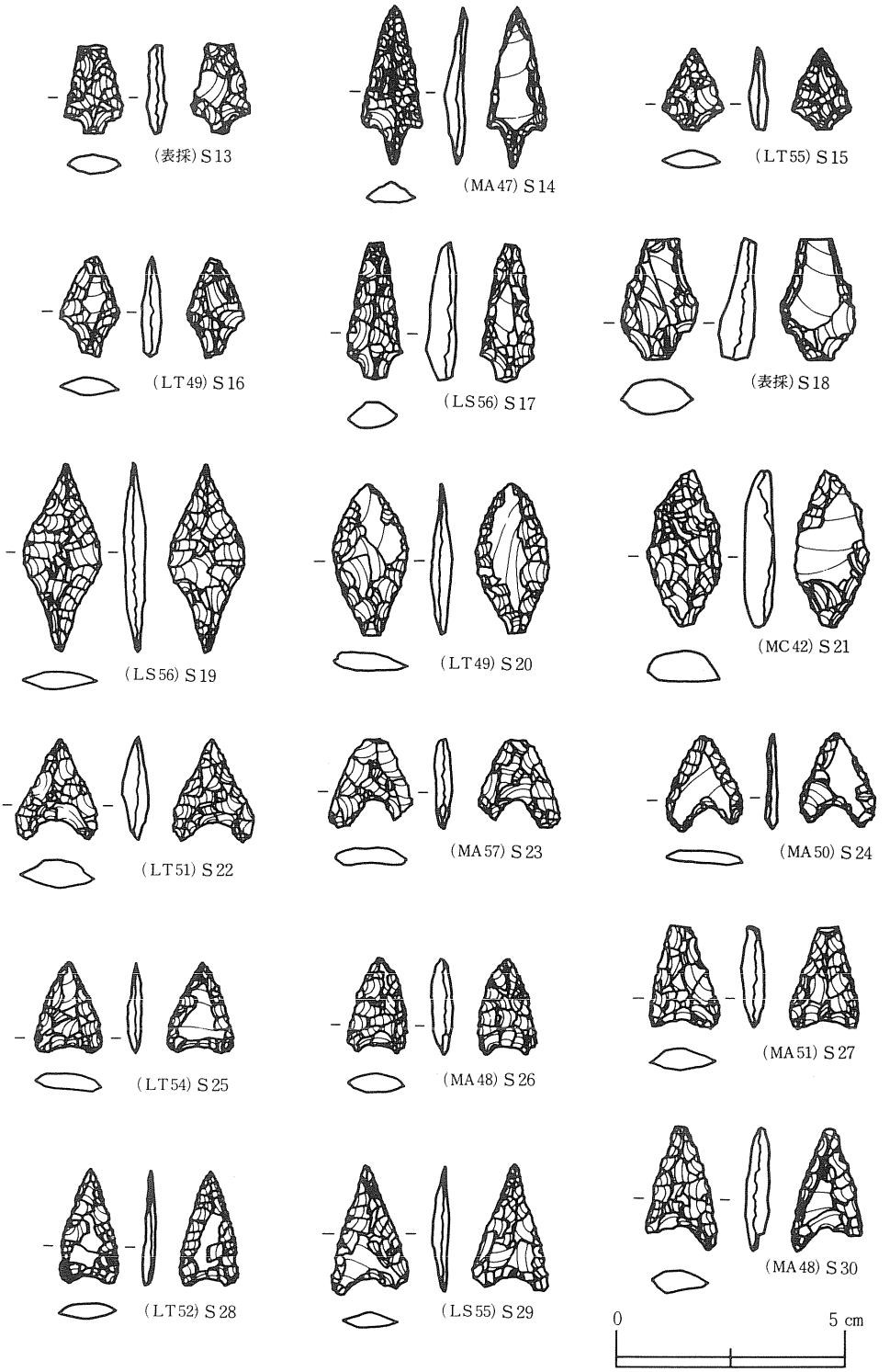
Ｓ296は円形に近い形状を呈し、中央よりやや上部に孔が両面から穿孔され、切り目も両面から擦切られている。いずれも断面は『く』字状を呈しており、孔には螺旋状痕、切り目には擦切痕、器面には磨痕が認められる。Ｓ297は大半を欠損しているが、残存部の孔の両方に螺旋状痕がみられ、孔は両面からの穿孔である。Ｓ298は片側を半分ほど欠損しているものである。Ｓ296と同様に孔と切り目が作られているが、孔の上部にも切り目を入れようとした痕跡が両面に認められる。

石質は緑色凝灰岩(Ｓ296)、凝灰岩(Ｓ267・268)である。

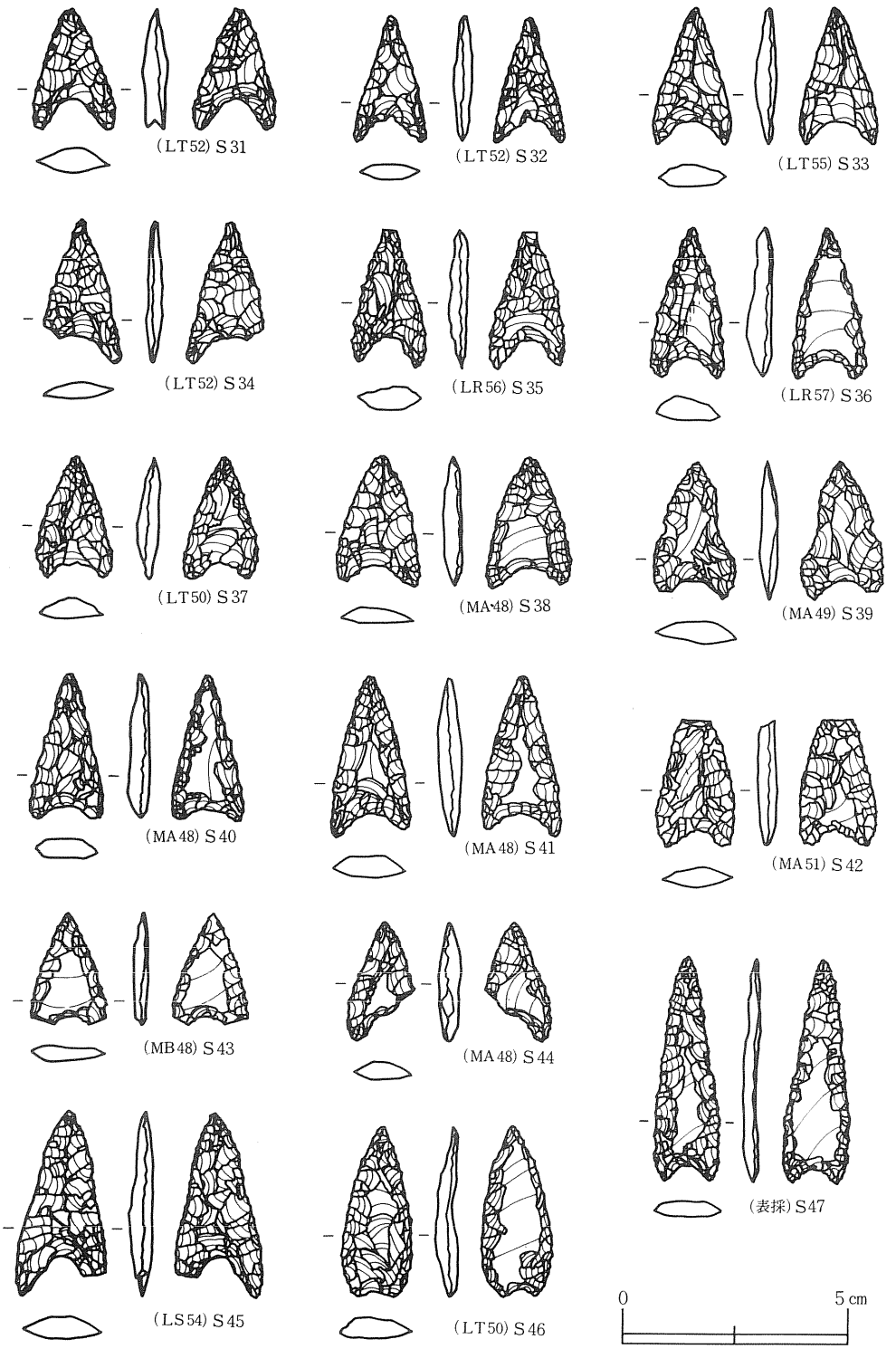
石冠(第43図、図版39)

角礫を素材としている。全面を研磨しており断面形は、ほぼ二等辺三角形を呈している。底面の中央部は約20㎜幅で、長側縁に平行して磨られている。

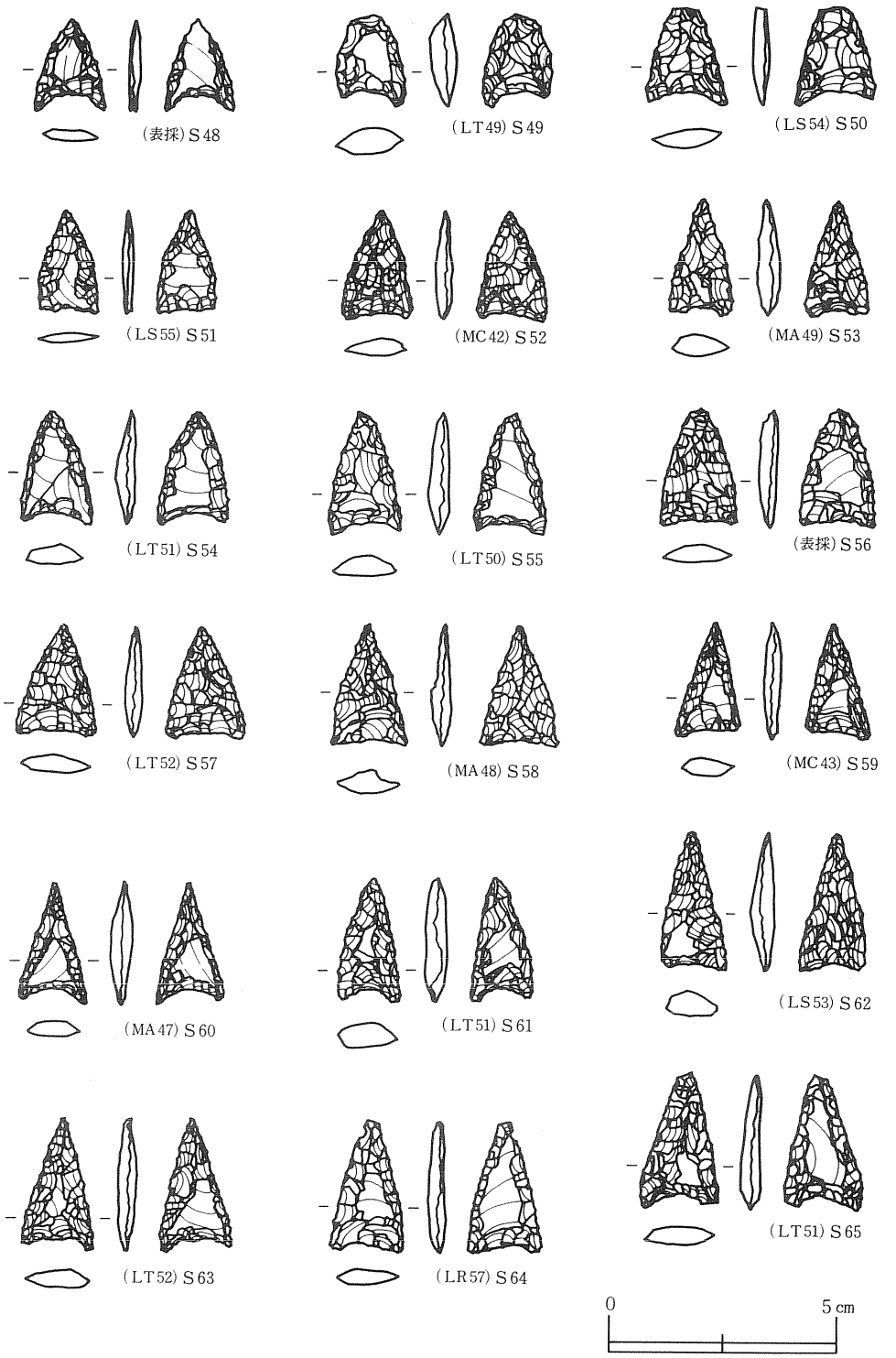
石質は緑色凝灰岩である。



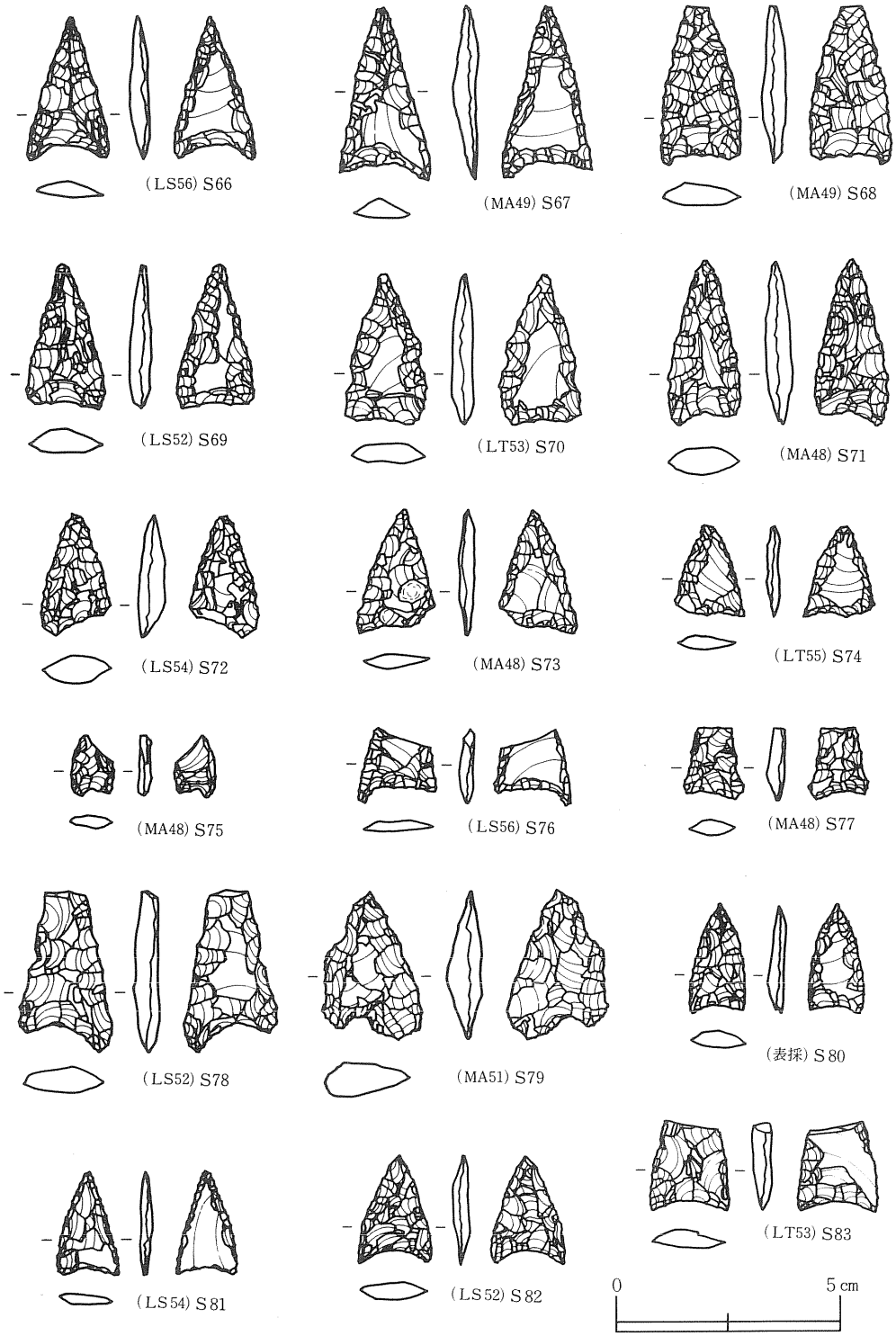
第19図　遺構外出土石器（１）



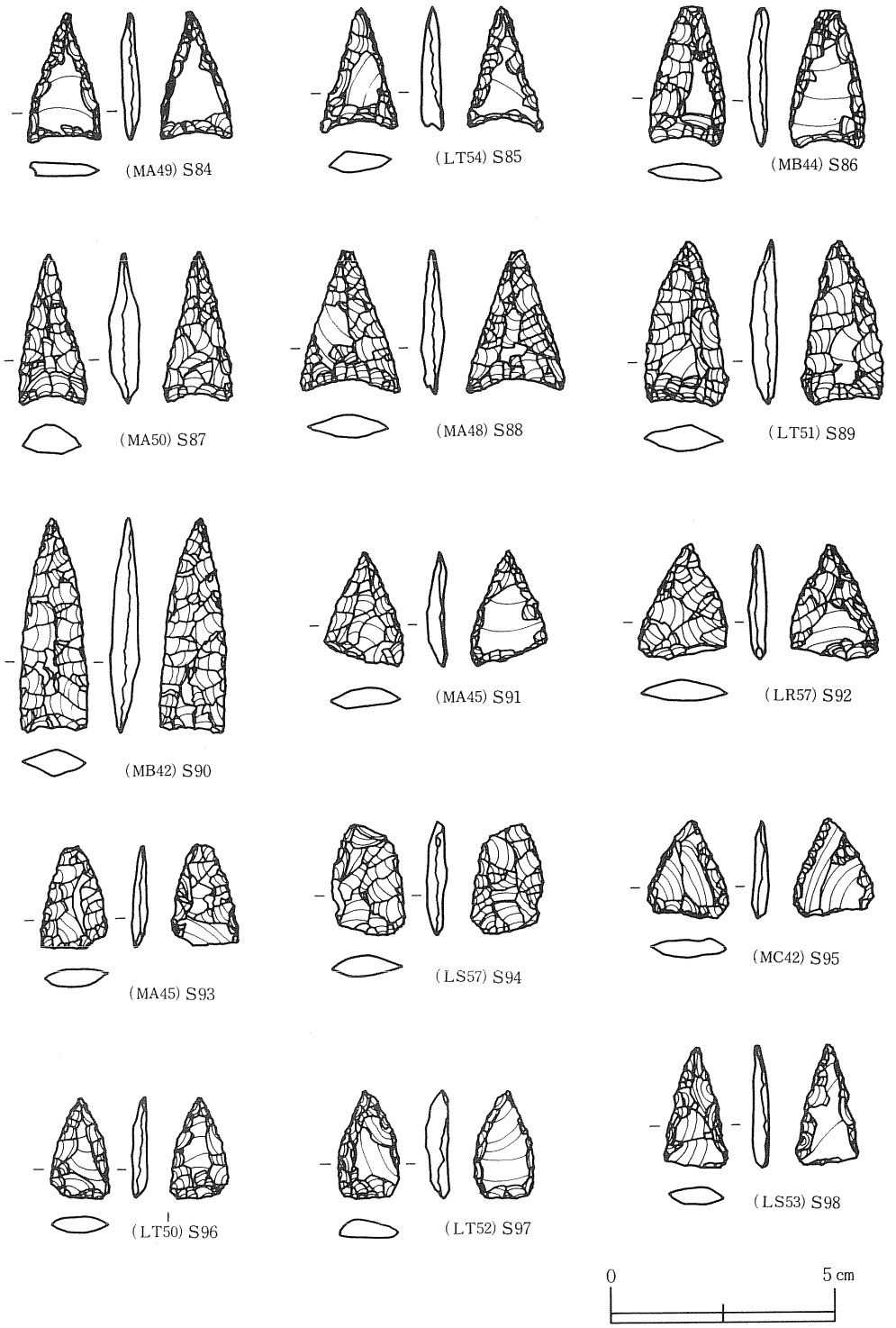
第20図　遺構外出土石器（２）



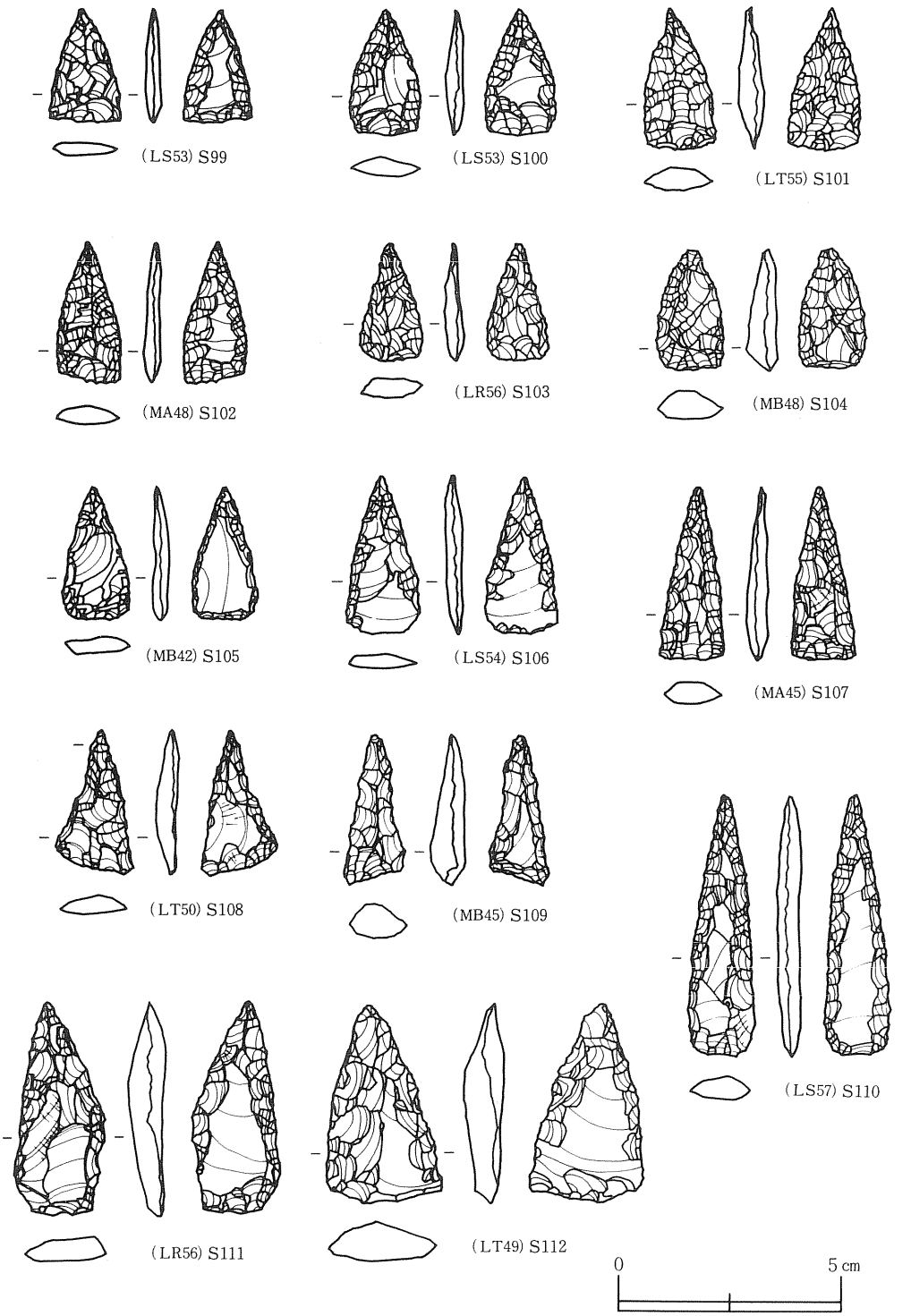
第21図　遺構外出土石器（３）



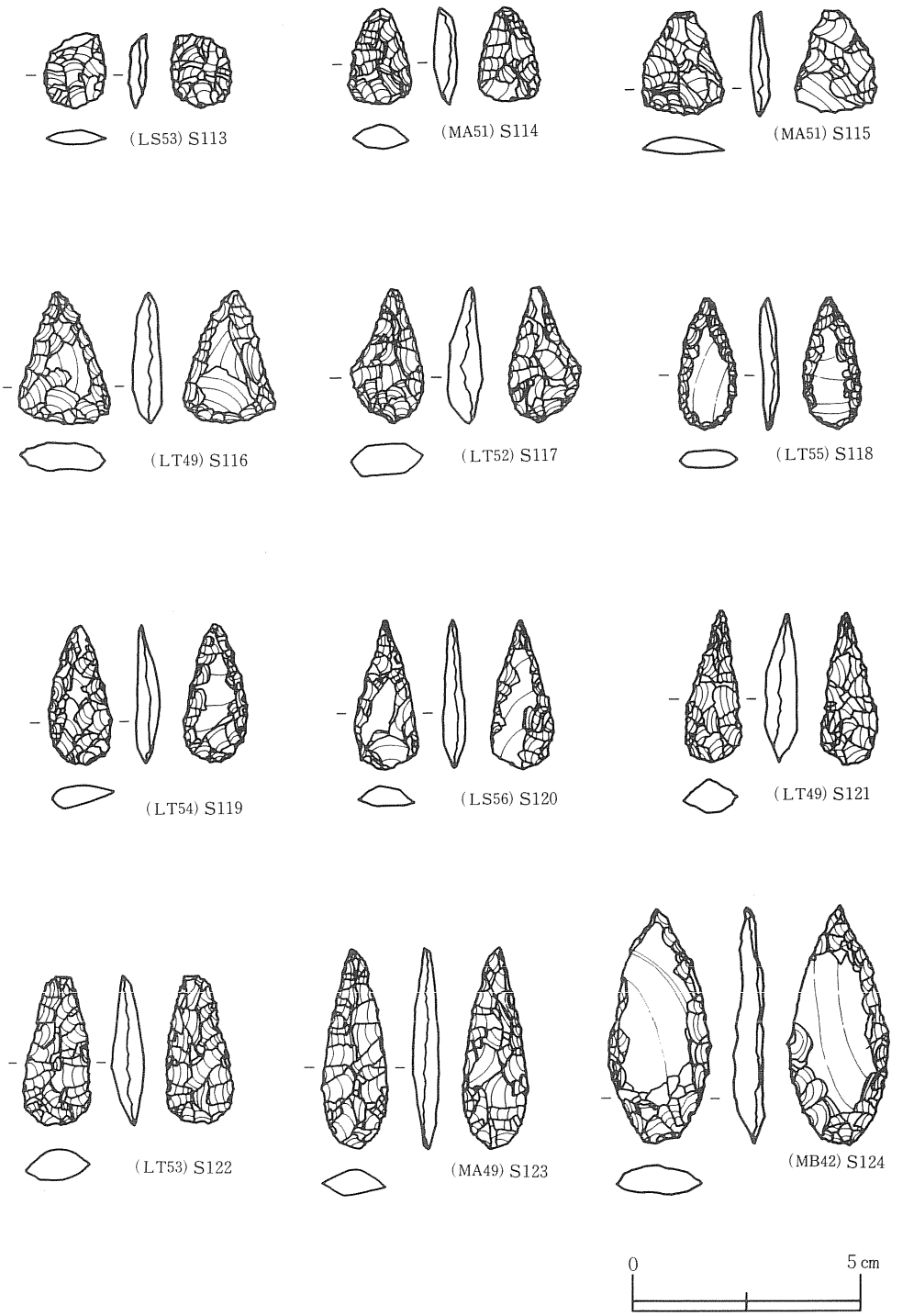
第22図　遺構外出土石器（４）



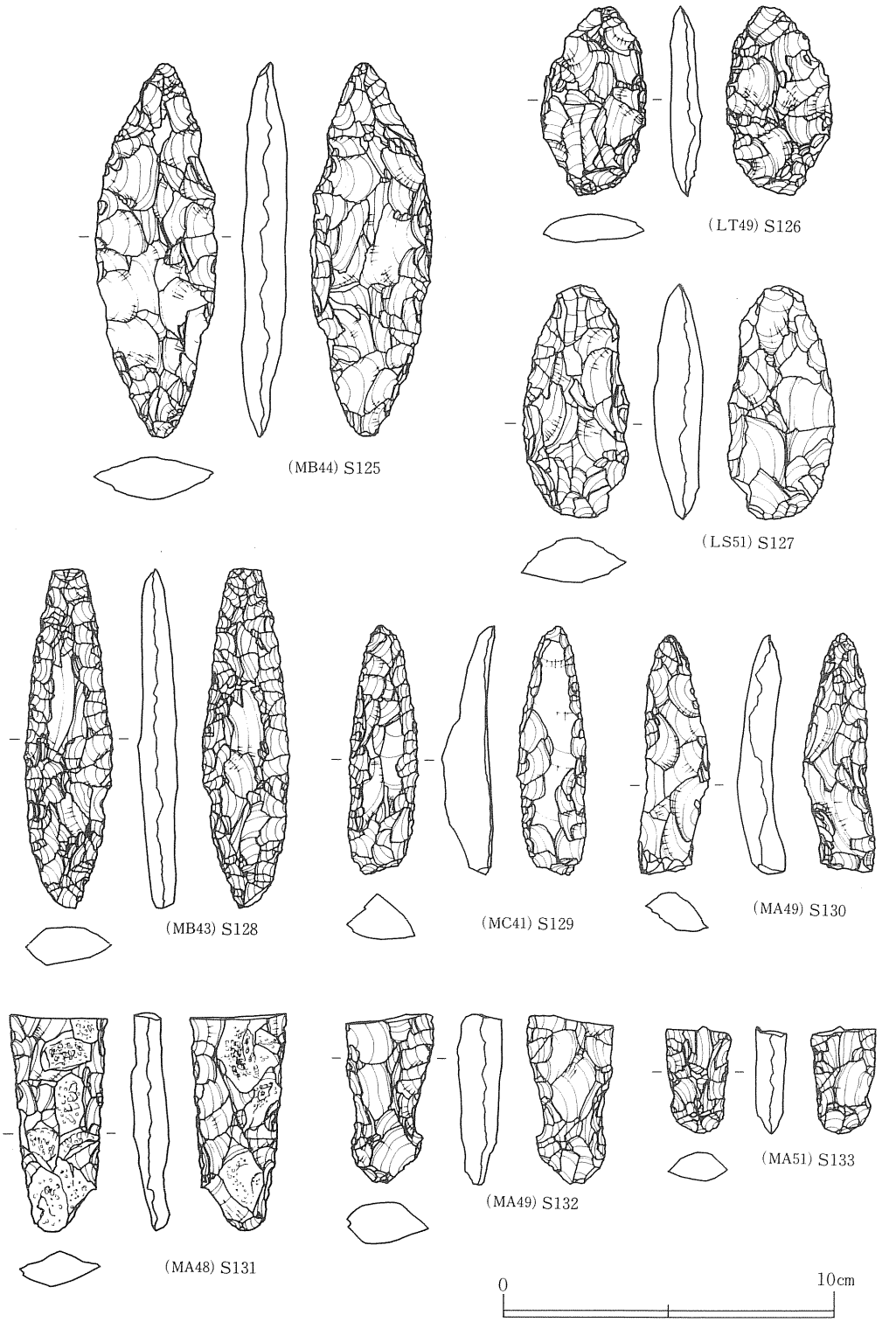
第23図　遺構外出土石器（５）



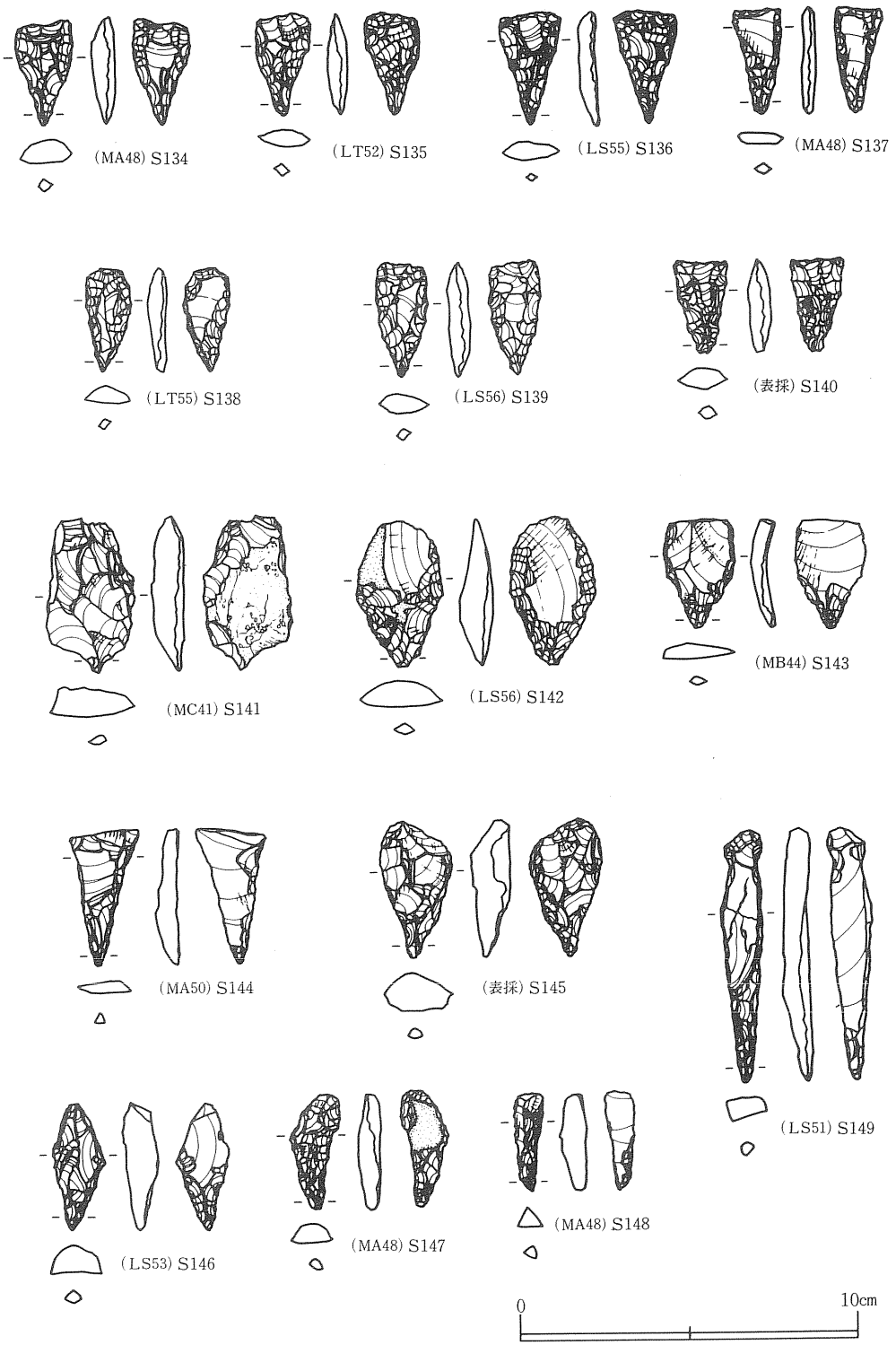
第24図　遺構外出土石器（６）



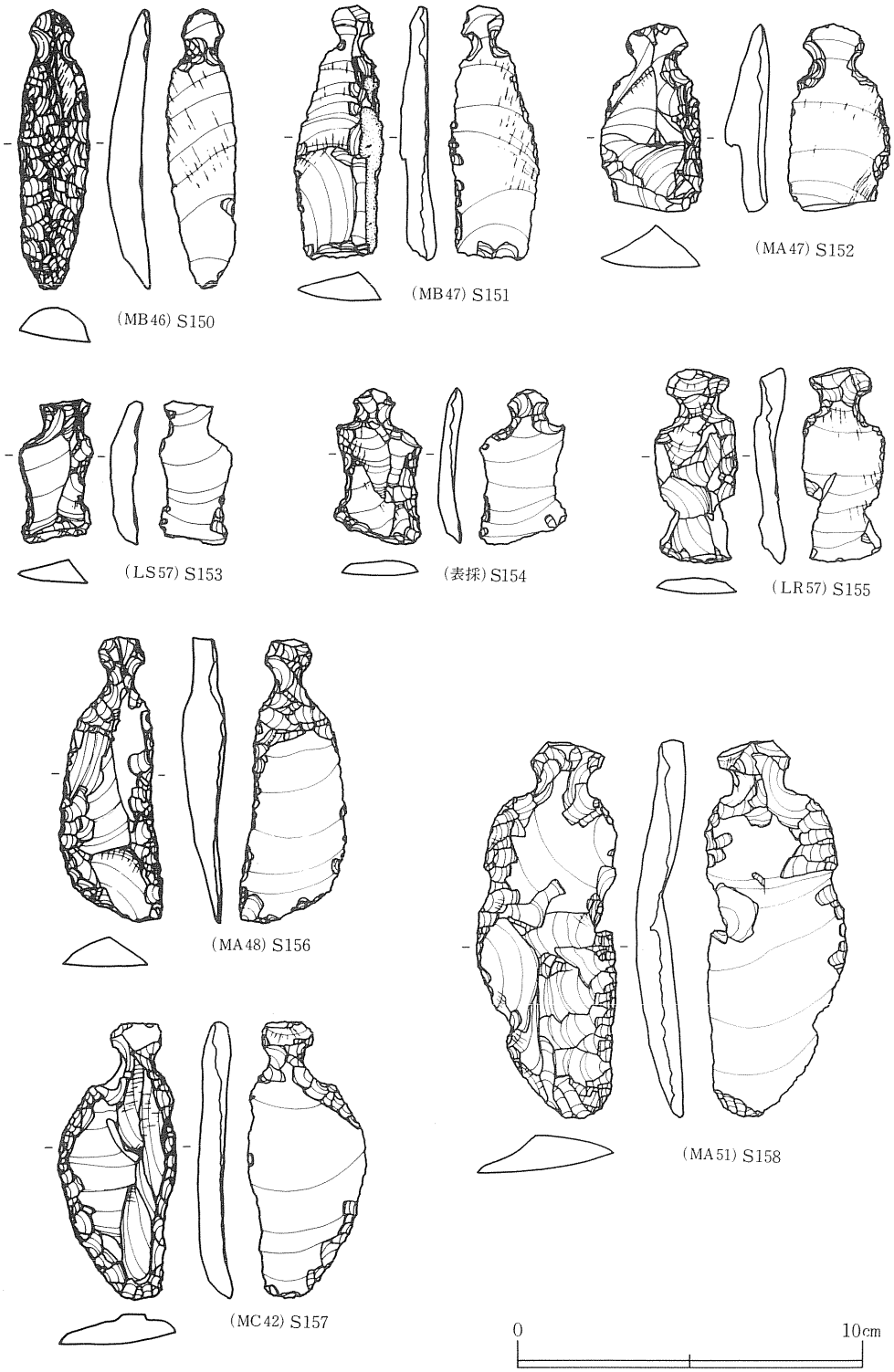
第25図　遺構外出土石器（７）



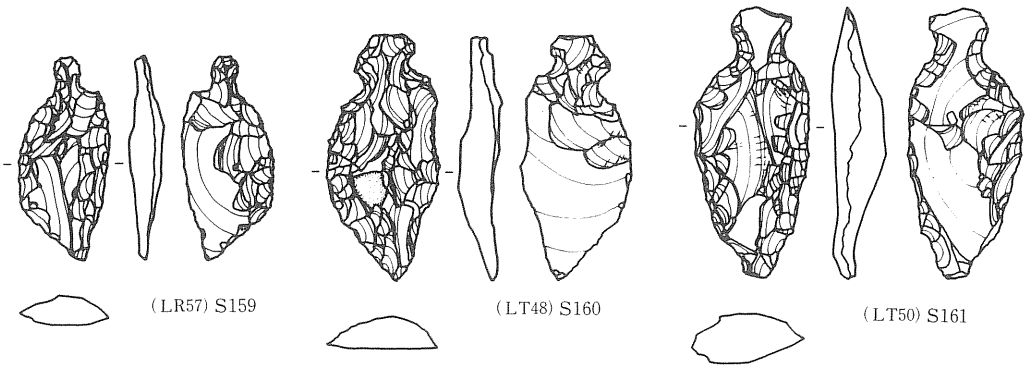
第26図　遺構外出土石器（８）

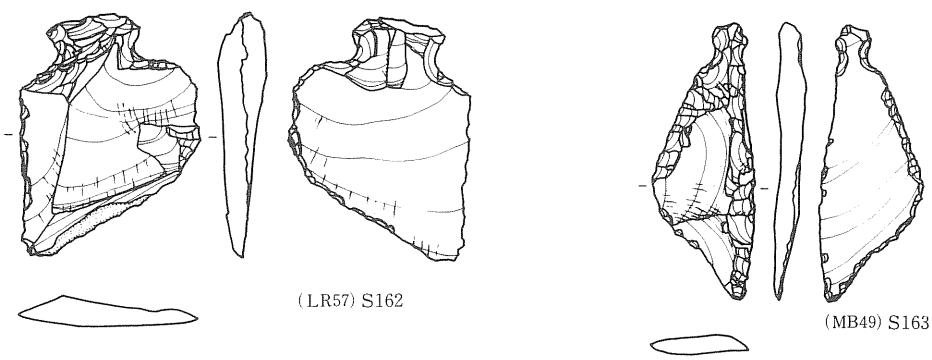


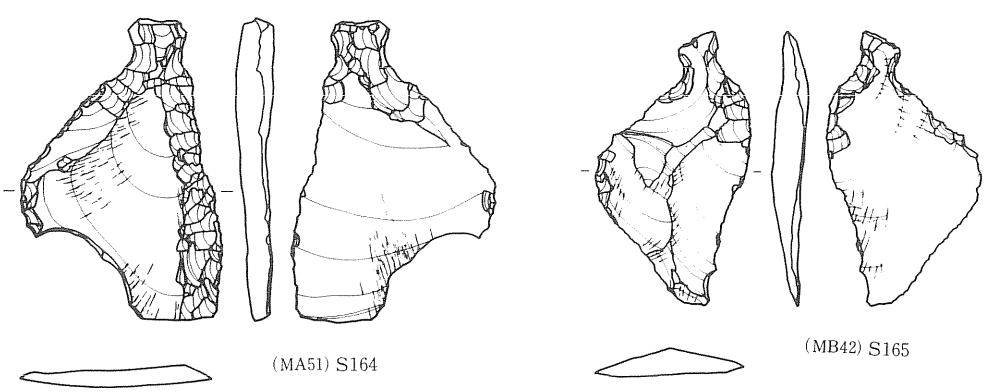
第27図　遺構外出土石器（９）

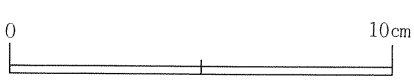


第28図　遺構外出土石器(10)

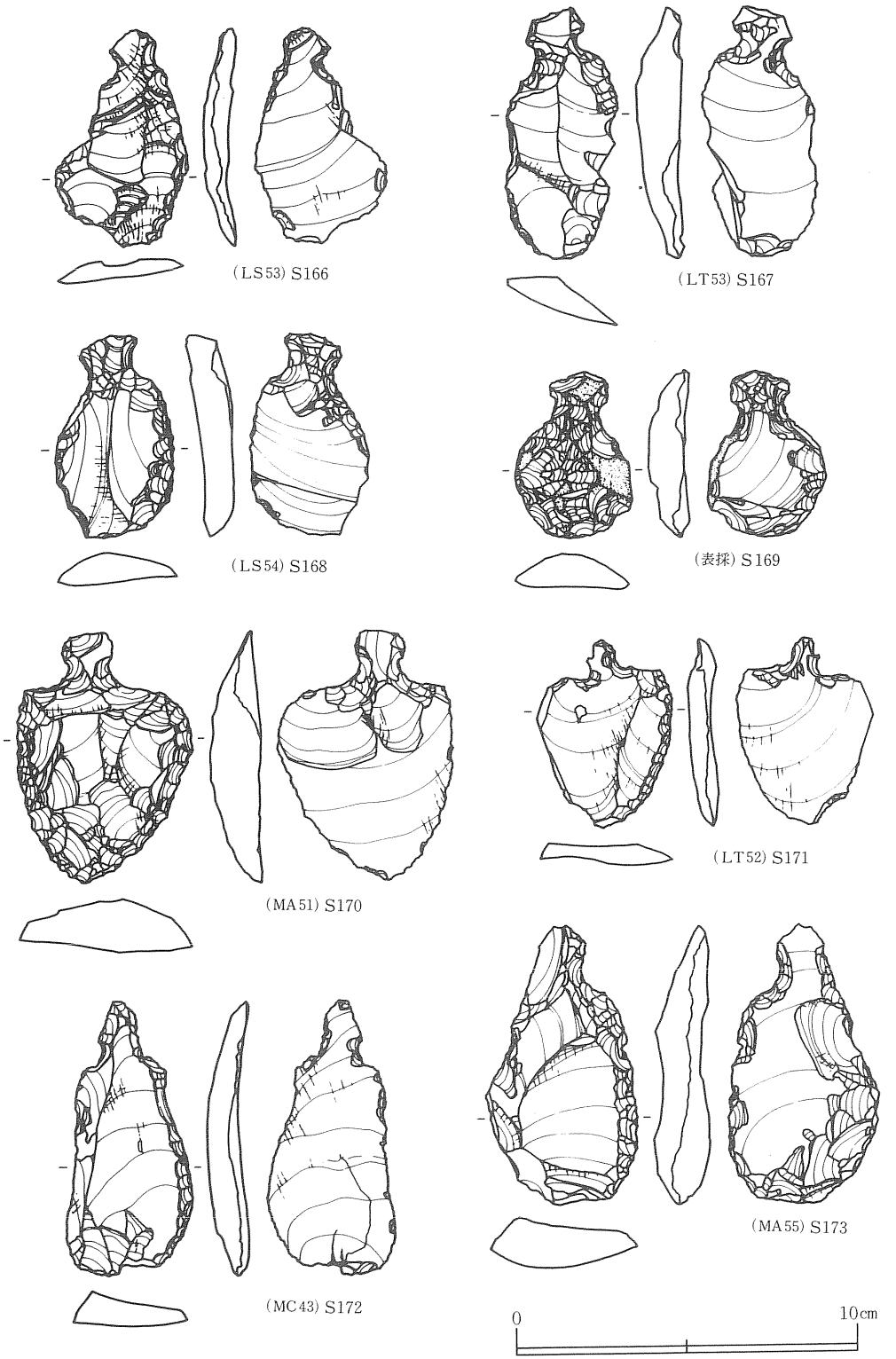




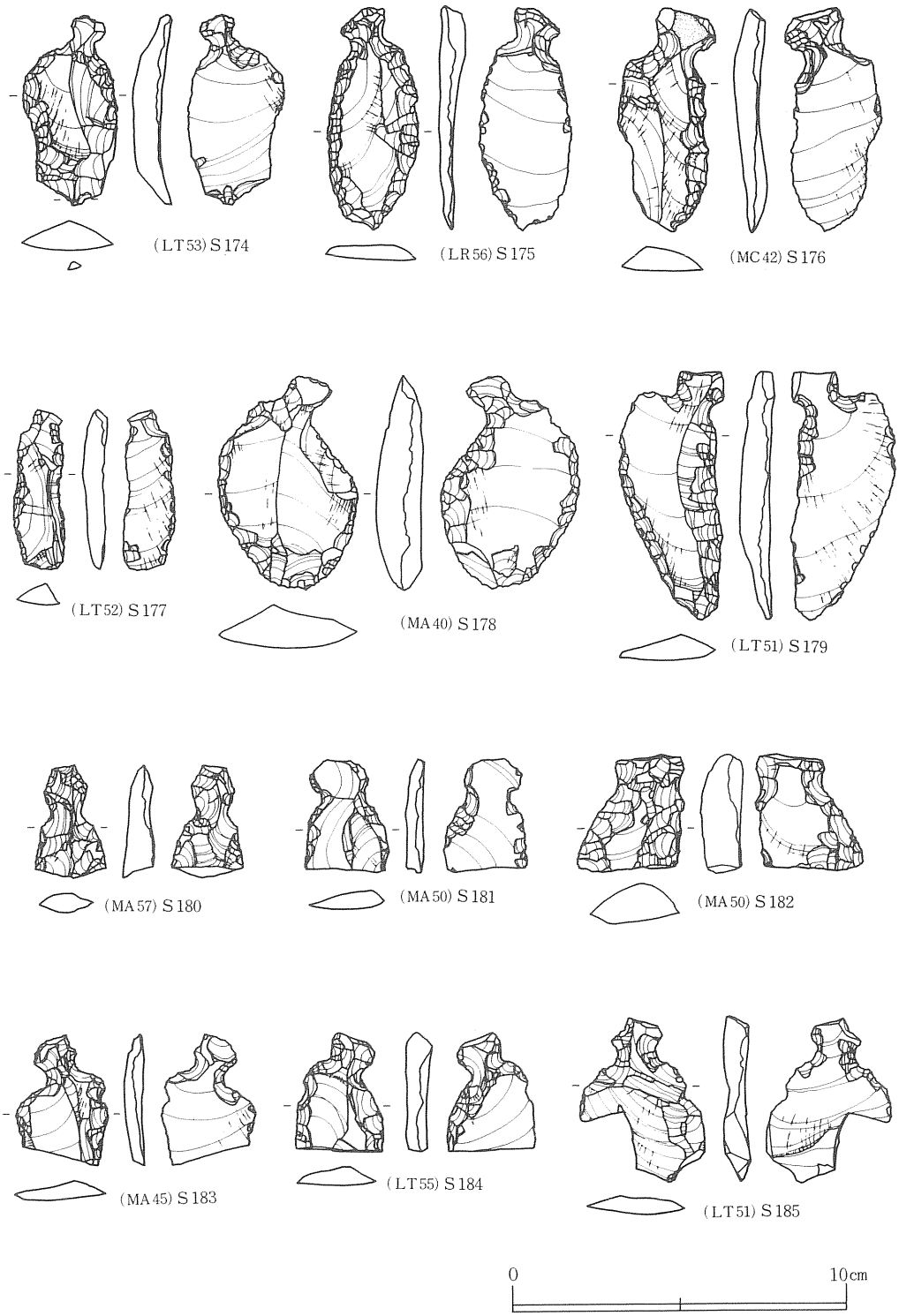




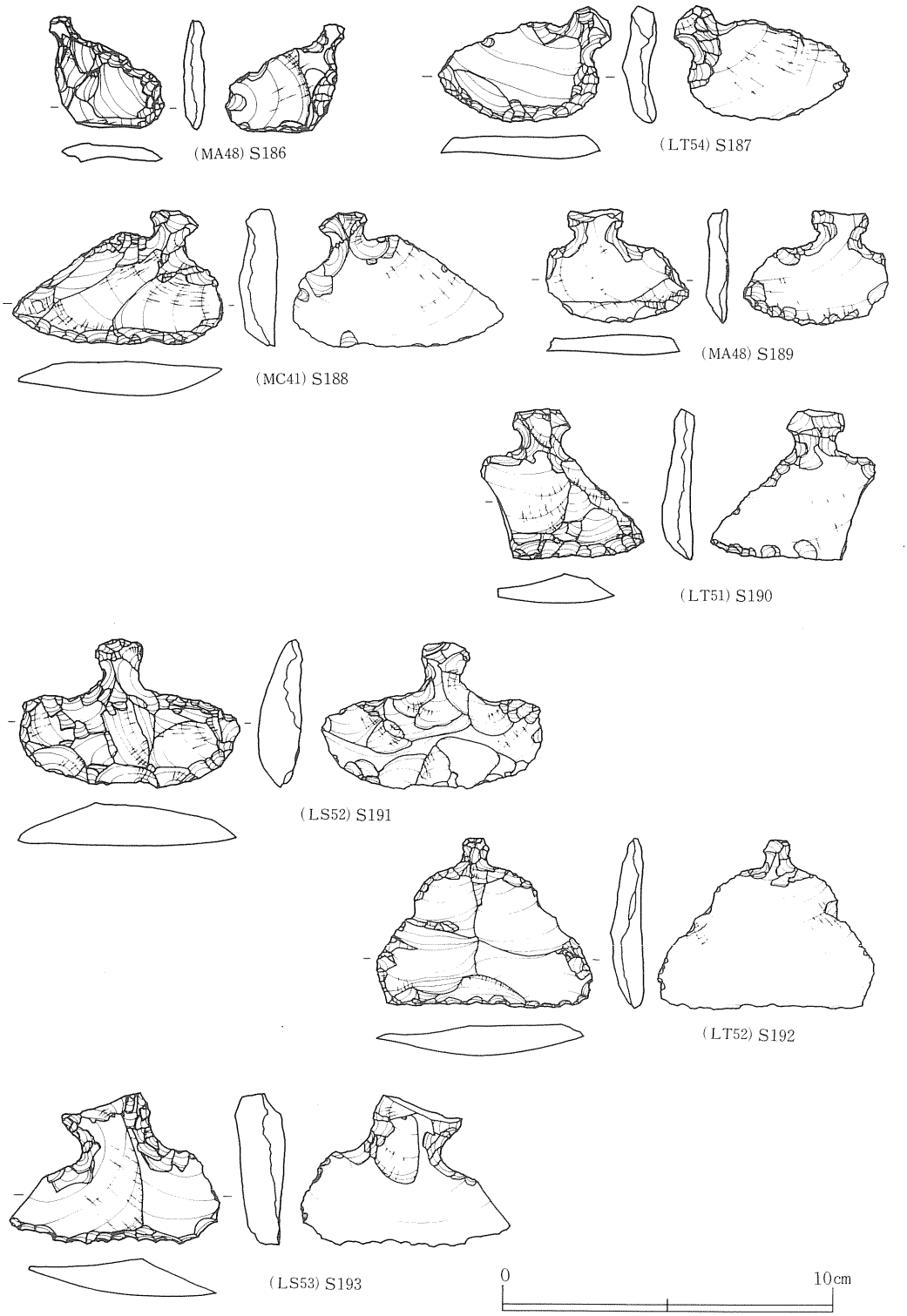
第29図　遺構外出土石器(11)



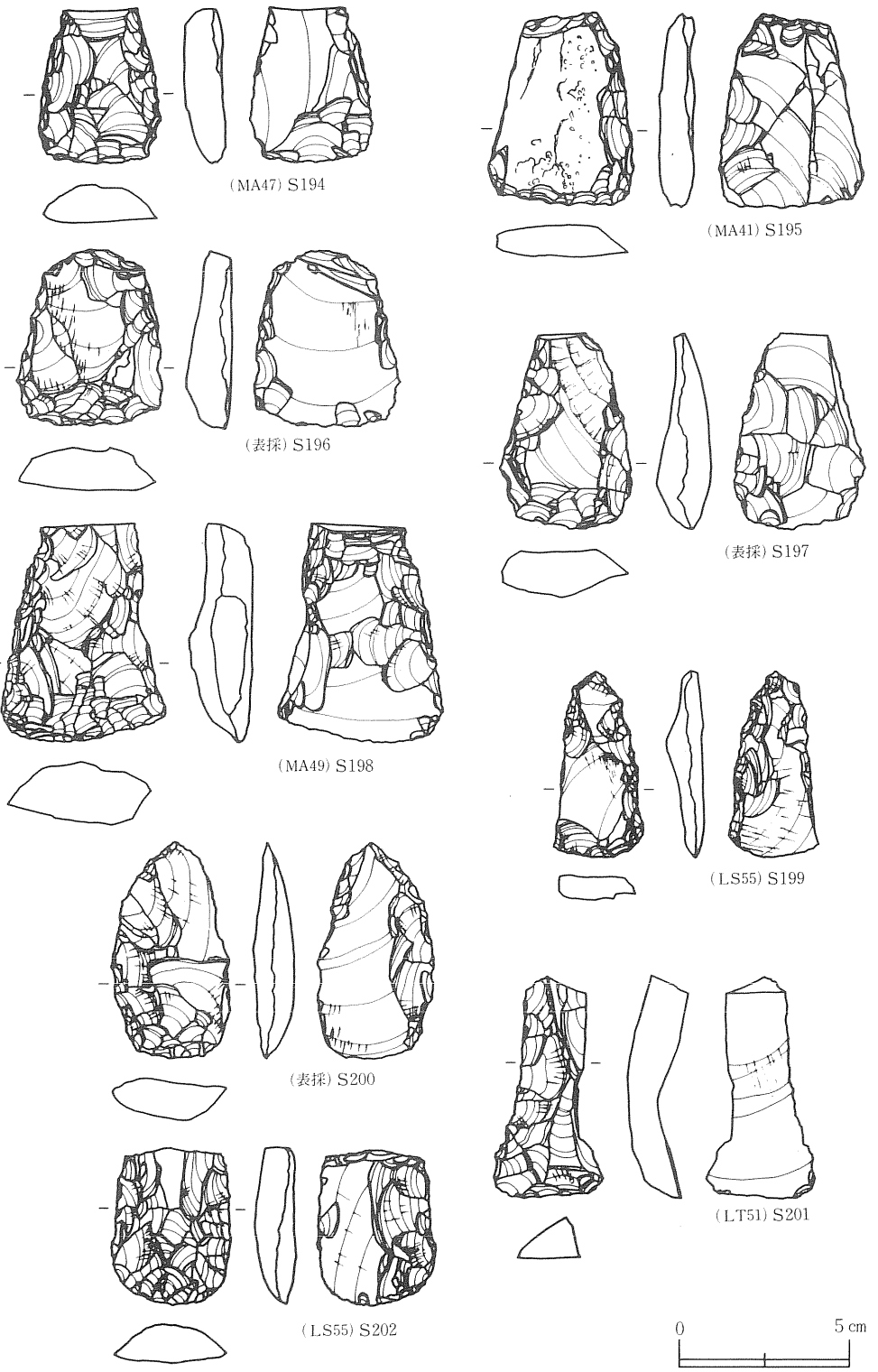
第30図　遺構外出土石器(12)



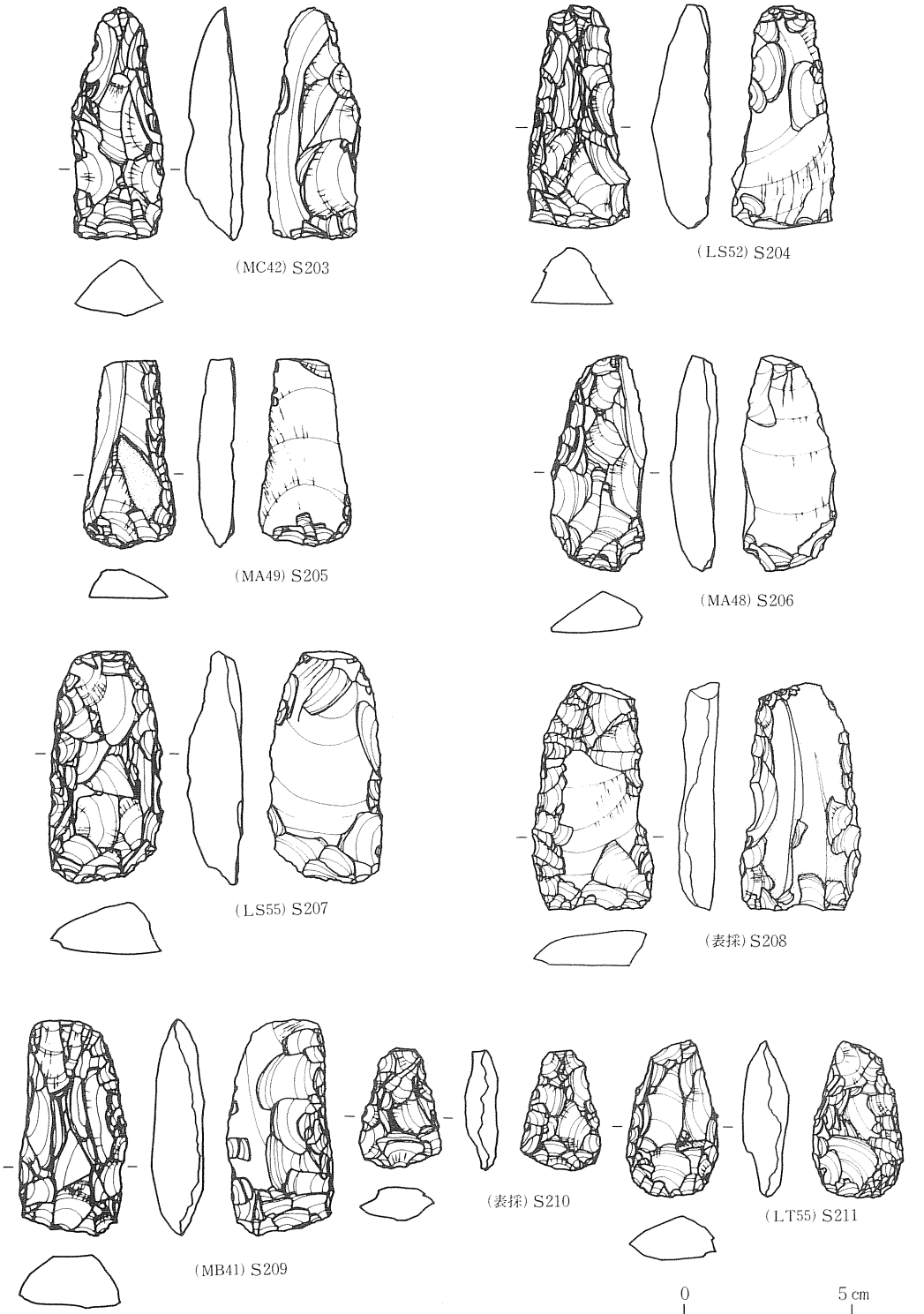
第31図　遺構外出土石器(13)



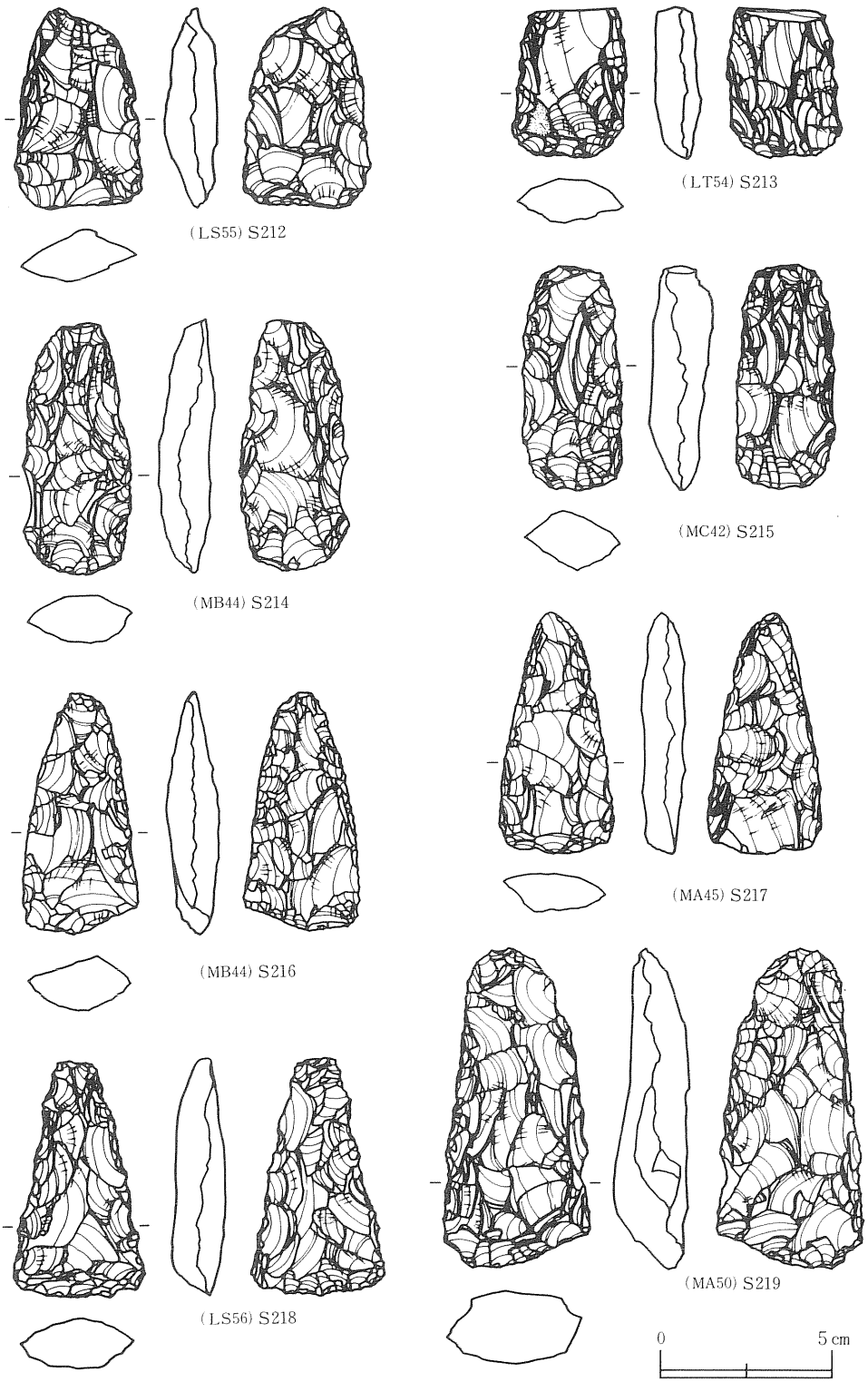
第32図　遺構外出土石器(14)



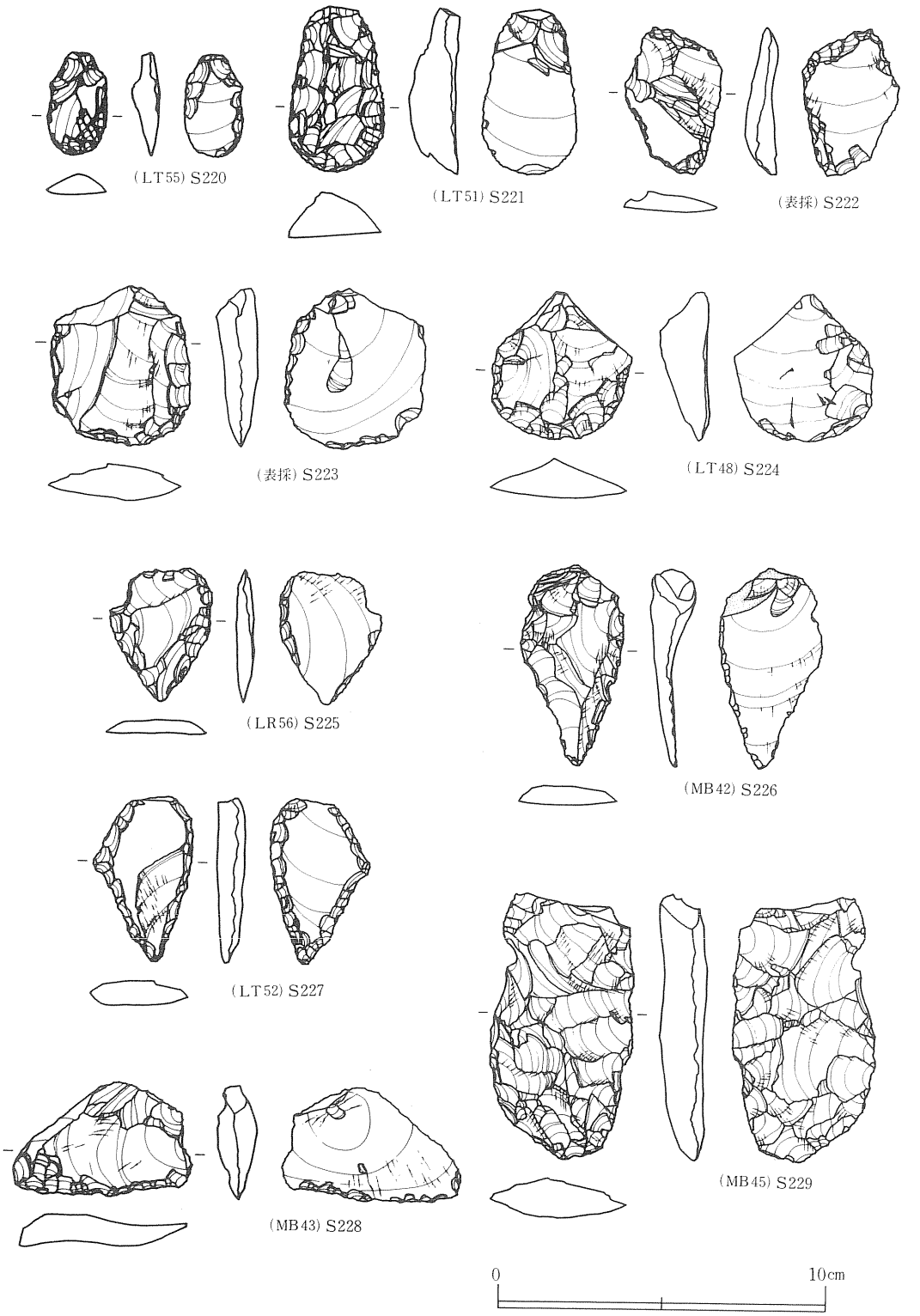
第33図　遺構外出土石器(15)



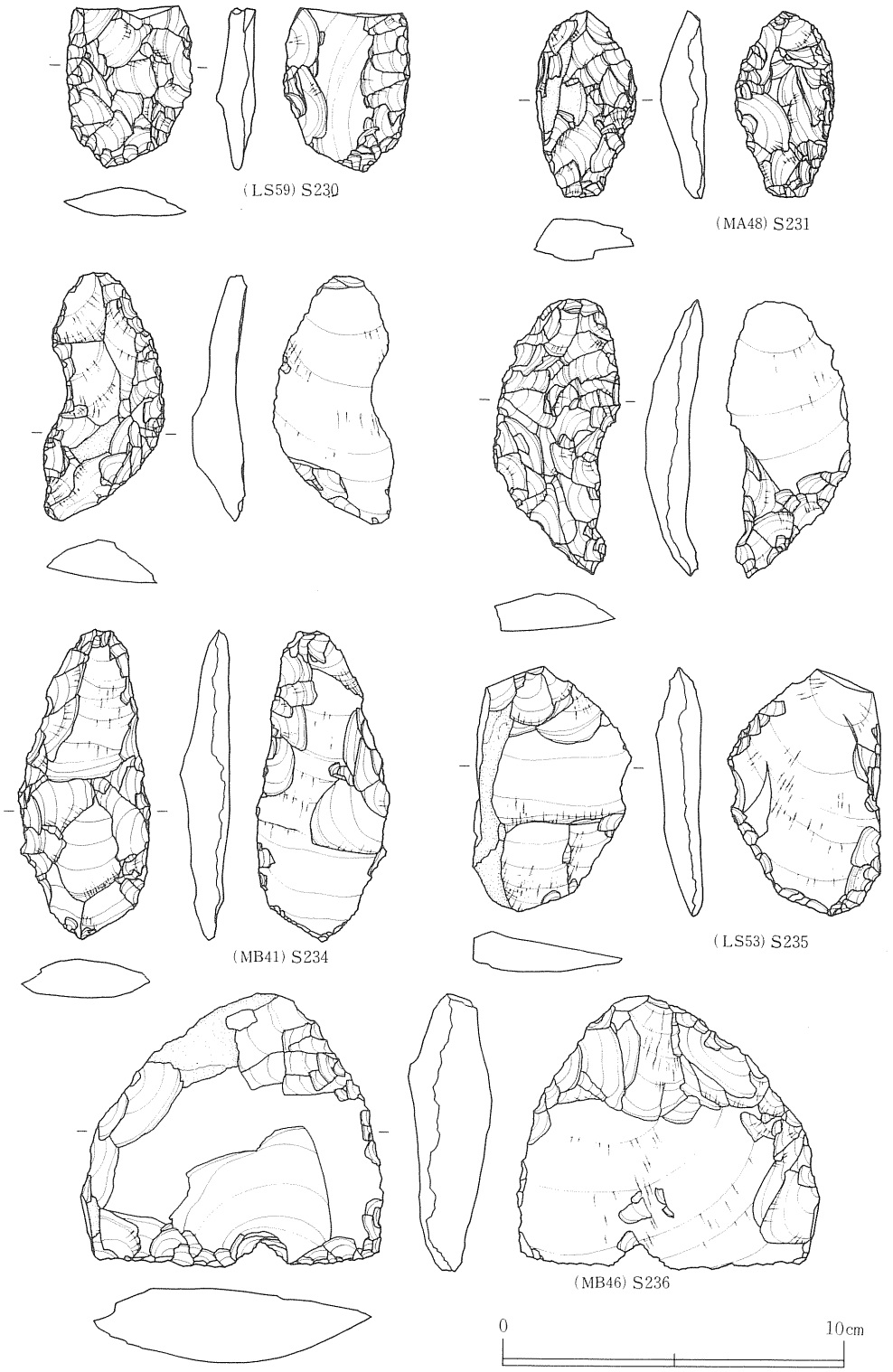
第34図　遺構外出土石器(16)



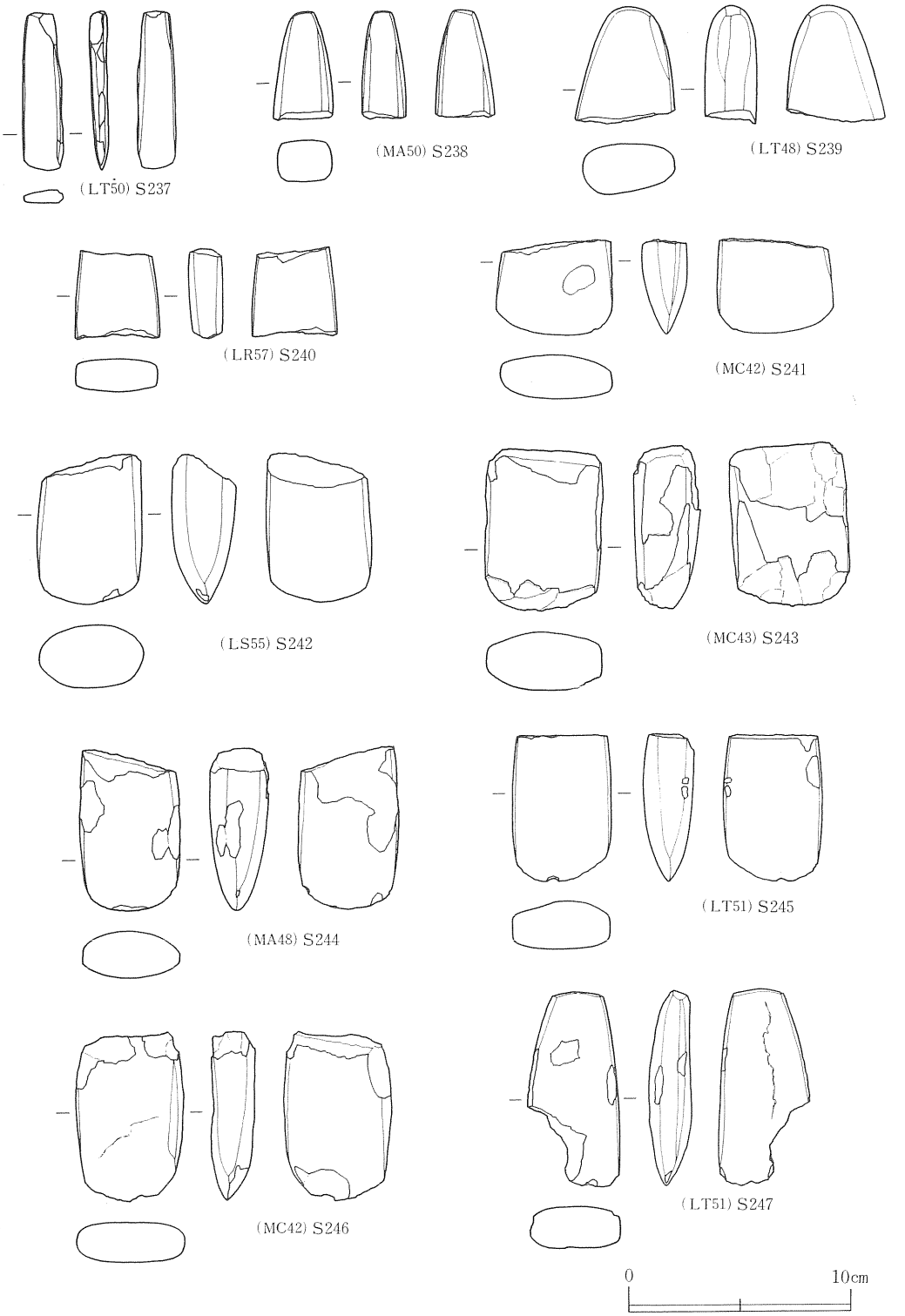
第35図　遺構外出土石器(17)



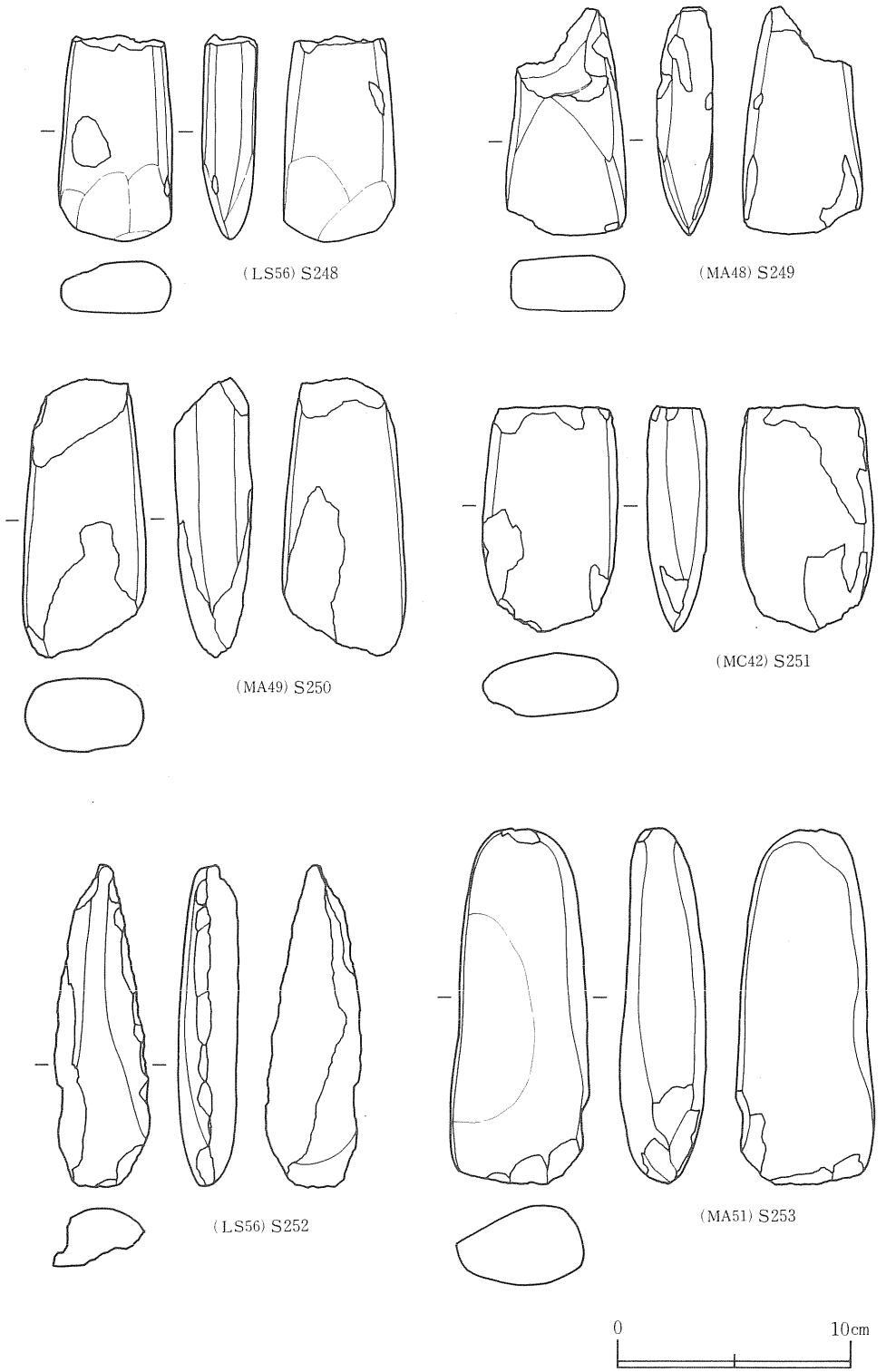
第36図　遺構外出土石器(18)



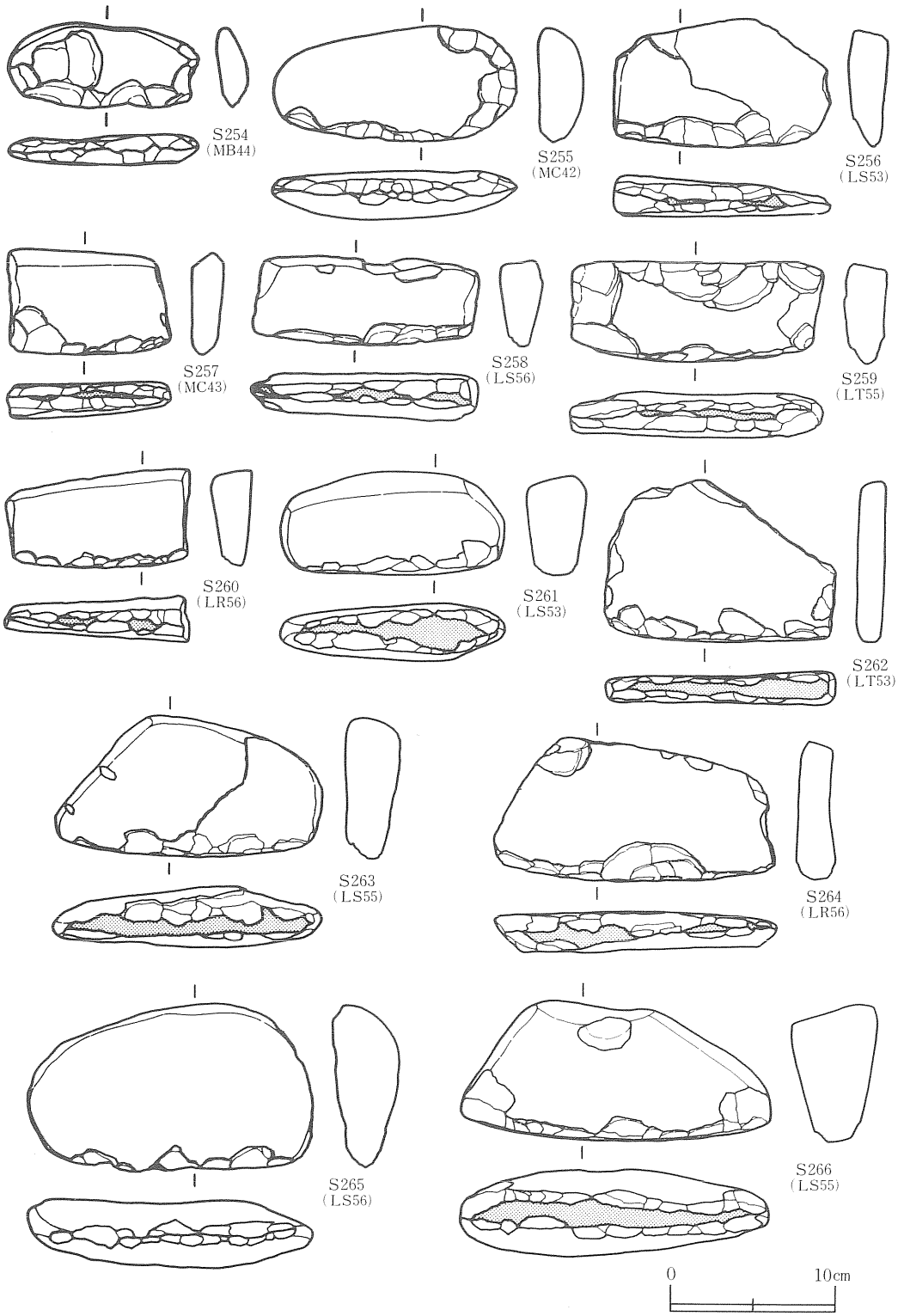
第37図　遺構外出土石器(19)



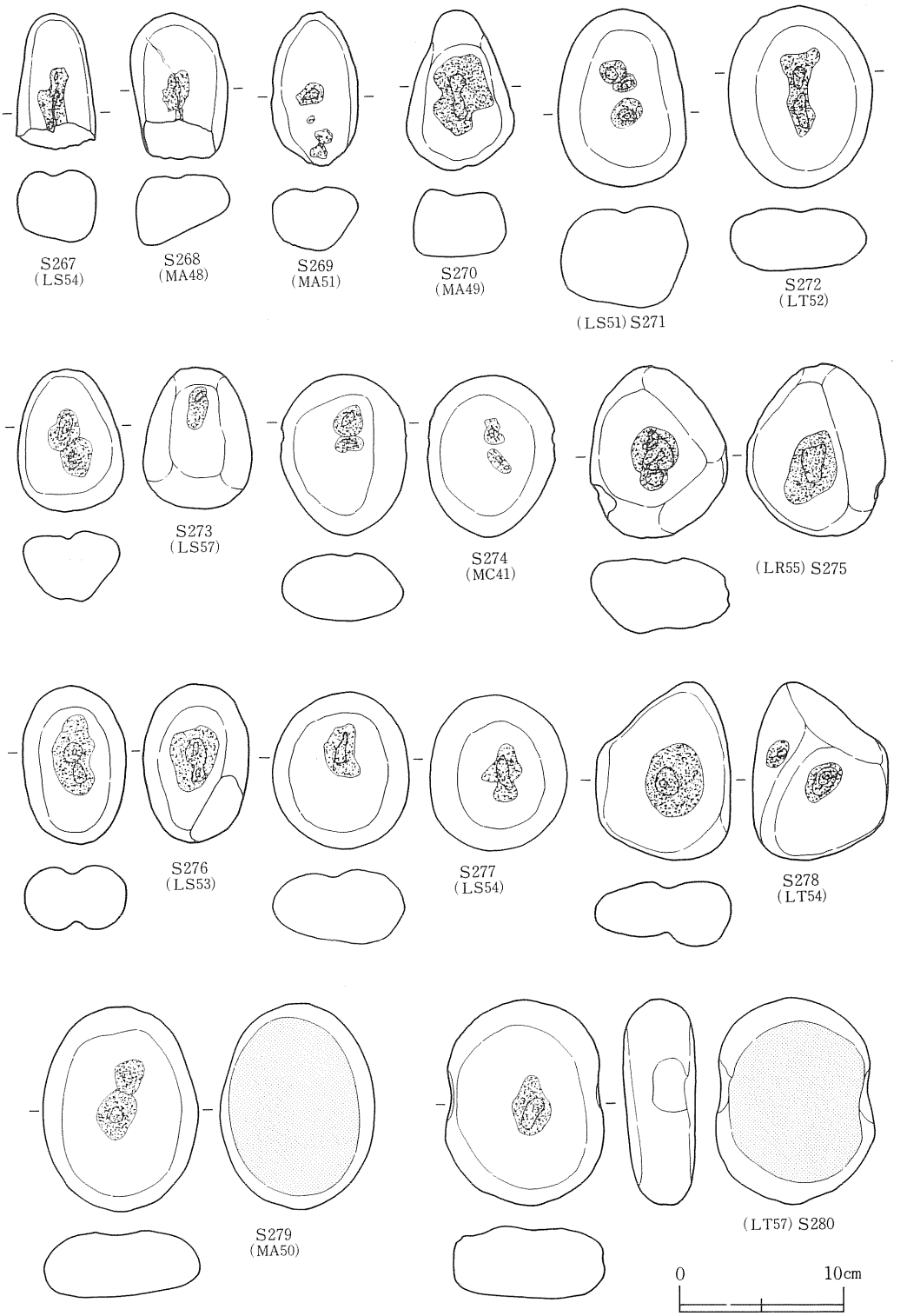
第38図　遺構外出土石器(20)



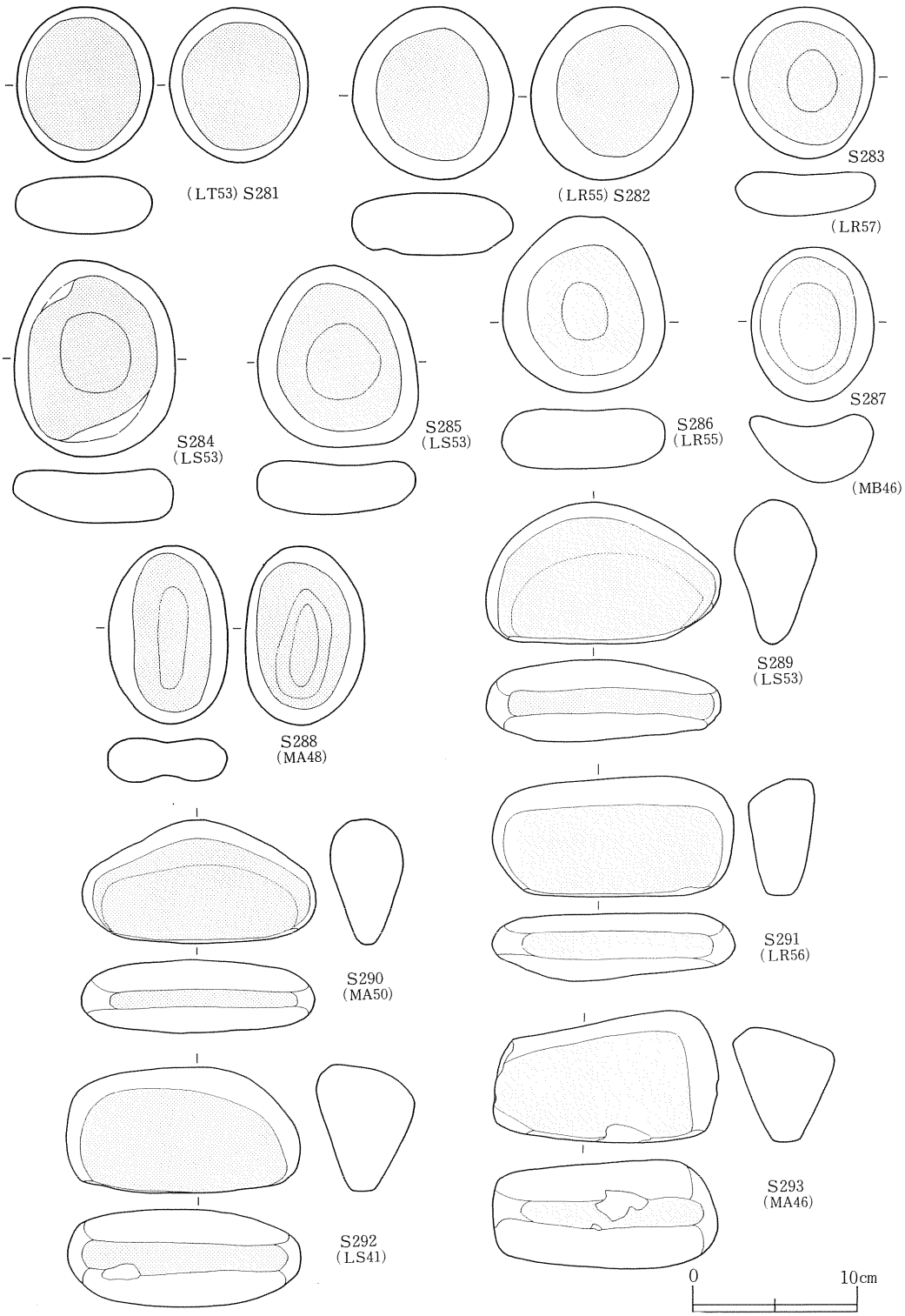
第39図　遺構外出土石器(21)



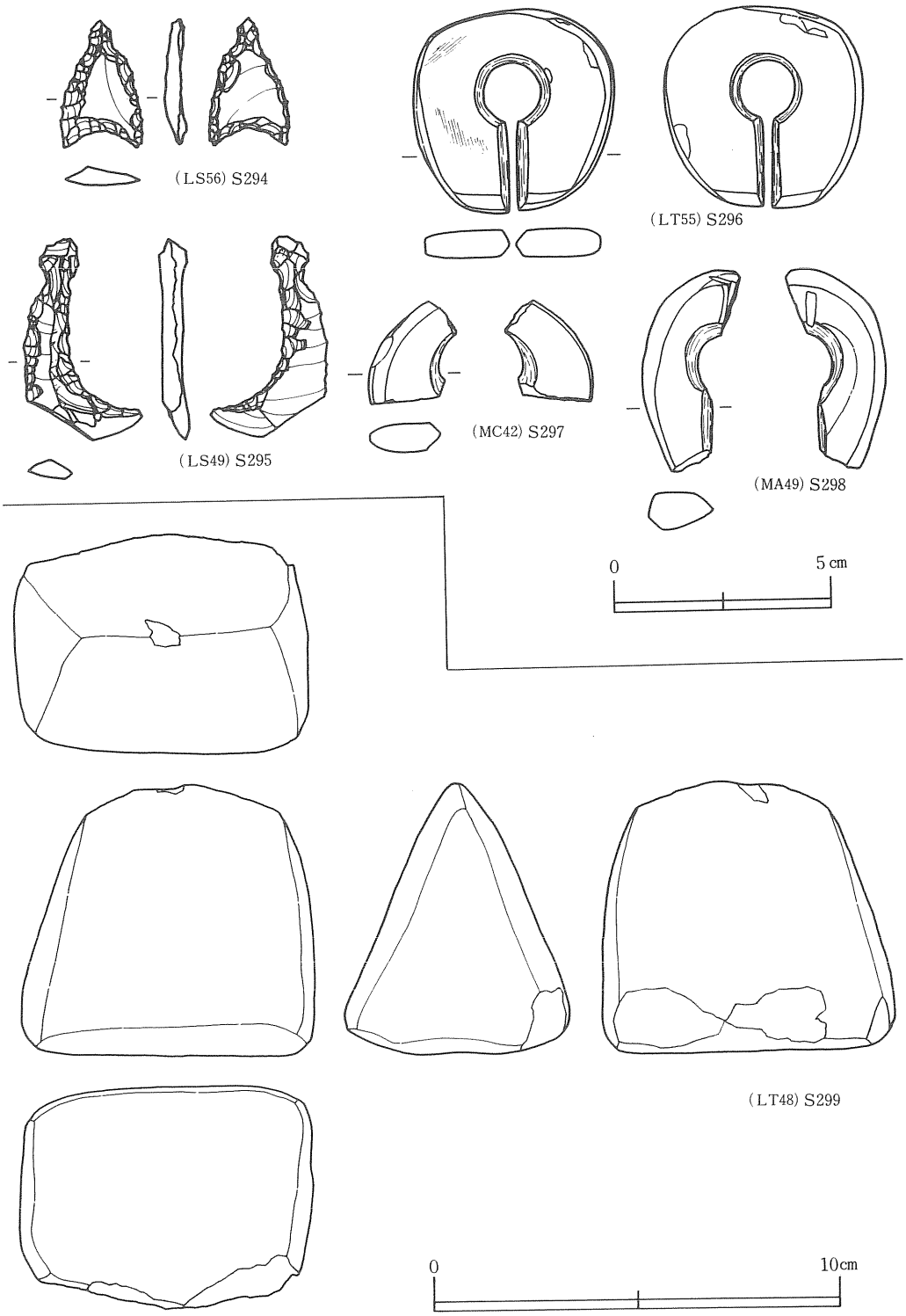
第40図　遺構外出土石器(22)



第41図　遺構外出土石器(23)



第42図　遺構外出土石器(24)



第43図　遺構外出土石器・石製品(25)

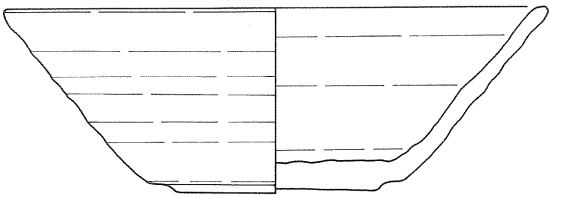
２．平安時代

平安時代の遺構は検出されなかったが、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺が少量出土した。これらは全て破片であり、全体の形状の把握できるものは少なかった。

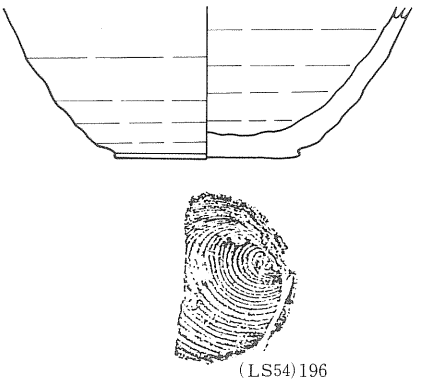
(1)出土遺物(第45～47図、図版40・41)

195～202は土師器杯の破片で、195・197・198は底部から口縁部まであり、その形状が図上復原できるものである。195は器高5.25cm、底径5.6cmで、図上復原による口径は15.4cmである。ロクロ成形後の内外面の調整はなく、ロクロからの切り離しは右回転糸切りである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が浅黄橙色で、内面がにぶい橙色である。196は底部から体部上半まであり、図上復原による底径は5.3cmを測る。ロクロ成形後の内外面の調整はなく、ロクロからの切り離しは左回転糸切りである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内外面とも浅黄橙色である。197は器高が4.9cmあり、図上復原による口径は13.4cm、底径は4.9cmである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内外面とも淡橙色である。198は図上復原による器高が5.0cmほどで、口径が14.3cmである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色で、 内面は浅黄橙色である。 199～202は底部破片である。199・201・202はロクロからの切り離し痕が認められるものである。199 ・ 201 は左回転糸切りで、202は残存部が小さく、回転方向は分からない。いずれも、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、199が外面がにぶい橙色、内面が浅黄橙色、201が外面が黒褐色、内面がにぶい褐色で、202が外面が浅黄橙色、内面が黒色処理されている。200も胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が赤橙色で、内面は淡橙色である。また、200と202は高台付きである。

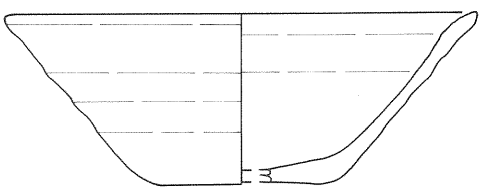
203～215は須恵器である。203は杯、204・205・210～215は甕、207～209は壺の破片である。203・204はロクロ成形されており、胎土は緻密で焼成は良好である。色調は、203が内外面とも淡黄色で、204は外面が暗青灰色、内面が暗灰色である。205はロクロ成形切り離し後に付高台している。胎土は緻密で焼成は良好である。外面は灰色で、内面は灰白色である。206は体部外面が平行叩されており、内面には叩き当て具痕が表出されており、さらに、内面の肩部に、当て具に目の細かい布をかぶせたと思われる痕跡が見られる。また、口縁部外面は叩いた後で、ロクロ等を利用してナデている。図上復原による器高は61cm、口径は32cm、胴部最大径は59cmである。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は内外面とも灰色である。207はロクロ成形されたものである。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は外面が暗青灰色で、内面は黄灰色である。208もロクロ成形されており、胎土は緻密で焼成は良好である。色調は外面が暗青灰色、内面は灰色である。209はロクロ成形切り離し後に付高台している。図上復原による底径は7.5cmである。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は内外面とも灰色である。210は甕肩部、211～215は体部の破片である。すべて内外面に成形痕を残している。



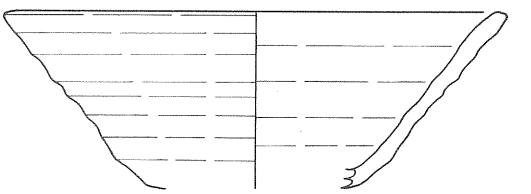
(LS54)195



(LS54)196

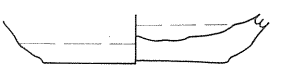


(LS54)197

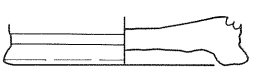


(LS53)198

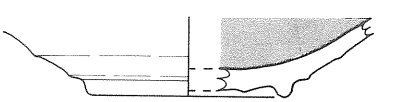
0　10cm



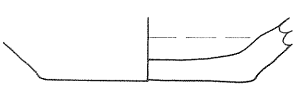
(MA48)199



(LT54)200



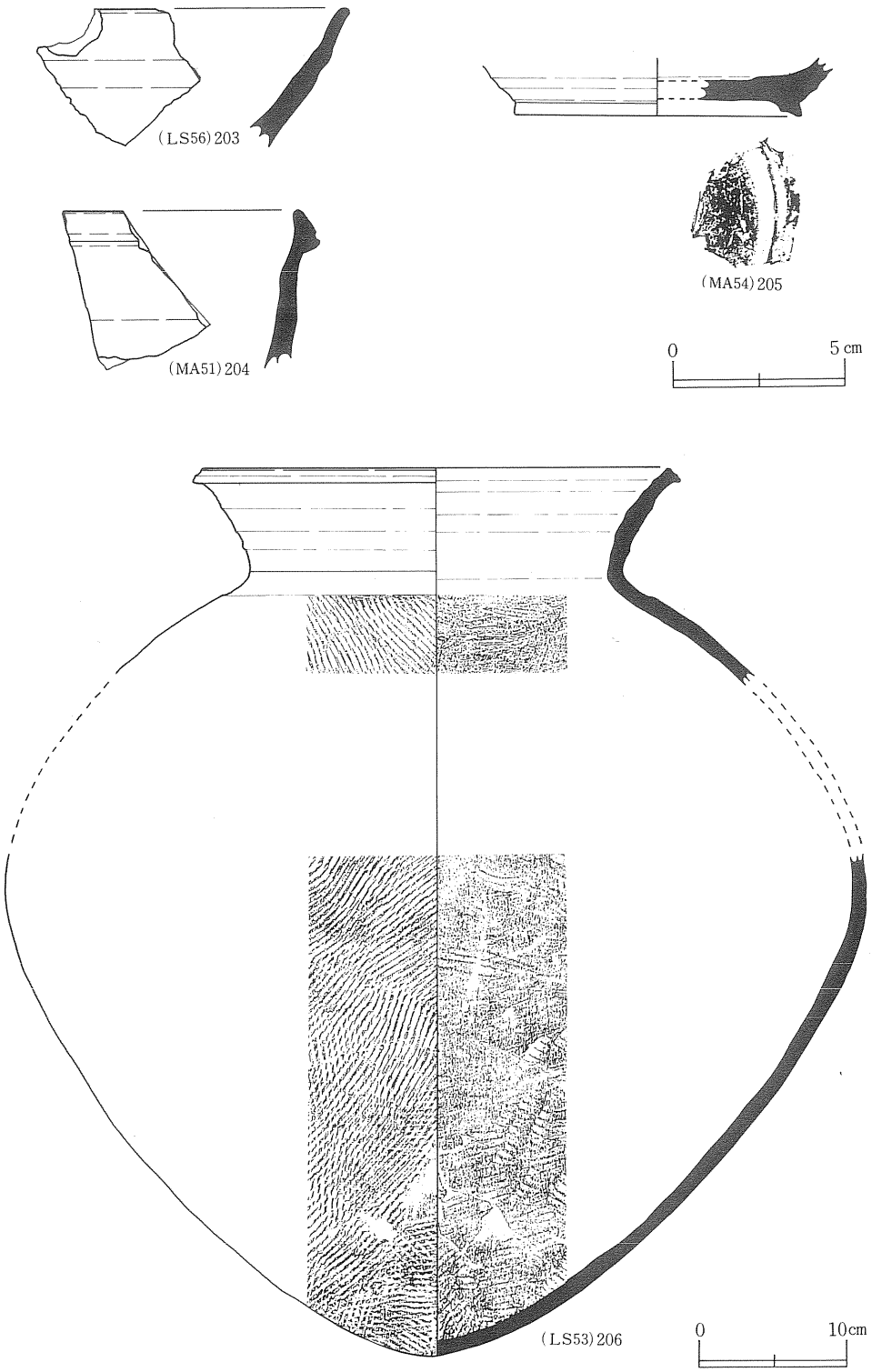
(表採)202



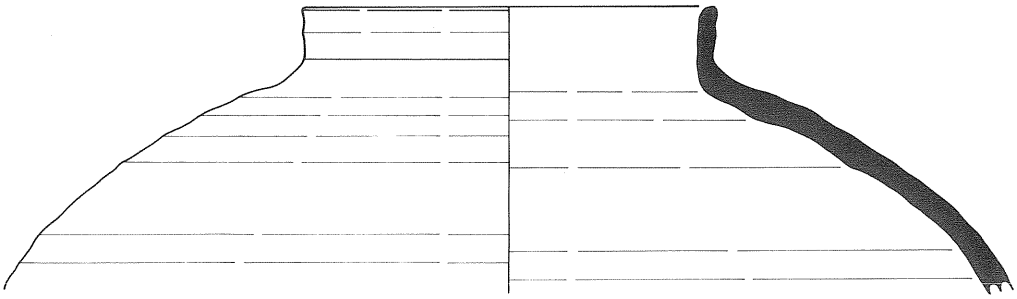
(LT51)201

0　10cm

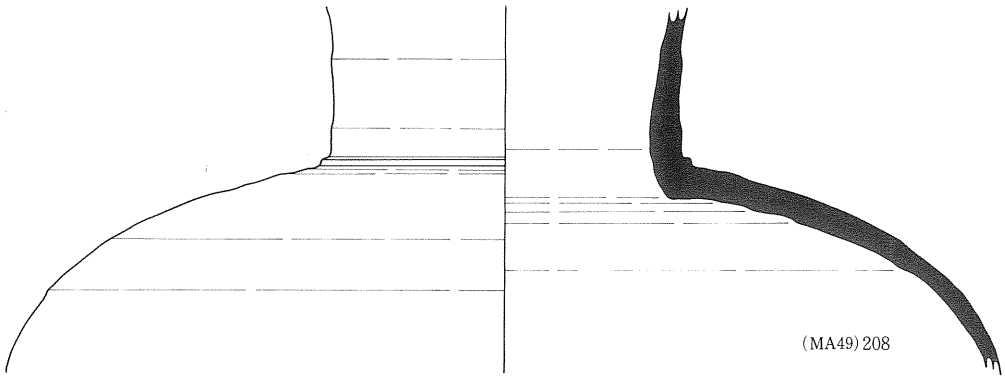
第44図　遺構外出土土器(土師器)(８)



第45図　遺構外出土土器(須恵器)(９)

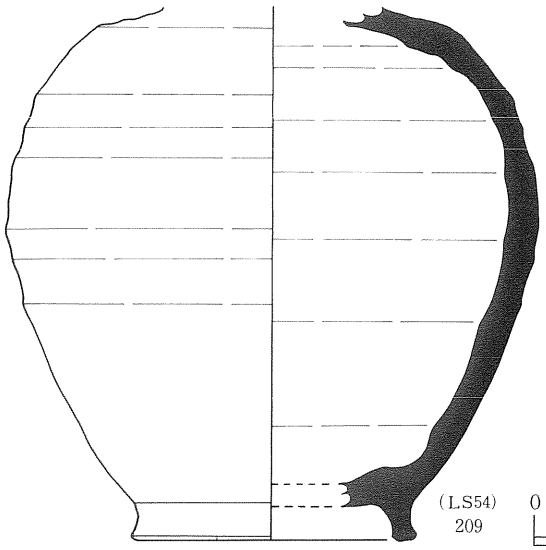


(MA49) 207



(MA49) 208

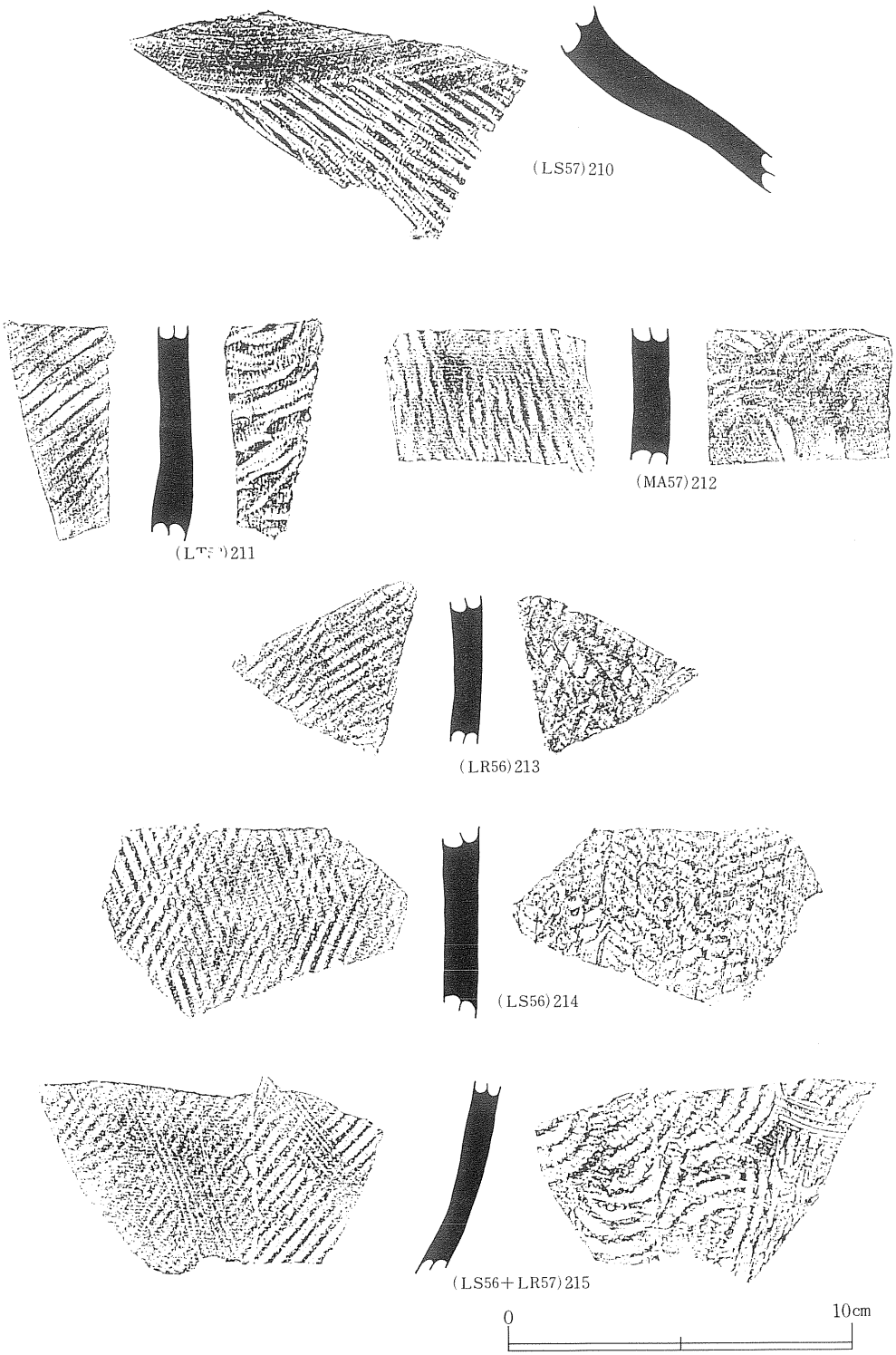
0　10cm



(LS54)
209

0　5 cm

第46図　遺構外出土土器(須恵器) (10)



第47図　遺構外出土土器(須恵器)(11)

第５章　まとめ

ヲフキ遺跡は、昭和初期から土地所有者等によって、縄文時代の土器と石器や土師器・須恵器などが採集され、さらに昭和51年１月、圃場整備事業の際にも多くの遺物が採集されており、早くから知られている遺跡であるが、これまでに一度も調査が行われておらず、今回の調査が初めてであり、遺跡全体のごく一部が明らかにされたにすぎない。しかしながら、過去に得られた資料と本調査で得られた資料から、当該遺跡は、縄文時代前期～晩期、平安時代の複合遺跡であり、調査地周辺の水田地帯に広範囲にわたって存在していることが窺われる。

調査の結果、900㎡の調査範囲から22遺構が検出され、遺物はコンテナで36箱分出土した。しかし、遺構は、水田造成等の際の影響を受けて、上部は削平されており、遺存状態の良好なものは少なかった。出土した土器も、ほとんどが破片のうえに磨滅や剝落しており文様が不鮮明なものが多かった。

遺構について

ＳＫ11出土の石鏃とＳＫ18出土の石匙は、いずれも坑底面直上に位置しており、これらの石器は副葬品の可能性が高く、両土坑の平面形態とＳＫ18の配石の在り方から、墓として構築されたものと考えられる。ＳＫ12は当初、動物を捕獲するため、底面中央部に逆茂木を埋設した陥し穴として作られたものと考えられるが、底面から60cm上方まで人為的に埋め戻して平坦面を作り出し二次的底面としている。その使用目的は、最終的に墓として利用されたものと考えられる。また、ＳＫ08・16・25は礫のあり方や覆土が人為的に埋め戻された状態を示していることから、墓として構築されたものと考える。すべて時期を決定できる資料が乏しいが、これらの土坑は、坑内や周囲の出土遺物から縄文時代前期に属するものと考えられる。

土器埋設遺構の埋設土器は、遺存状態の良好なものがなく、ＳＲ03を除いては、取り上げても細片となって復原不可能であった。しかし、これらの時期は取り上げ前の観察で、木目状撚糸文が施された深鉢形土器とわかったＳＲ04と、ＳＲ03の胎土に繊維や木の実を含む鉢形土器から縄文時代前期に位置づけられるものと考えられる。

出土遺物について

出土土器のうち、当遺跡の縄文時代の主体となる土器は、第Ⅰ・Ⅱ類及び第Ⅲ類の土器である。第Ⅰ類は口縁が大きな波状または平縁をなすと思われ深鉢形土器で、直立や外反する口縁部やその体部上半には、粘土紐が梯子状、鋸歯状、波状に貼付され、粘土紐によって文様が描かれるものである。また、62・63・66のように口唇部には円形竹管文が施された鋸歯状装飾

体や環状装飾体をもつものもある。第Ⅱ類は口縁がほとんど平縁をなすと思われる深鉢形土器で、その口縁部や体部には鋸歯状、波状、平行沈線や格子目状に沈線が施されているものである。100は口唇部に円形竹管文が施された鋸歯状装飾体をもつが、第Ⅰ類の63の鋸歯状装飾体のように幅広ではなく、これが縦に圧縮されスマートになっている。第Ⅰ・Ⅱ類とも文様が施される原体は異なるが、それによって描かれる文様に共通性をもっており、施文された文様から、その土器型式を大木５式土器に求めることができる。さらに、これらの大木５式土器を興野義一氏により前半型式を５ａ式、後半型式を５ｂ式とした分類型式に照らし合わせると、粘土紐を主体として文様が描かれる第Ⅰ類は、前半型式の５ａ式に、沈線を主体とする第Ⅱ類は後半型式の５ｂ式にそれぞれ比定できるものと考えられる。また、第Ⅲ類の112～116(同一個体)は、体部が球形をなしそれに外反する短い口縁部がつくと思われる深鉢形土器か、あるいは吹浦式のように、体部下半が筒形を呈すると考えられる。この土器は、その想定される器形から、ヲフキ遺跡に近い山形県の吹浦遺跡の吹浦式土器に近似するもので、大木６式の範疇に属するものと考える。吹浦式土器は、半截竹管によって細かい刻目様に押引が施され、さらに細い粘土紐の貼付の上にも同様な文様が施されるのが特徴的である。112～116の土器は吹浦遺跡の吹浦式より竹管が太く、しかも器壁も厚い。したがって、大木６式の仲間と考えられるが、吹浦式土器とは若干異なっており、その時期については少し時間差があるものと考えられる。

また、撚糸や縄文のみが施されている土器は、大木５式に併行するかその範疇に属するものと思われる。

出土した石器は、総点数457点であり、うち石鏃の出土率は全体の30％に当たる147点で最も多く、円筒式土器に伴うとされる半円状扁平打製石器が出土している。また、土師器・須恵器などは、10世紀に入る平安時代のものと考えられる。

参考文献

興野義一　「大木式土器理解のために(Ⅳ)」『月刊考古学ジャーナル』24ニュー・サイエンス社　1968(昭和43年)

興野義一　「大木式土器理解のために(Ⅴ)」『月刊考古学ジャーナル』32ニュー・サイエンス社　1969(昭和44年)

興野義一　「大木式土器理解のために(Ⅵ)」『月刊考古学ジャーナル』48ニュー・サイエンス社　1970(昭和45年)

興野義一　「大木５ｂ式土器の提唱－宮城県長者原遺跡出土資料によるー」『古代文化』第二十二巻　第四号(通巻第一四一号)　1970(昭和45年)

山形県教育委員会　『吹浦遺跡 第１次緊急発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第82集　1984（昭和59年）

山形県教育委員会　『吹浦遺跡 第２次緊急発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第93集　1985（昭和60年）

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』　秋田県文化財調査報告書第166集　1988(昭和63年)

1　遺跡遠景（東▷西）

2　遺跡遠景（南西▷北東）

図版2

1　調査前全景（北▷南）

2　調査前全景（北西▷南東）

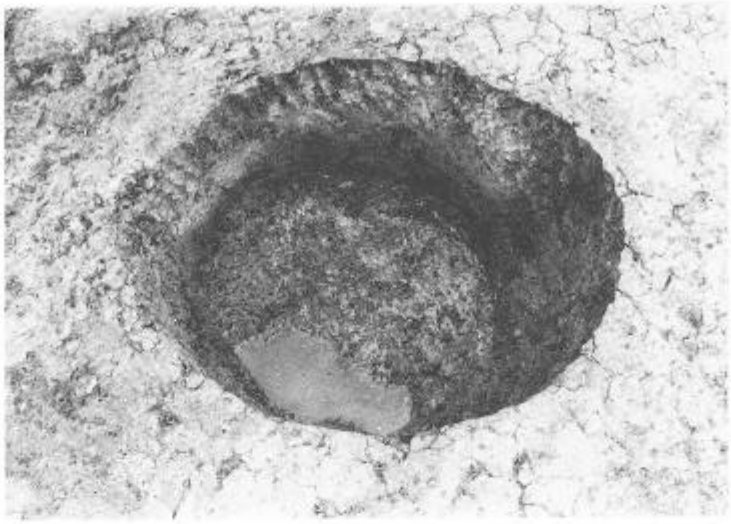
1　調査後全景（北▷南）

2　調査後全景（南▷北）

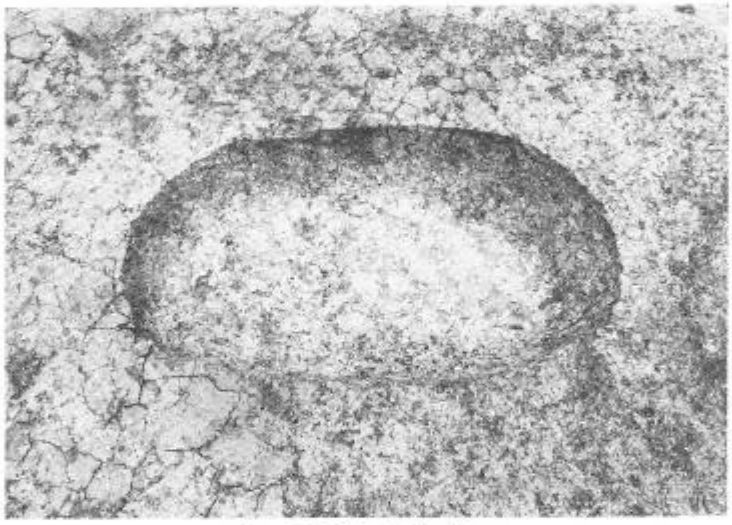
図版4

1　調査風景（北▷南）

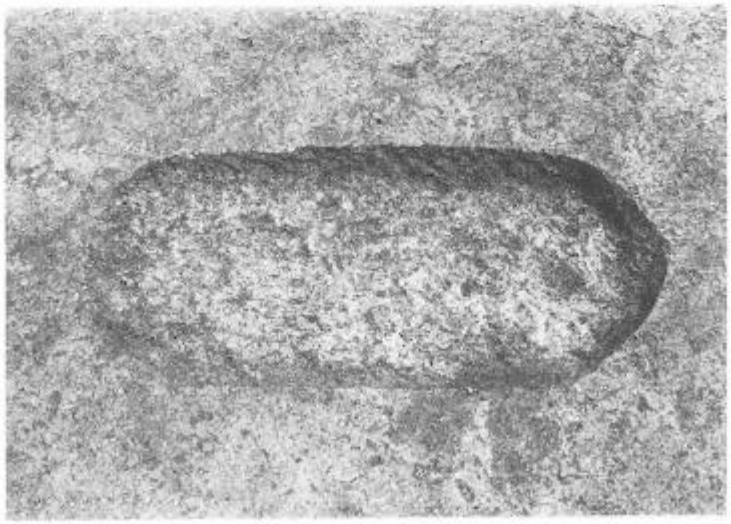
2　調査風景（西▷東）



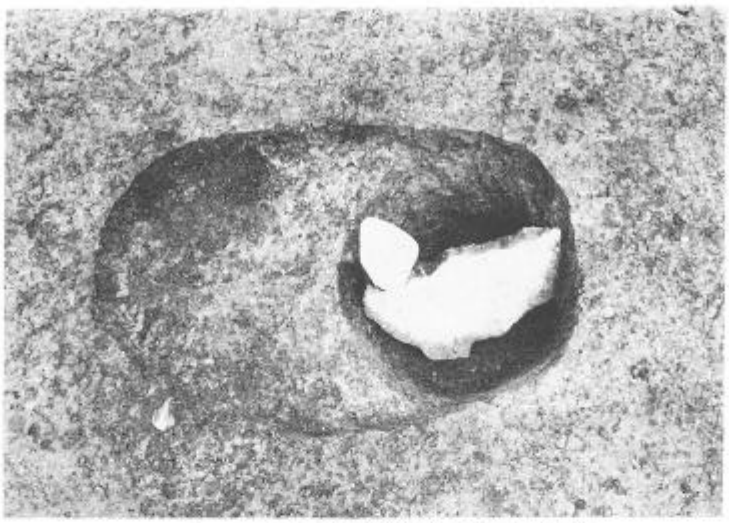
1　SK05（南西▷北東）



2　SK06（南▷北）

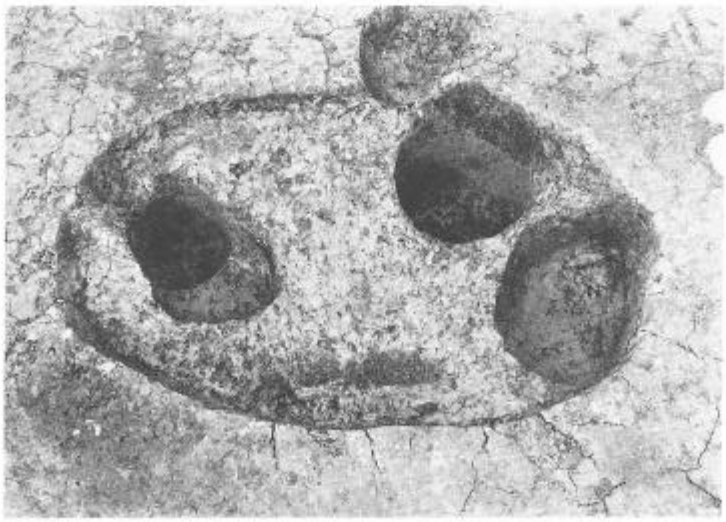


3　SK07（西▷東）

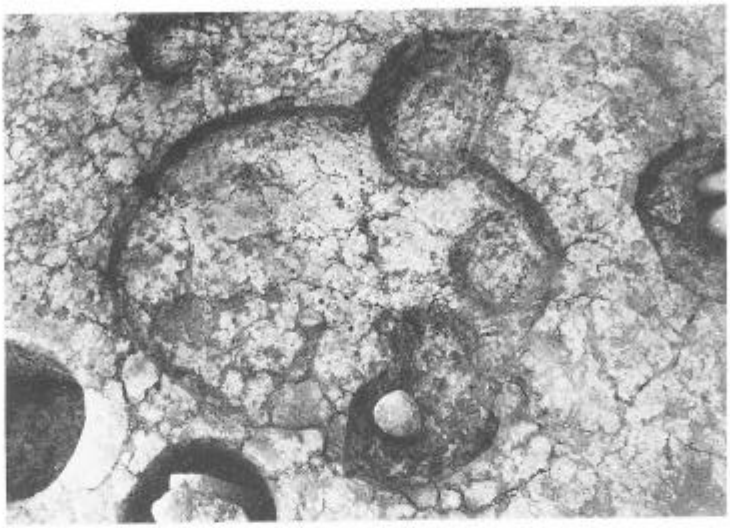


1　SK08礫検出状況（南西▷北東）

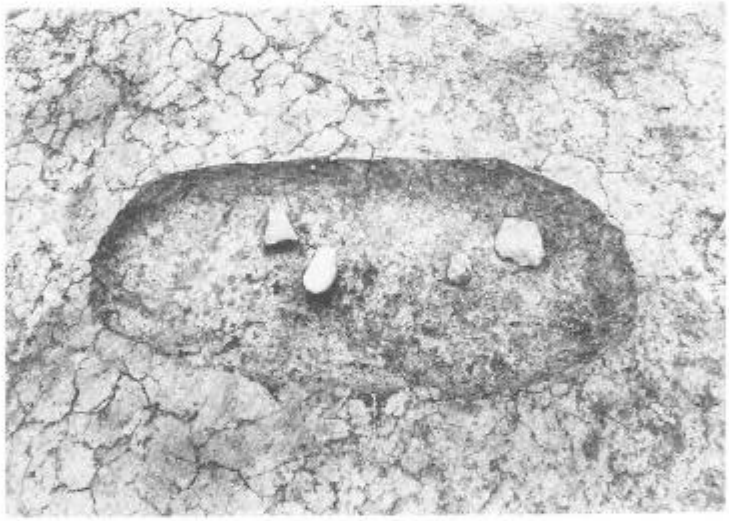
2　SK08（南西▷北東）



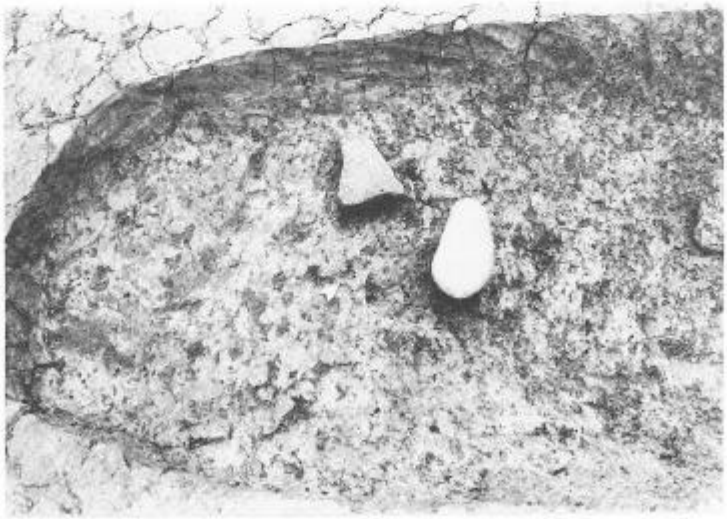
3　SK09（西▷東）



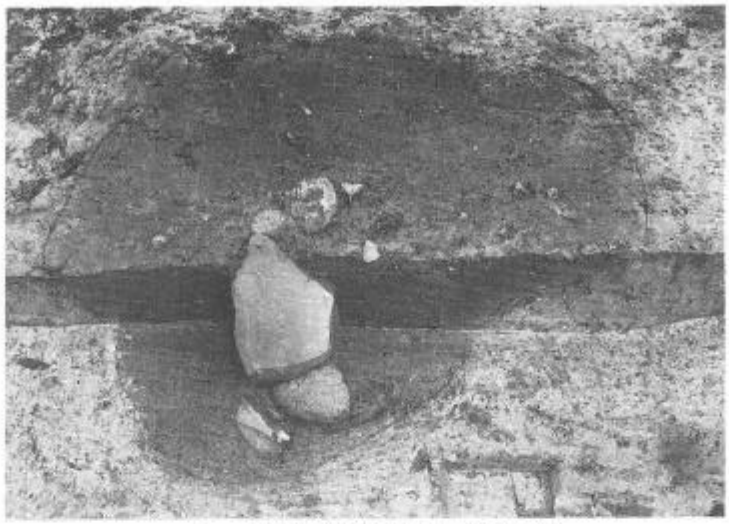
1　SK10（西▷東）



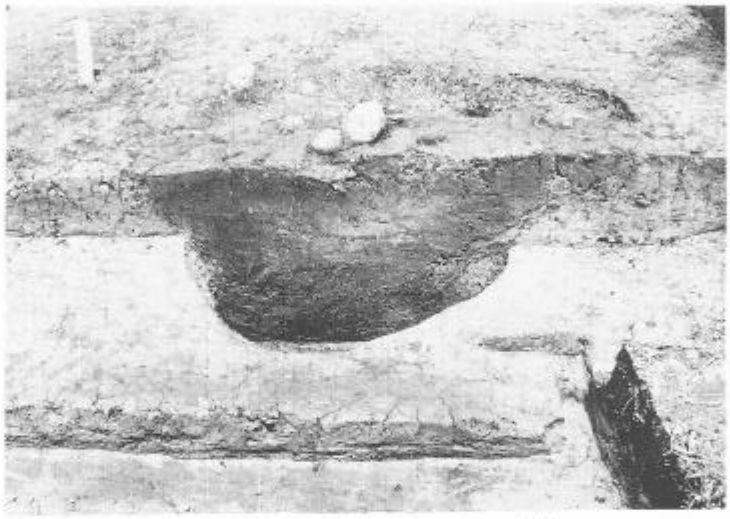
2　SK11（南西▷北東）



3　SK11遺物出土状況（南西▷北東）

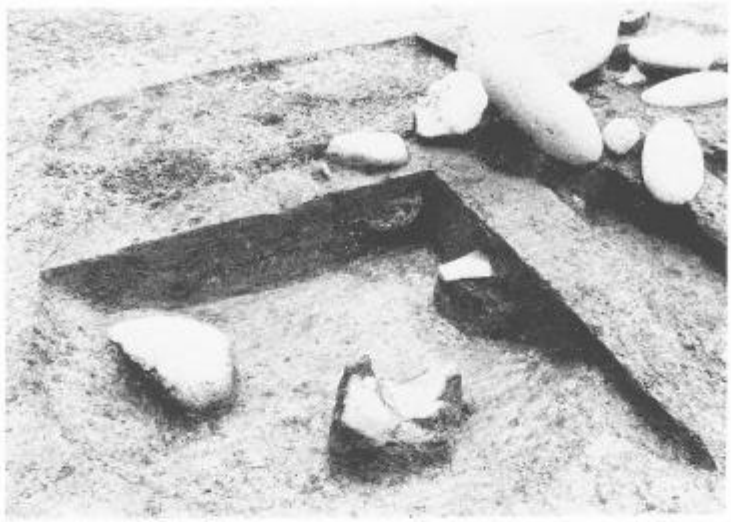


1　SK12礫検出状況（南▷北）

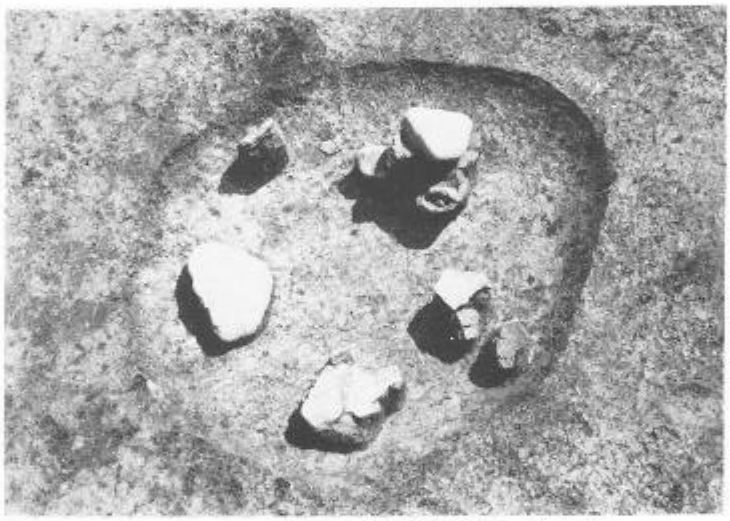


2　SK12土層断面（南▷北）

3　SK12（南▷北）

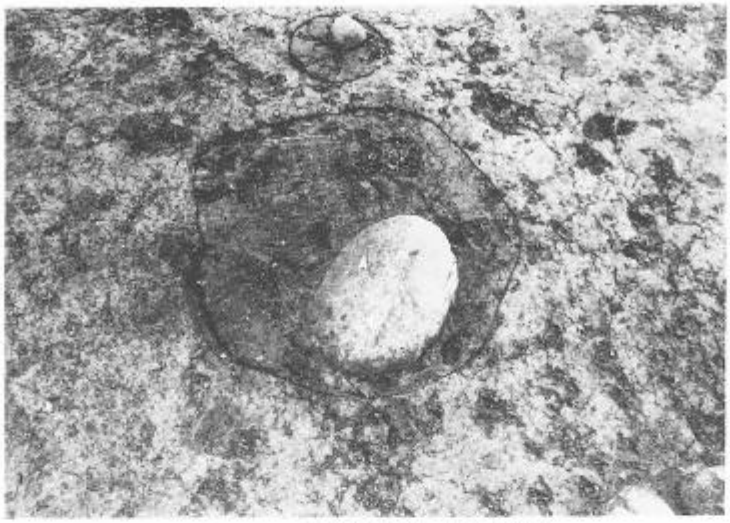


1　SK14土層断面（北東▷南西）

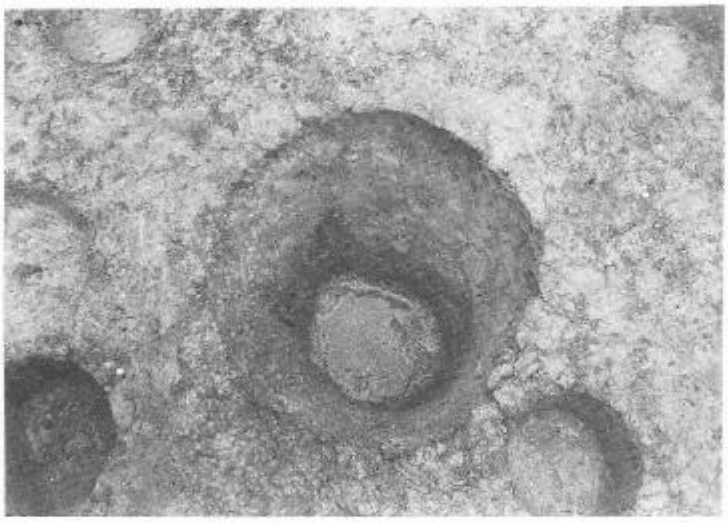


2　SK14遺物及び礫検出状況（北▷南）

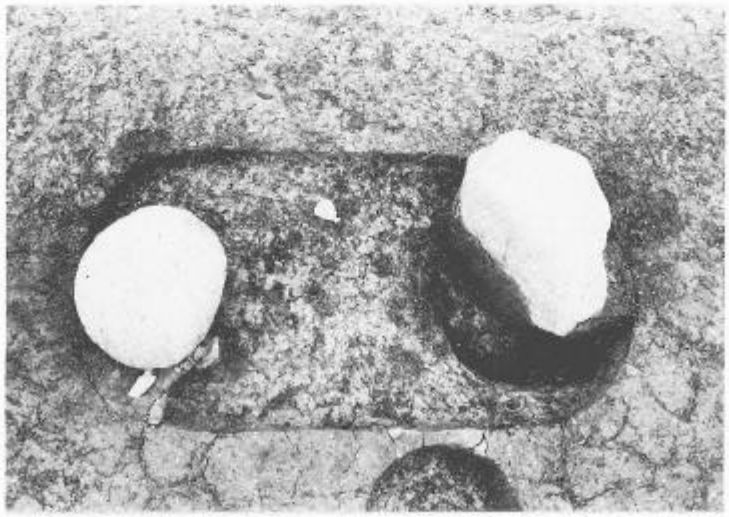
3　SK14（北▷南）



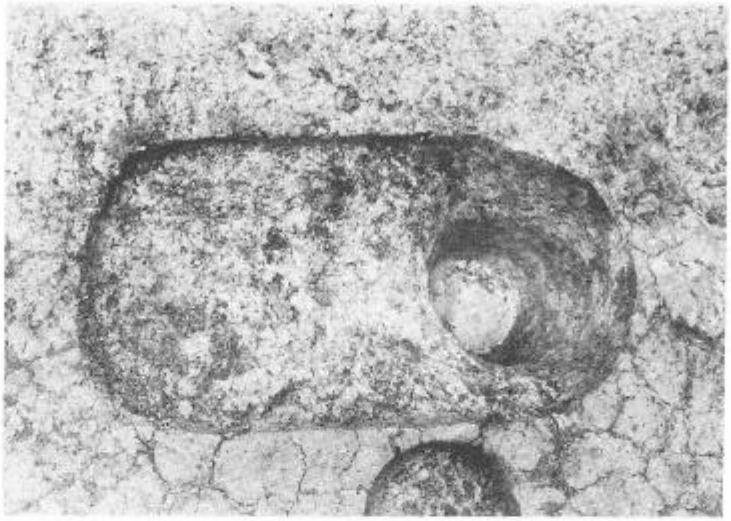
1　SK16検出状況（南▷北）



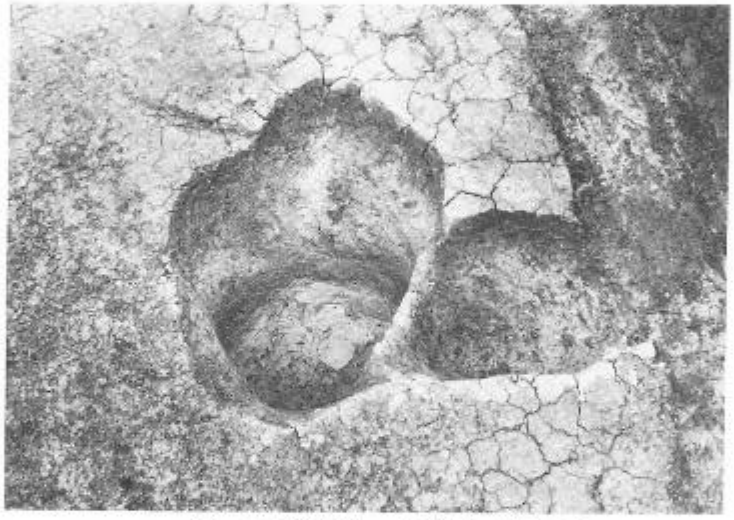
2　SK16（西▷東）



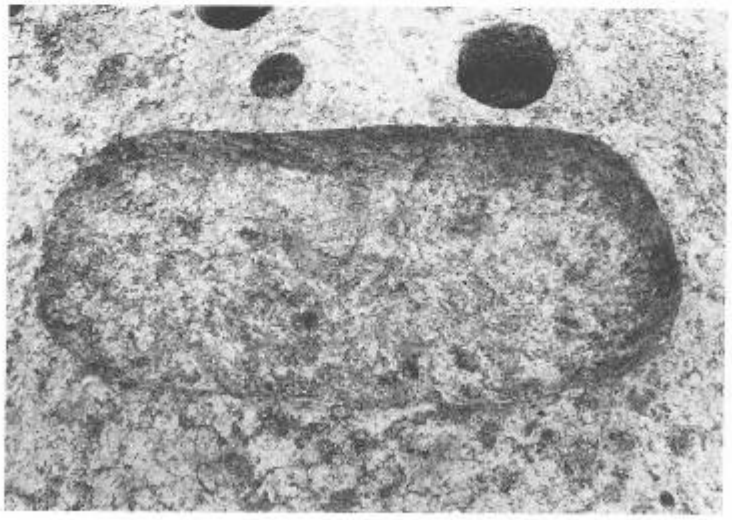
3　SK18遺物及び礫検出状況（西▷東）



1　SK18（西▷東）

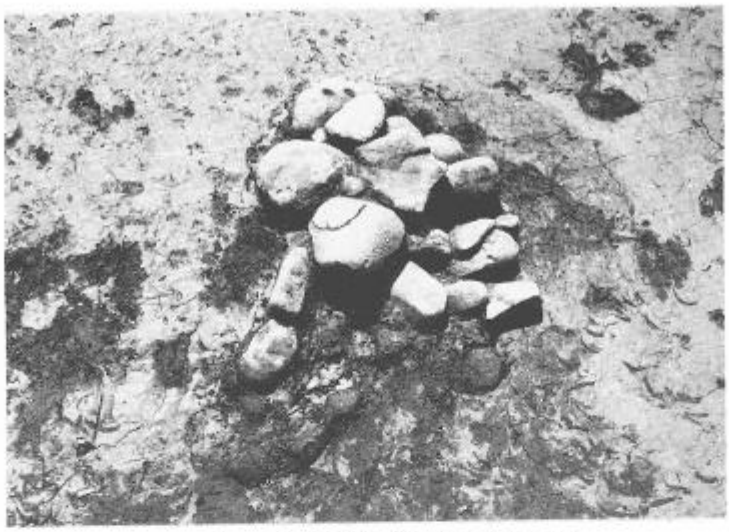


2　SK22(左)・23(右)（東▷西）

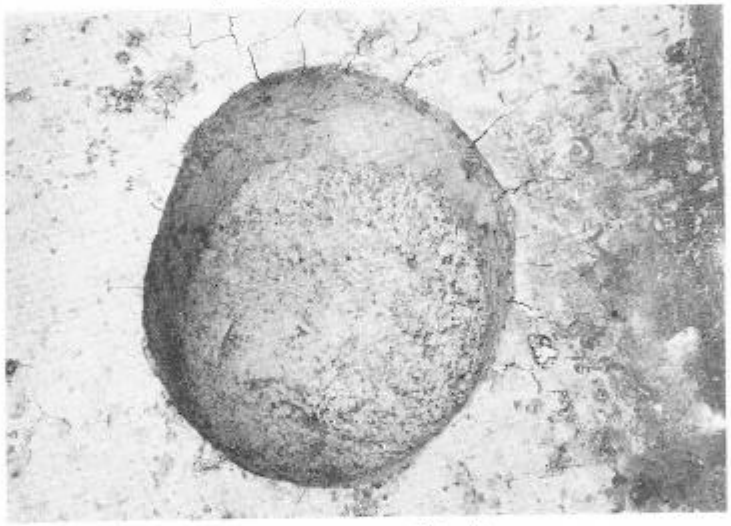


3　SK24（南▷北）

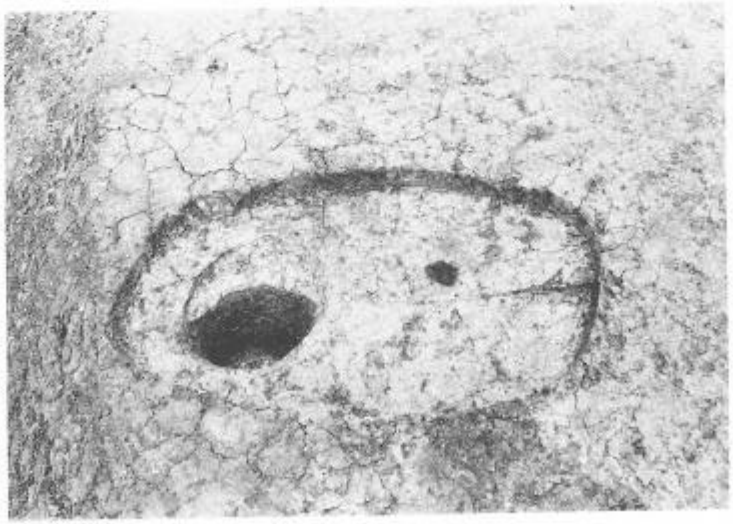
図版12



1　SK25礫検出状況（東▷西）



2　SK25（南▷北）



3　SK28（南▷北）

1　SR02（南▷北）

2　SR03（西▷東）

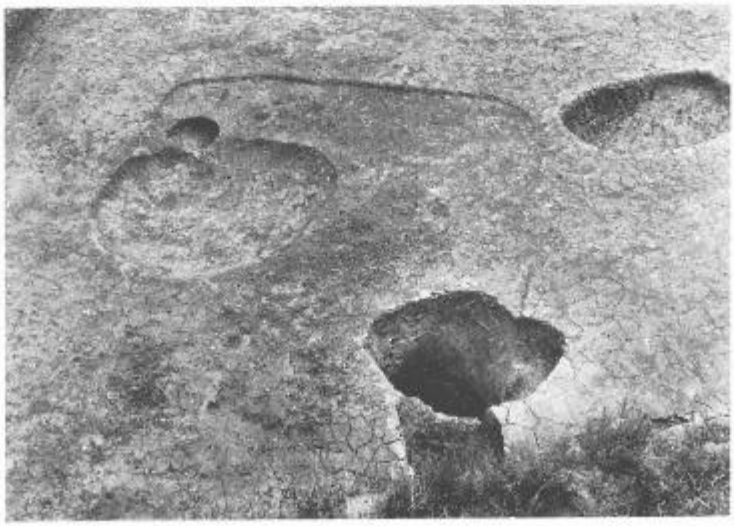
3　SR04（西▷東）

4　SR13（西▷東）

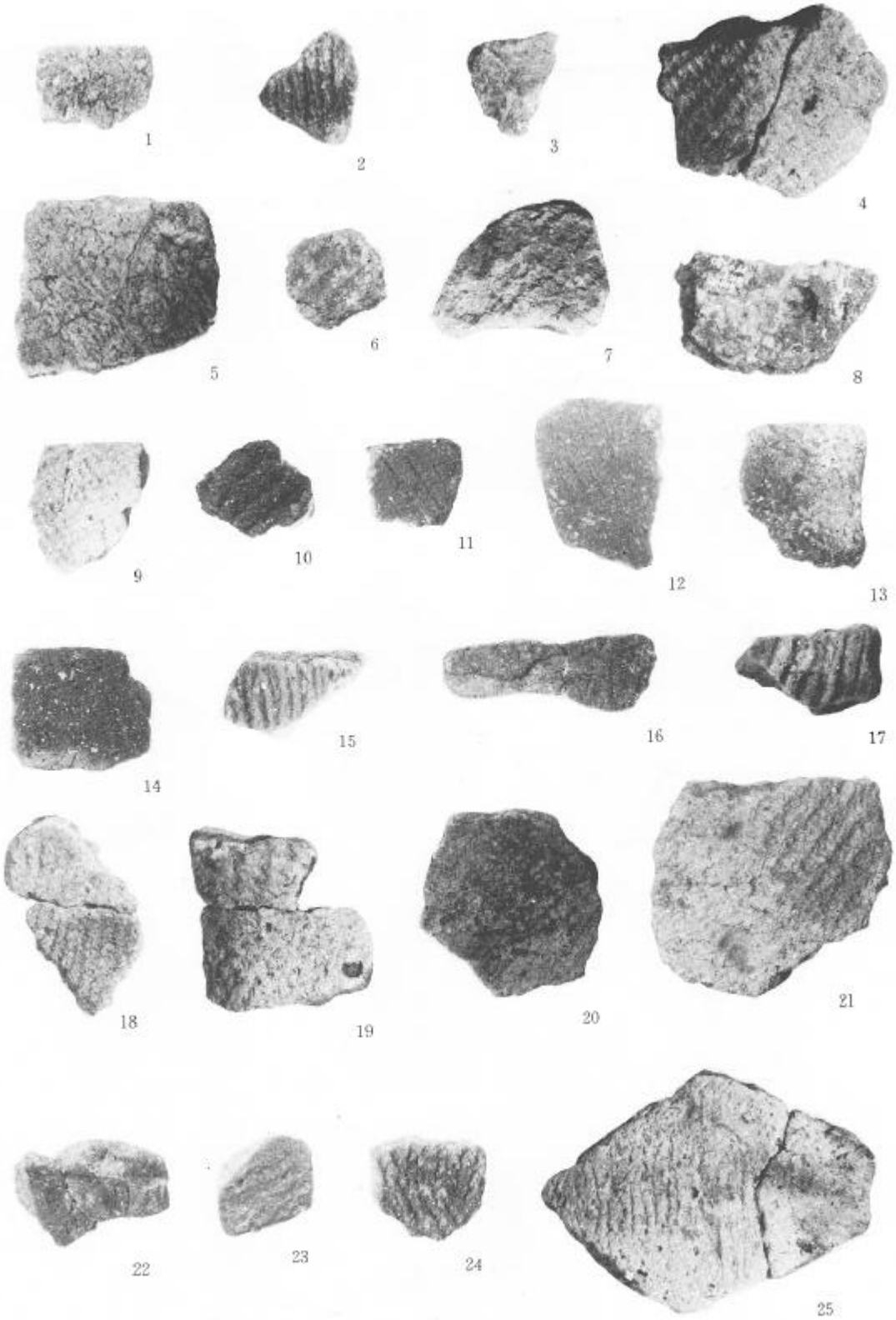
図版14

1　SX01礫検出状況（南▷北）

2　SX01遺物検出状況（西▷東）

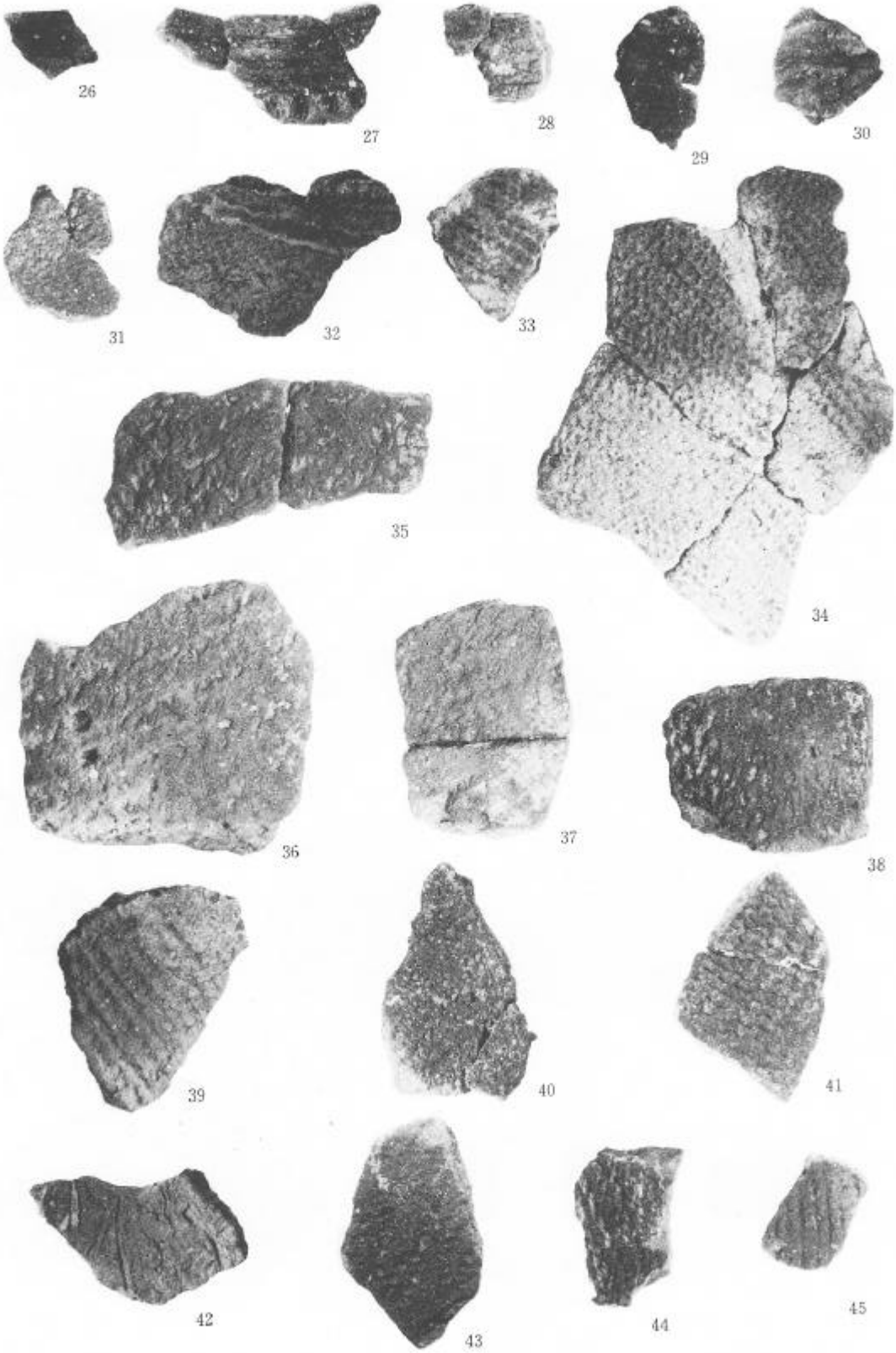


3　SX01完掘状況（北▷南）



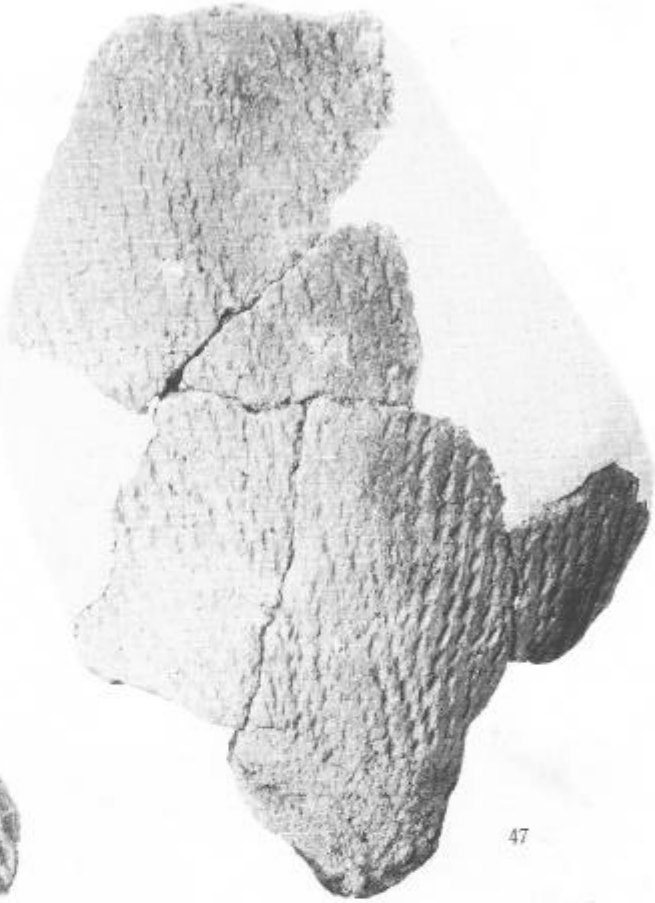
遺構内出土土器

図版16



遺構内出土土器

46



47

48

49

50

遺構内出土土器

図版18

51

52

53

54

55

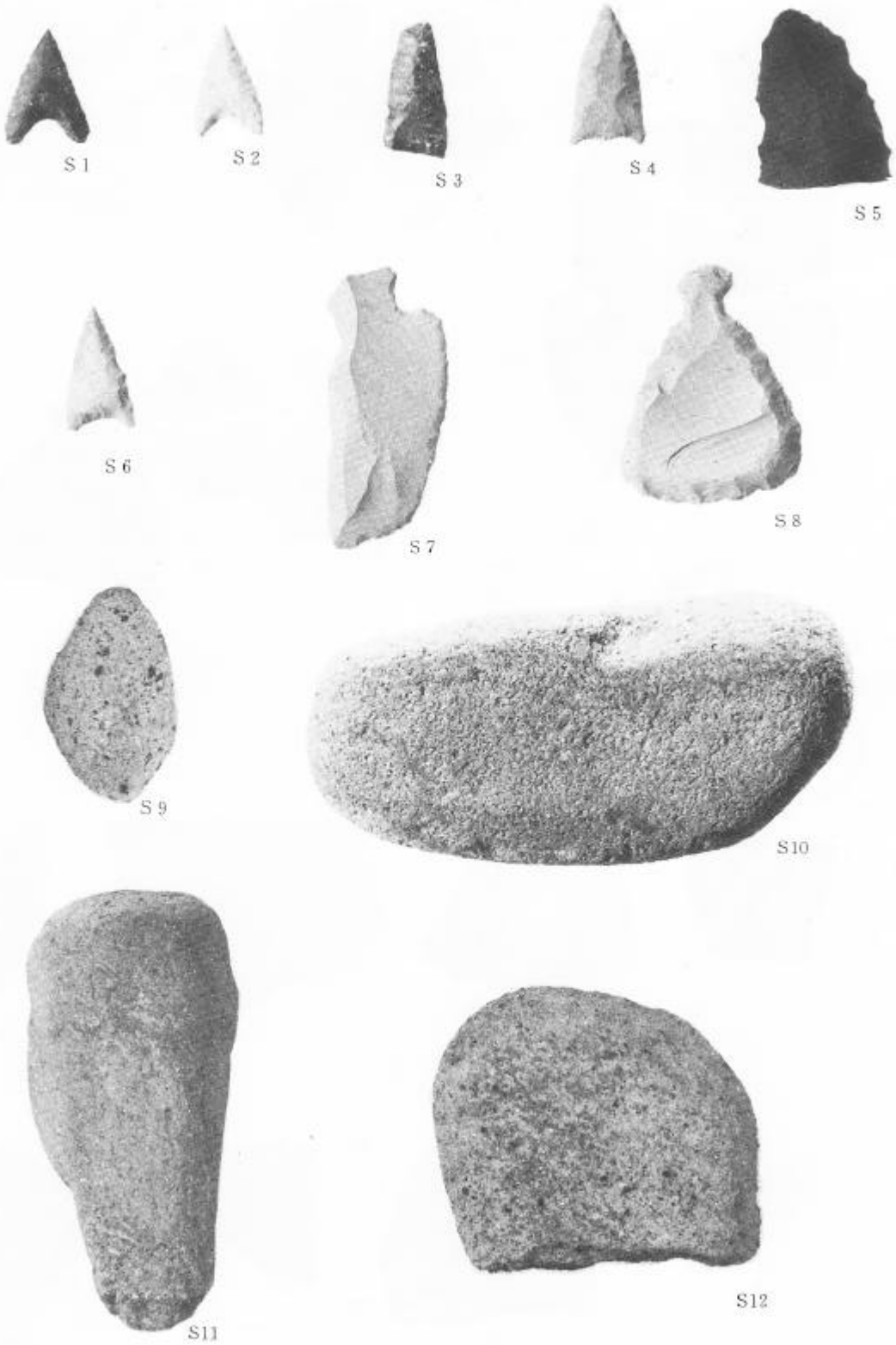
56

57

58

59

遺構内出土土器



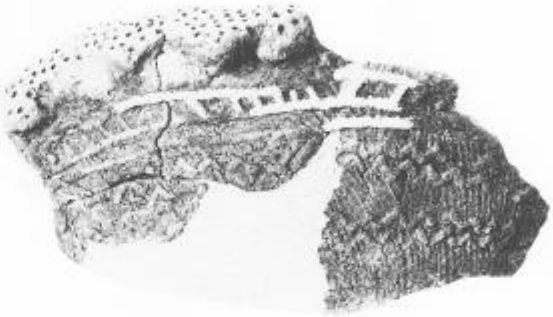
遺構内出土石器

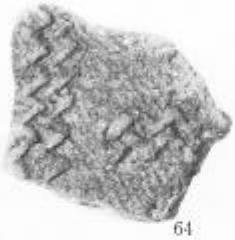
図版20

60

61

62


63


64

65

66

67

68

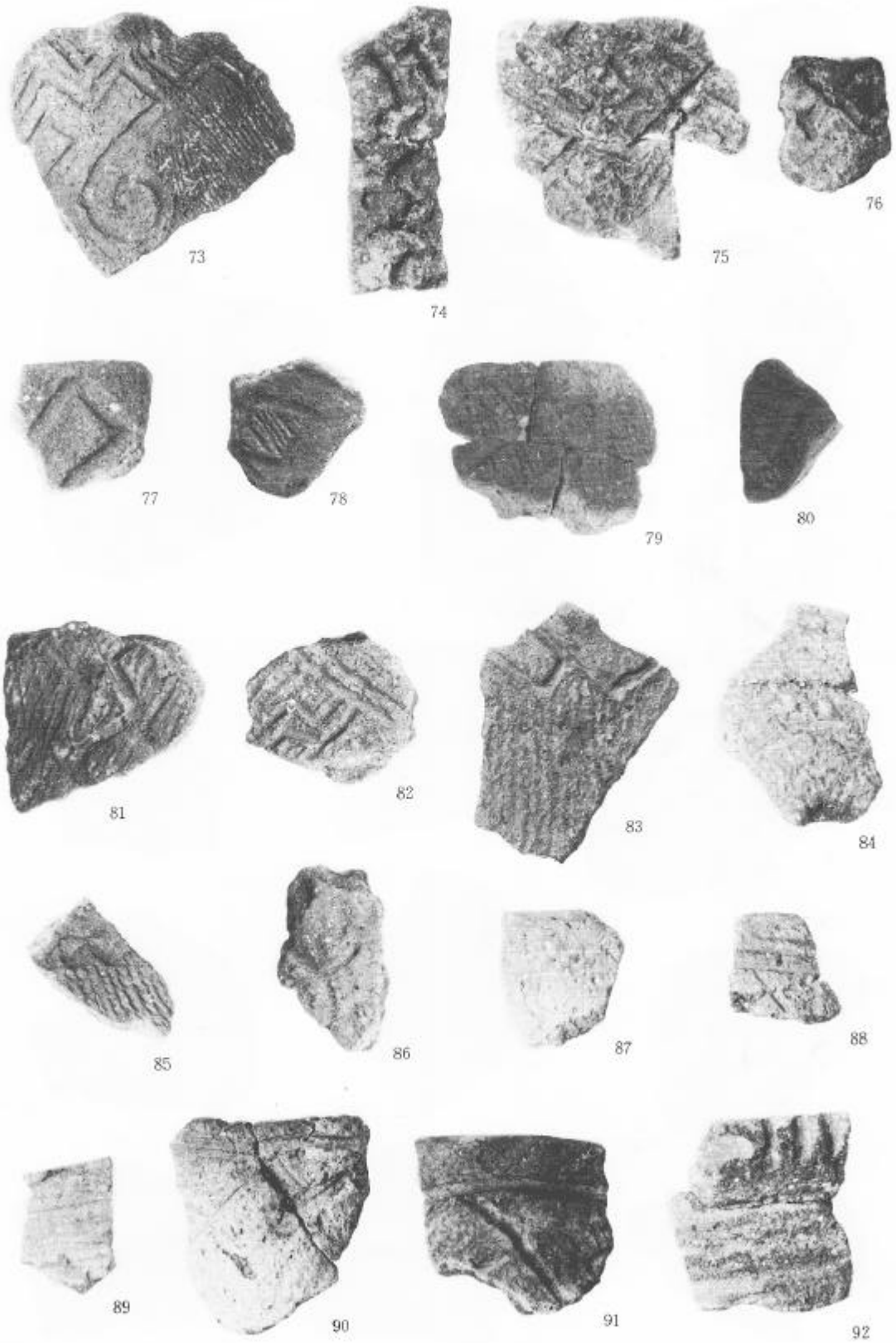
69

70

71

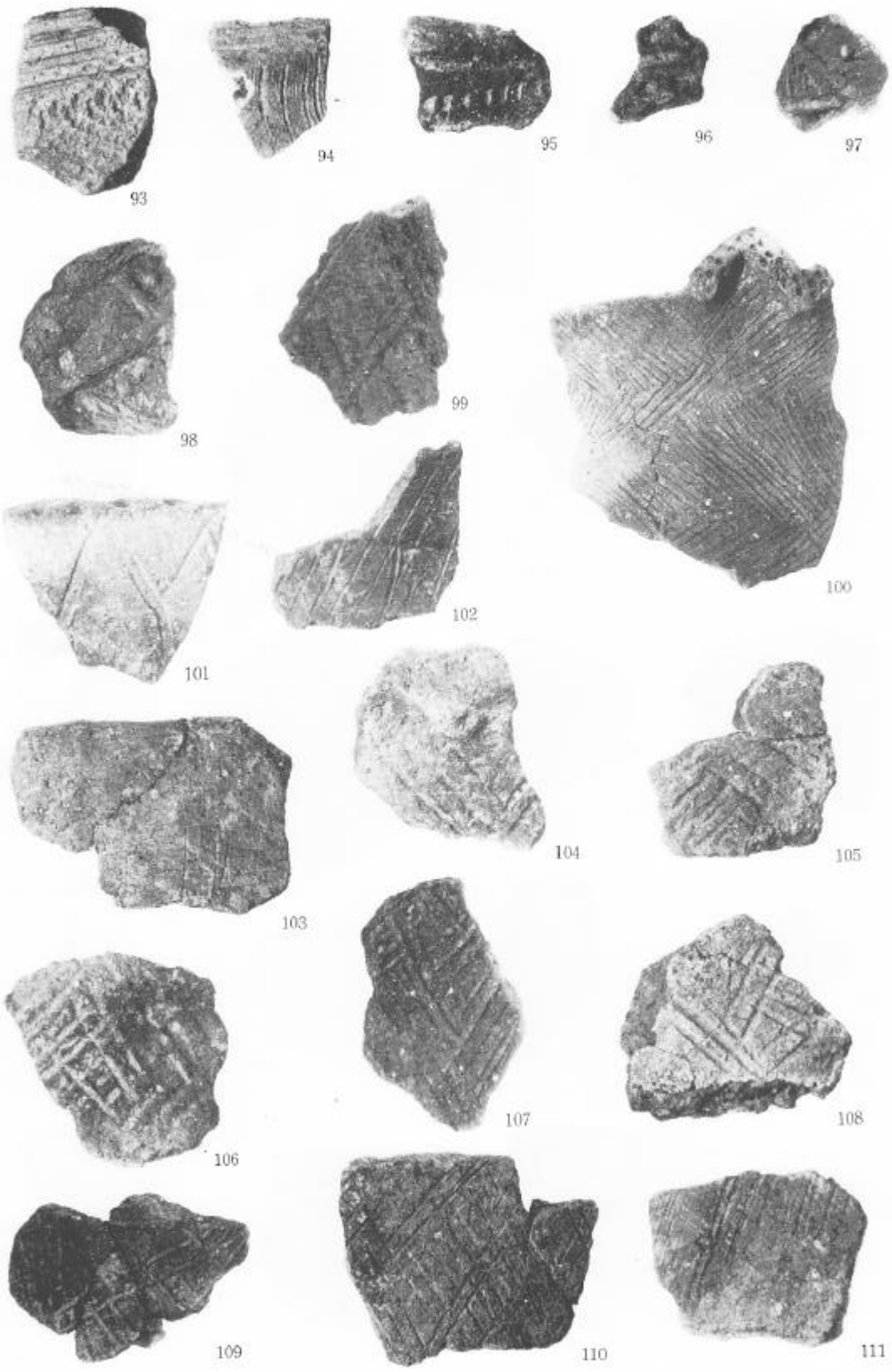
72

遺構外出土土器

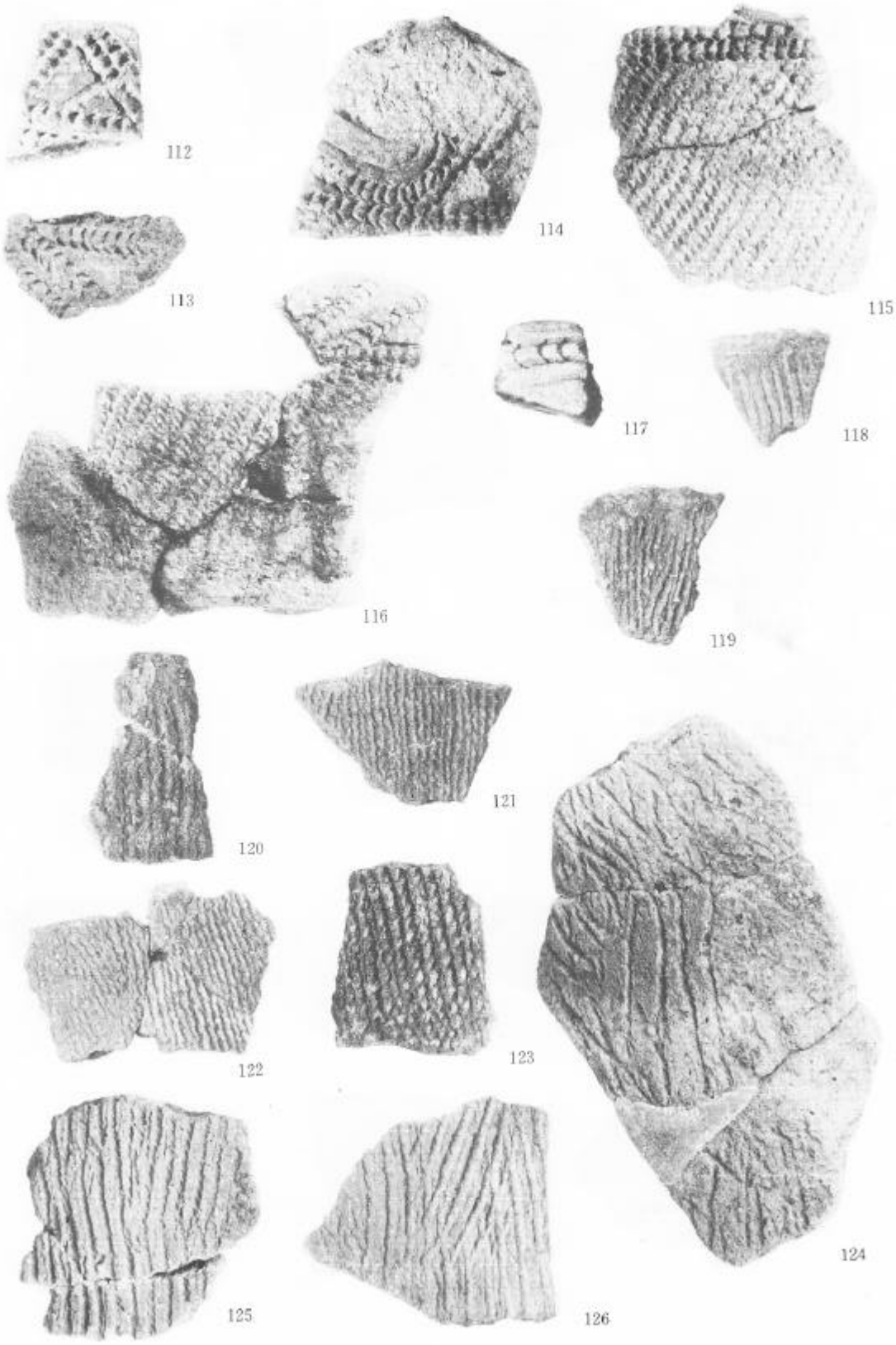


遺構外出土土器

図版22



遺構外出土土器



遺構外出土土器

図版24

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

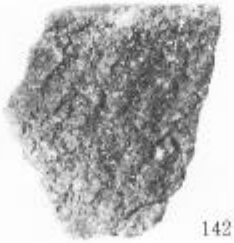
137

138

139

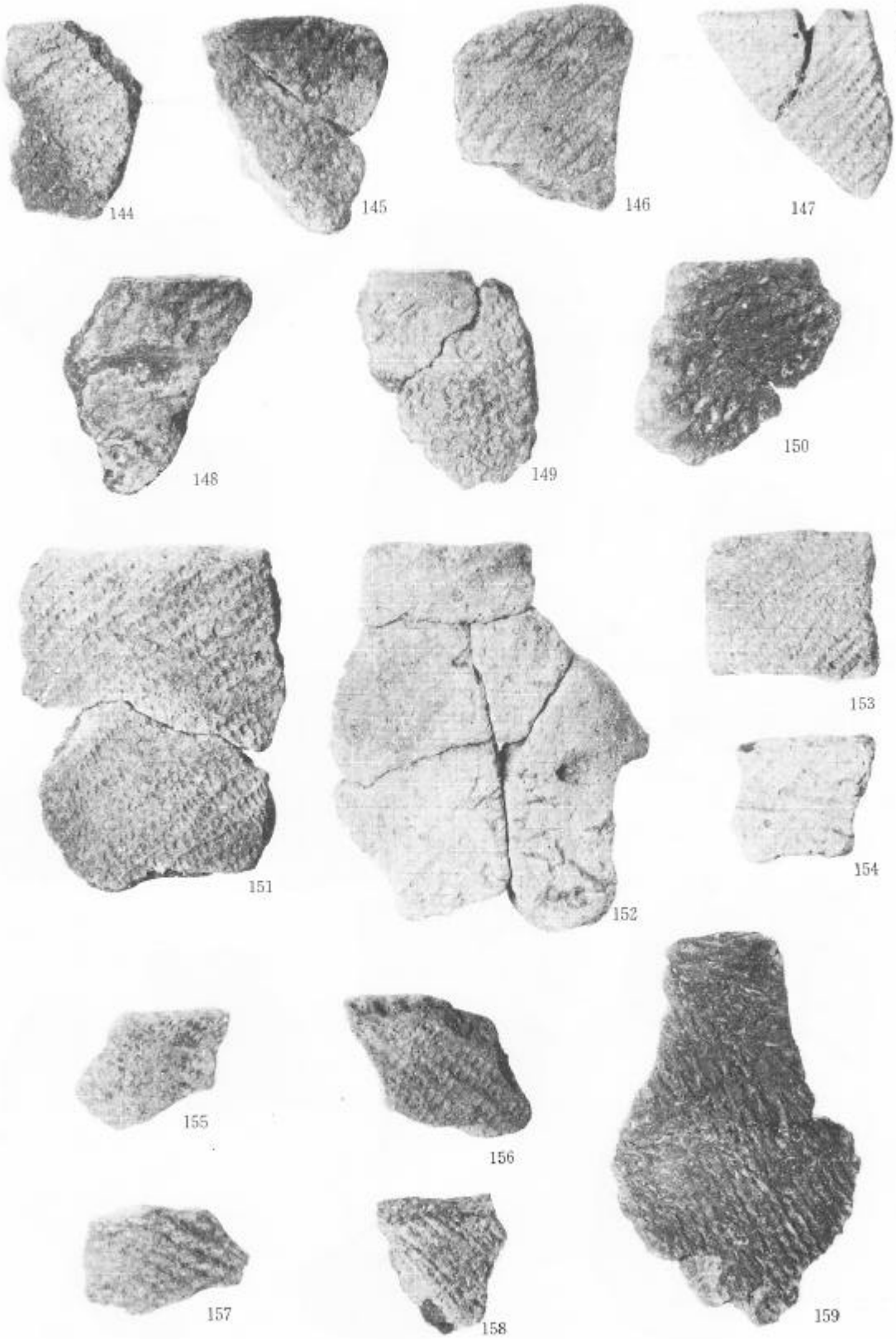
140

141


142

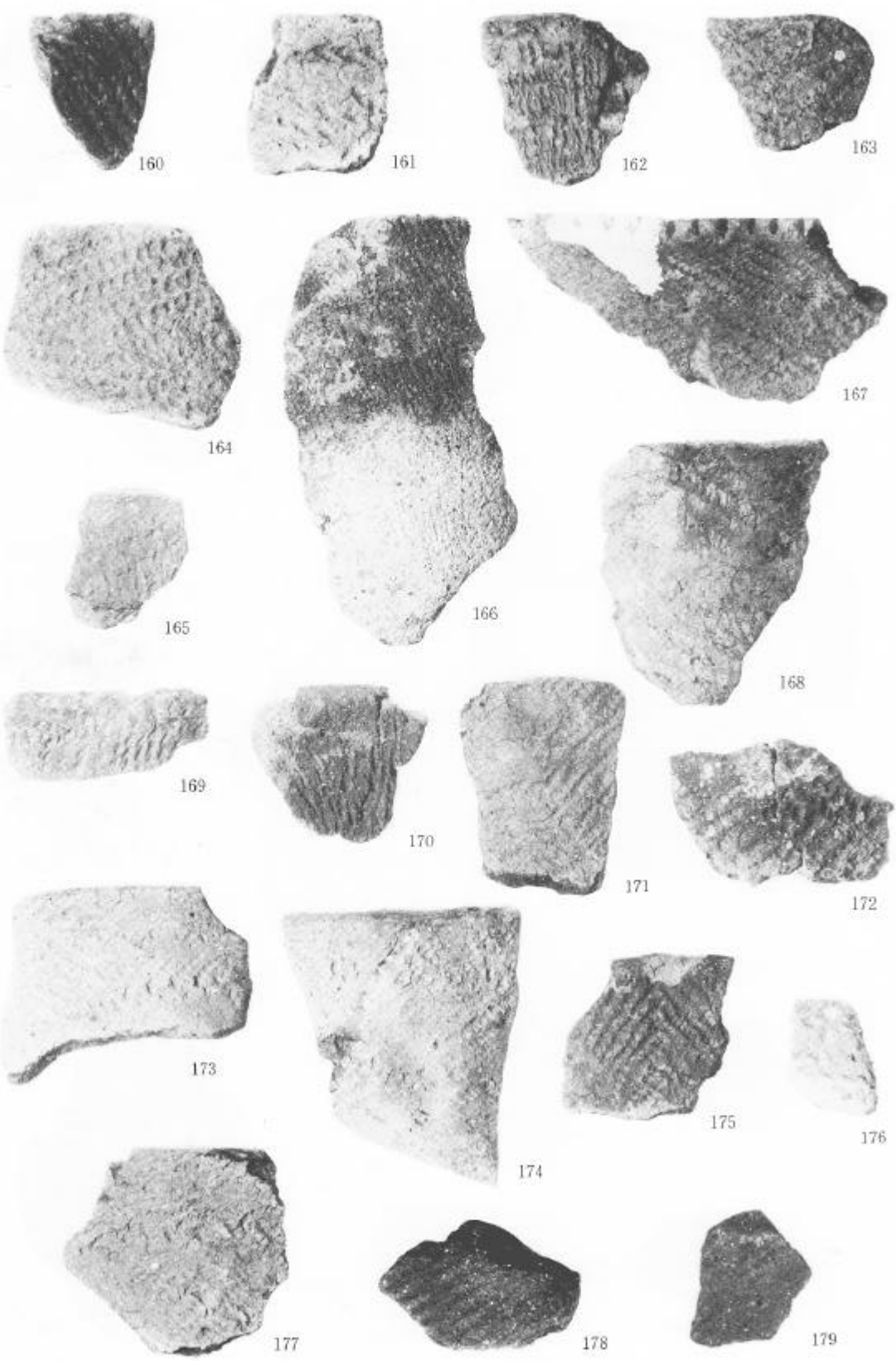
143

遺構外出土土器



遺構外出土土器

図版26



遺構外出土土器

180

181

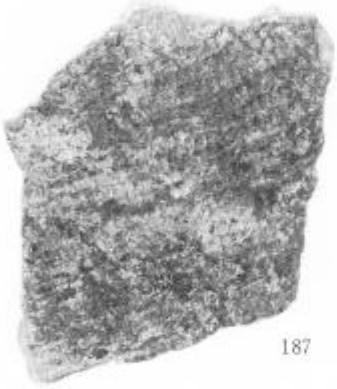
182

183

184

186

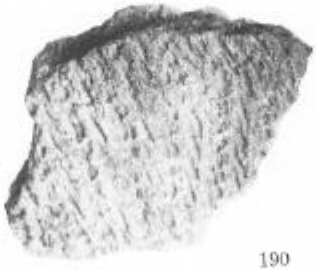
185


187

188

191

189


190

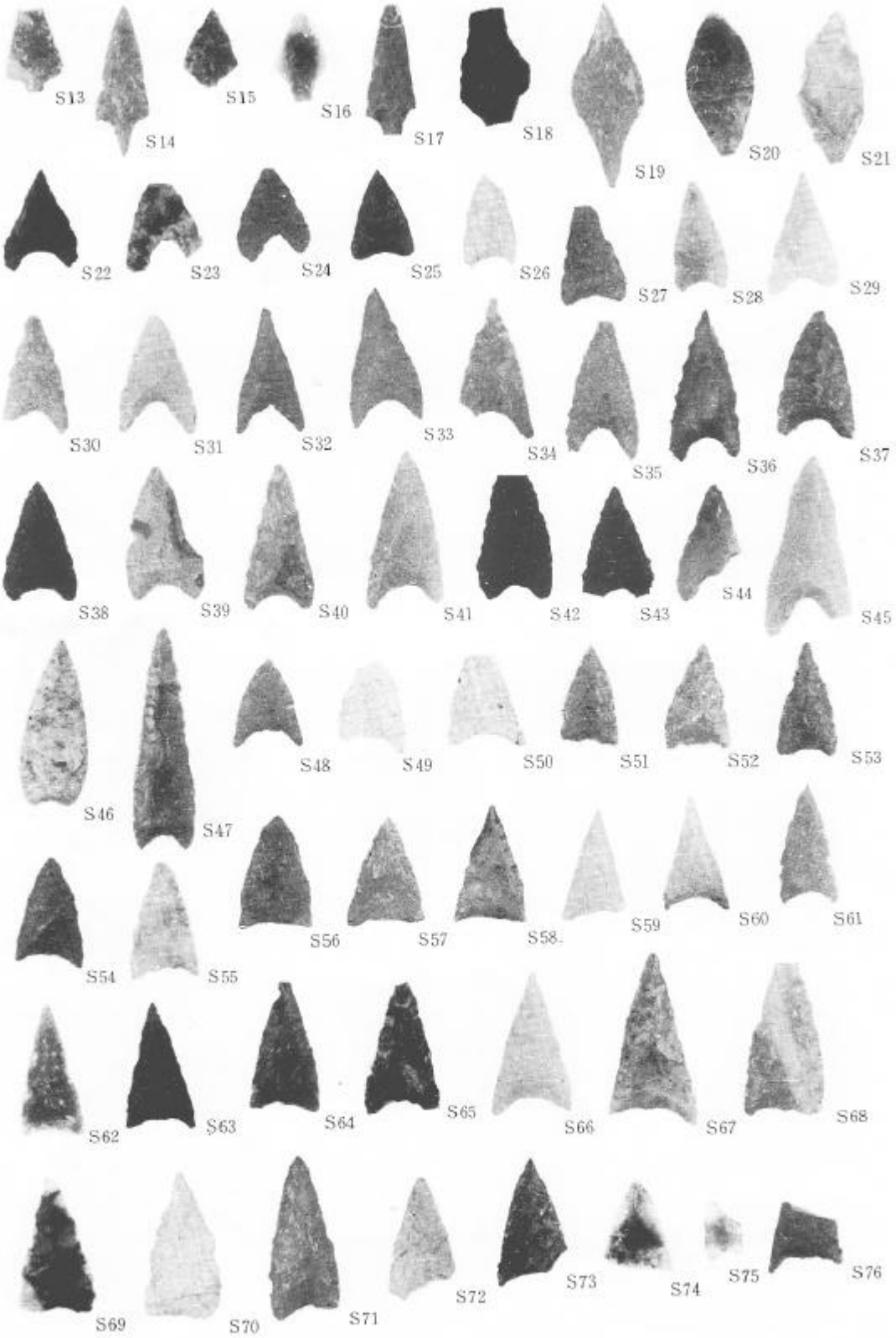
194

192

193

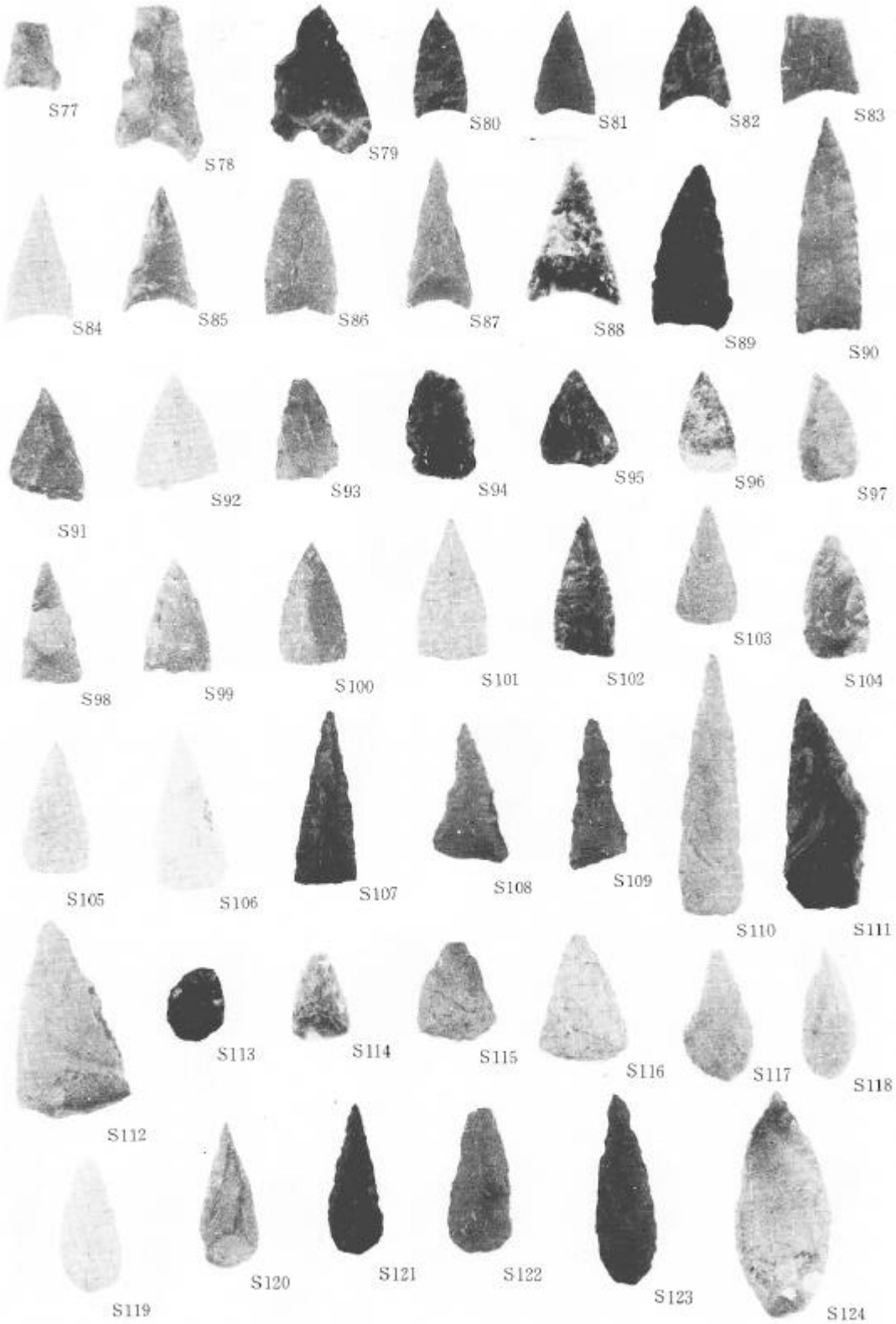
遺構外出土土器

図版28



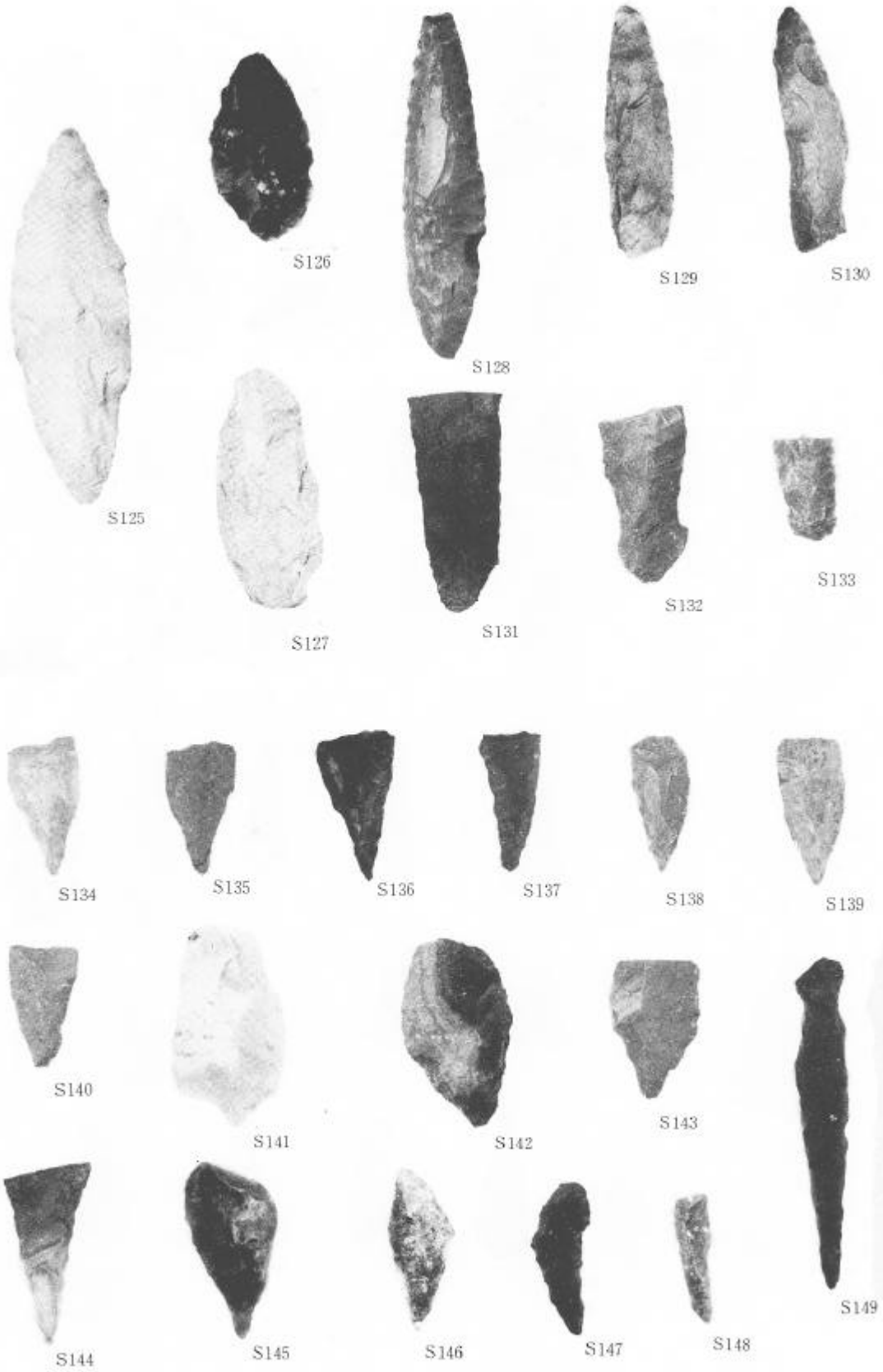
遺構外出土石器

図版29

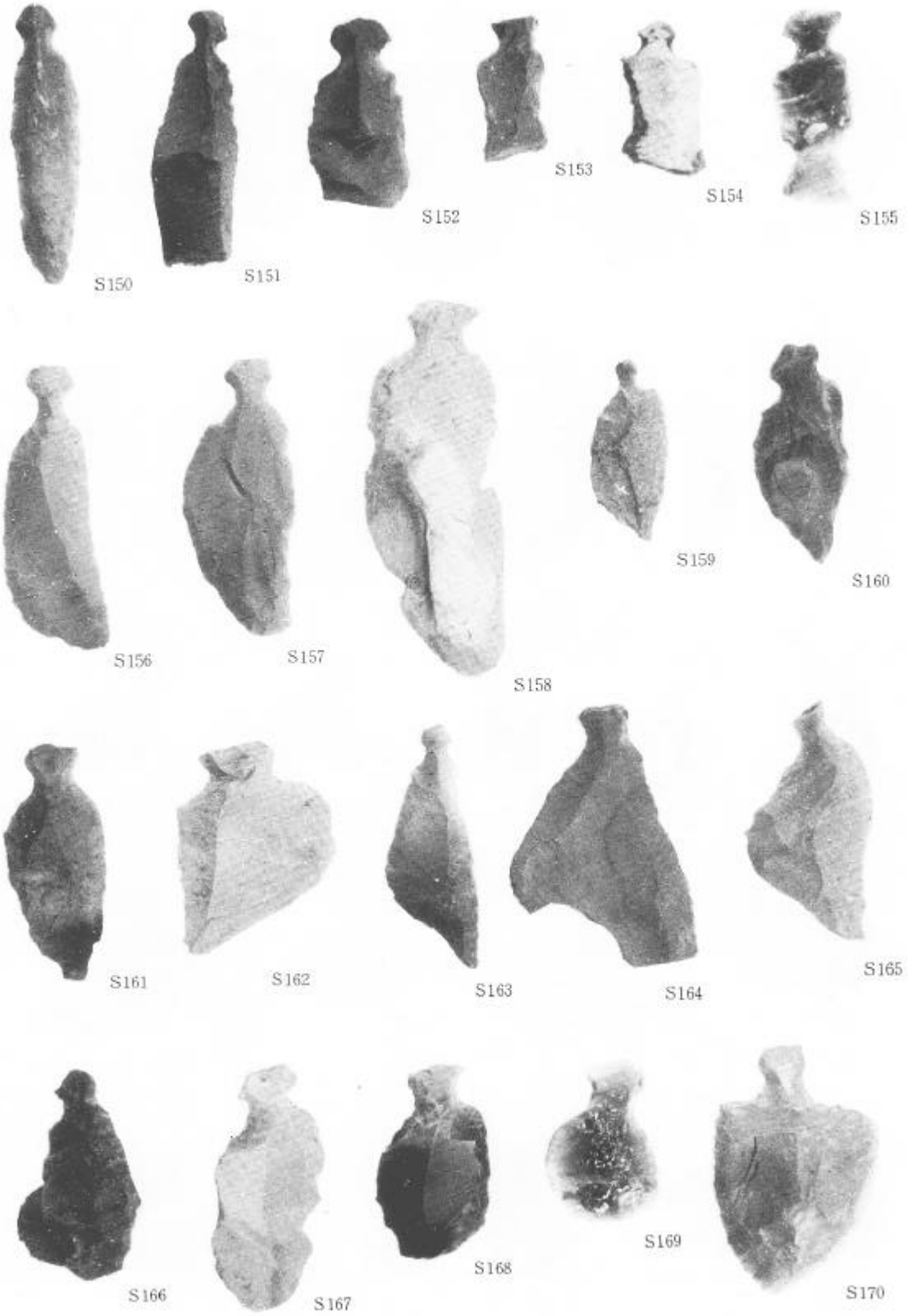


遺構外出土石器

図版30

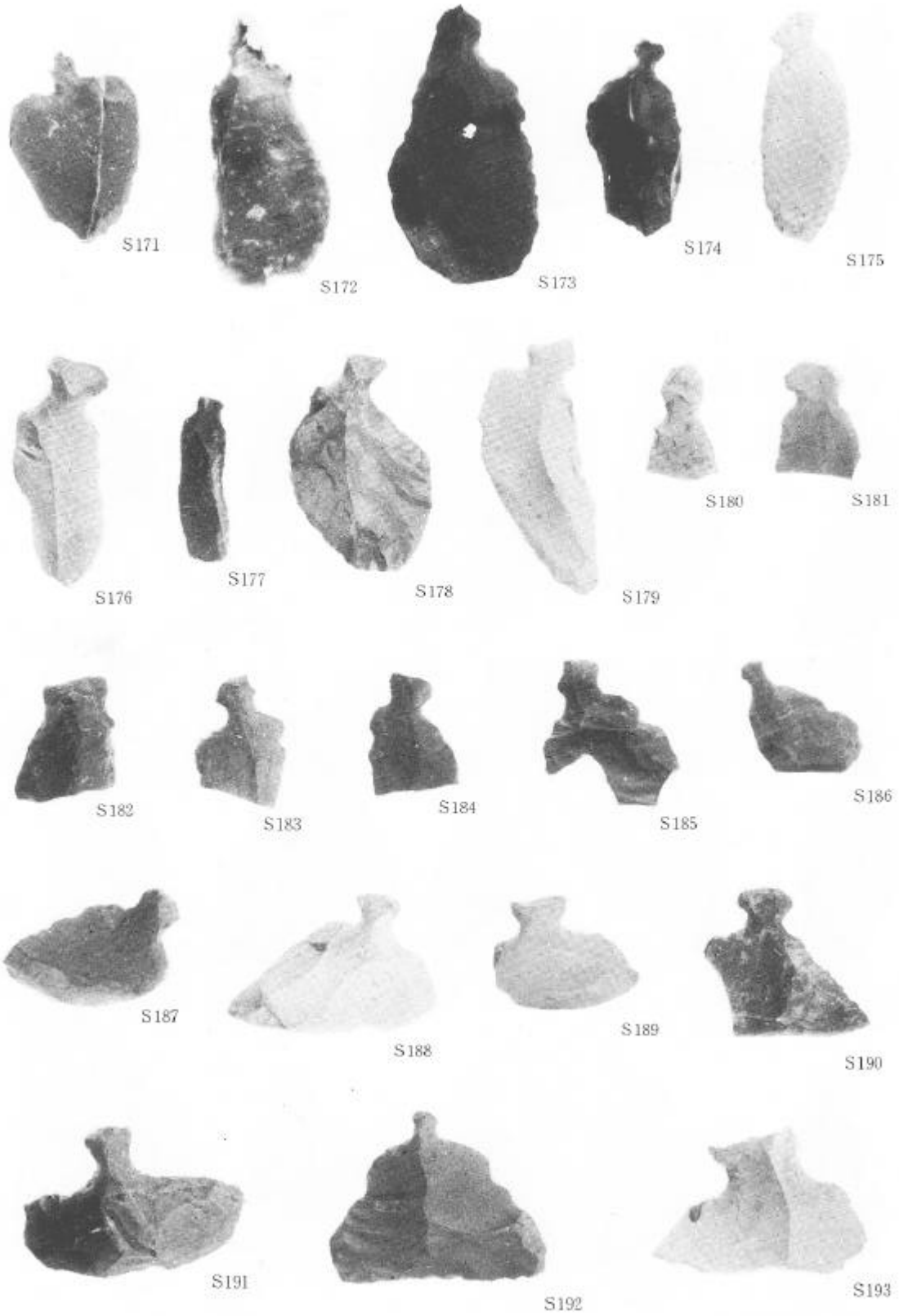


遺構外出土石器

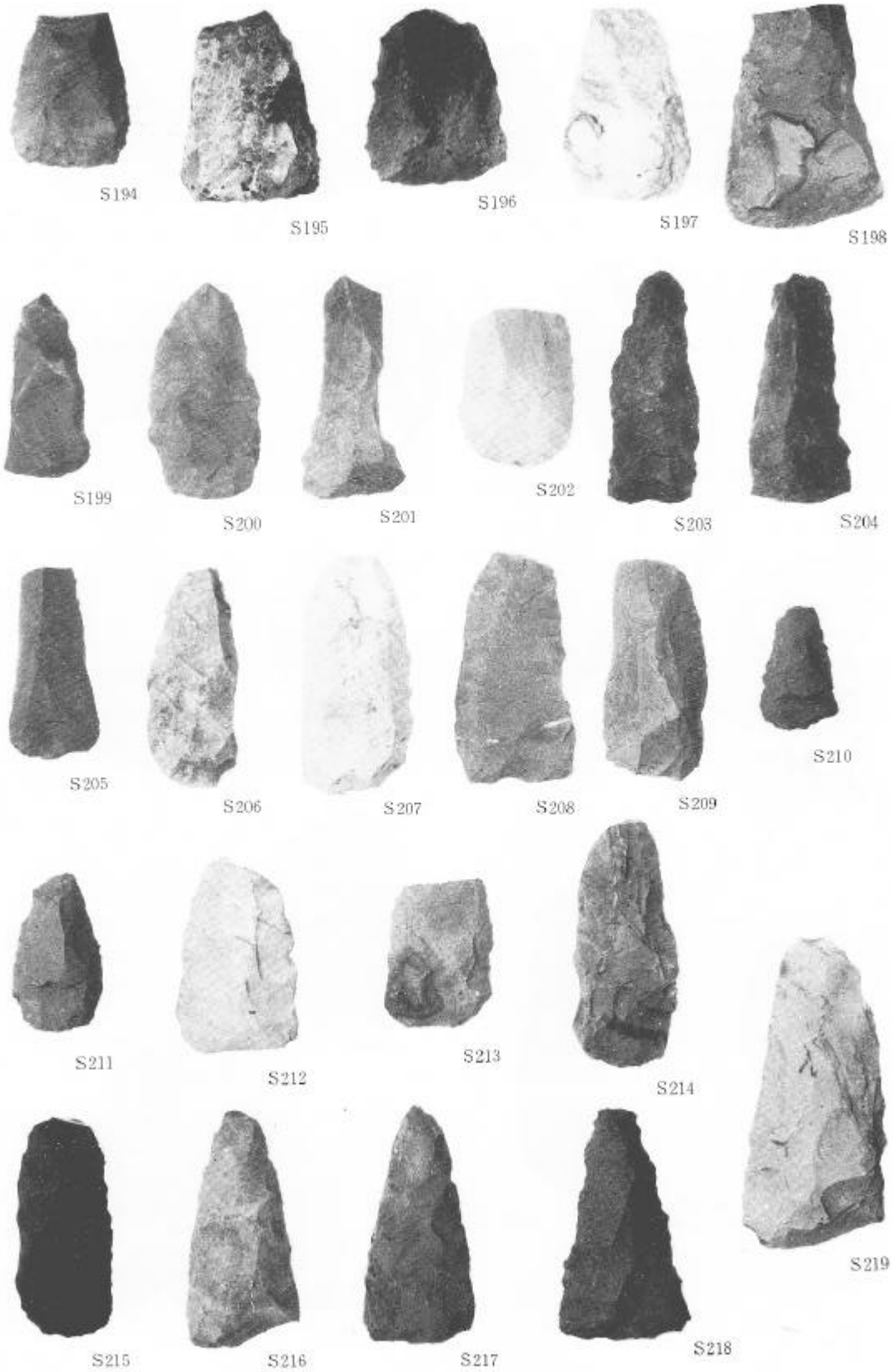

S150
S151
S152
S153
S154
S155
S156
S157
S158
S159
S160
S161
S162
S163
S164
S165
S166
S167
S168
S169
S170

遺構外出土石器

図版32

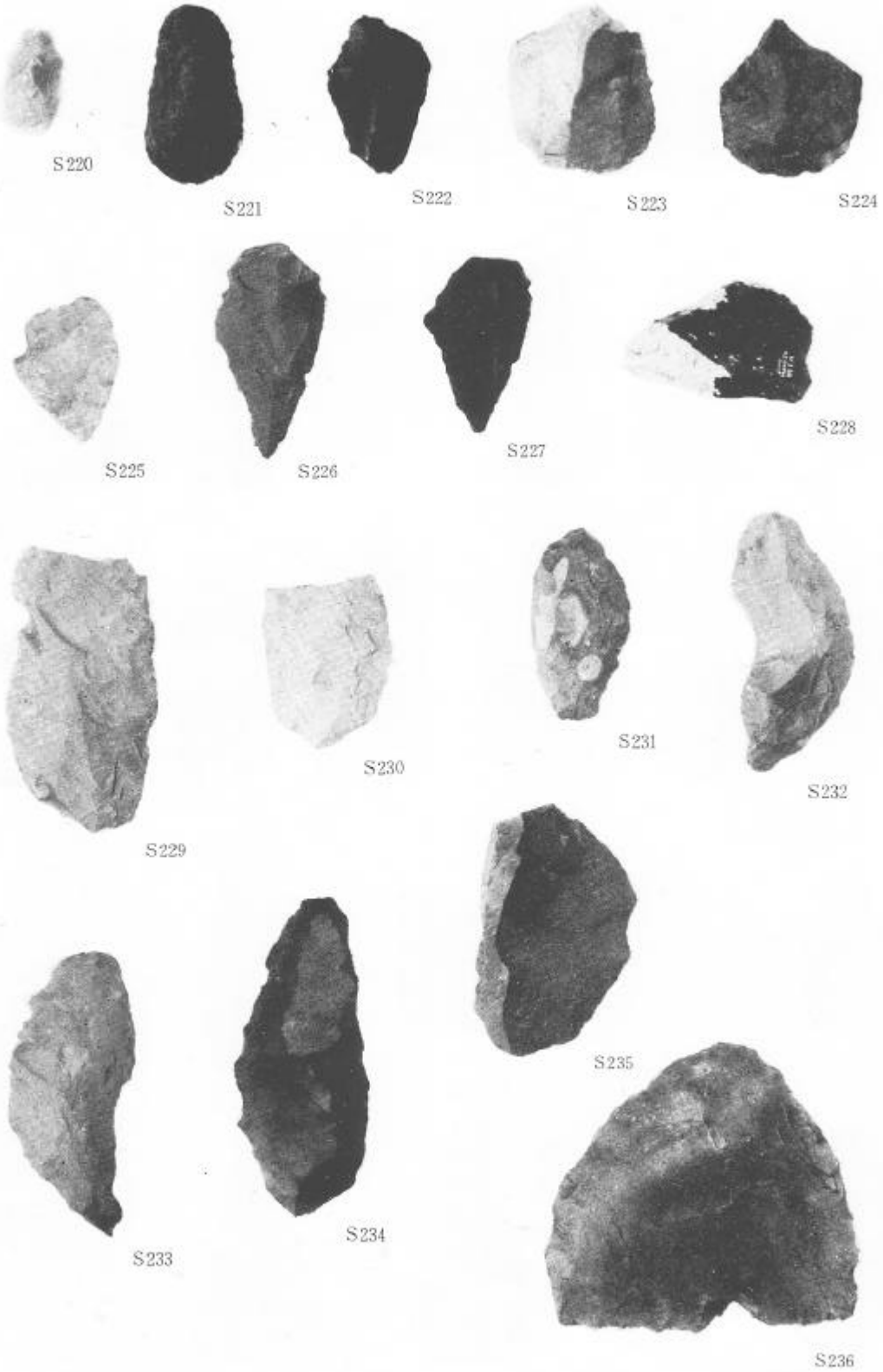


遺構外出土石器

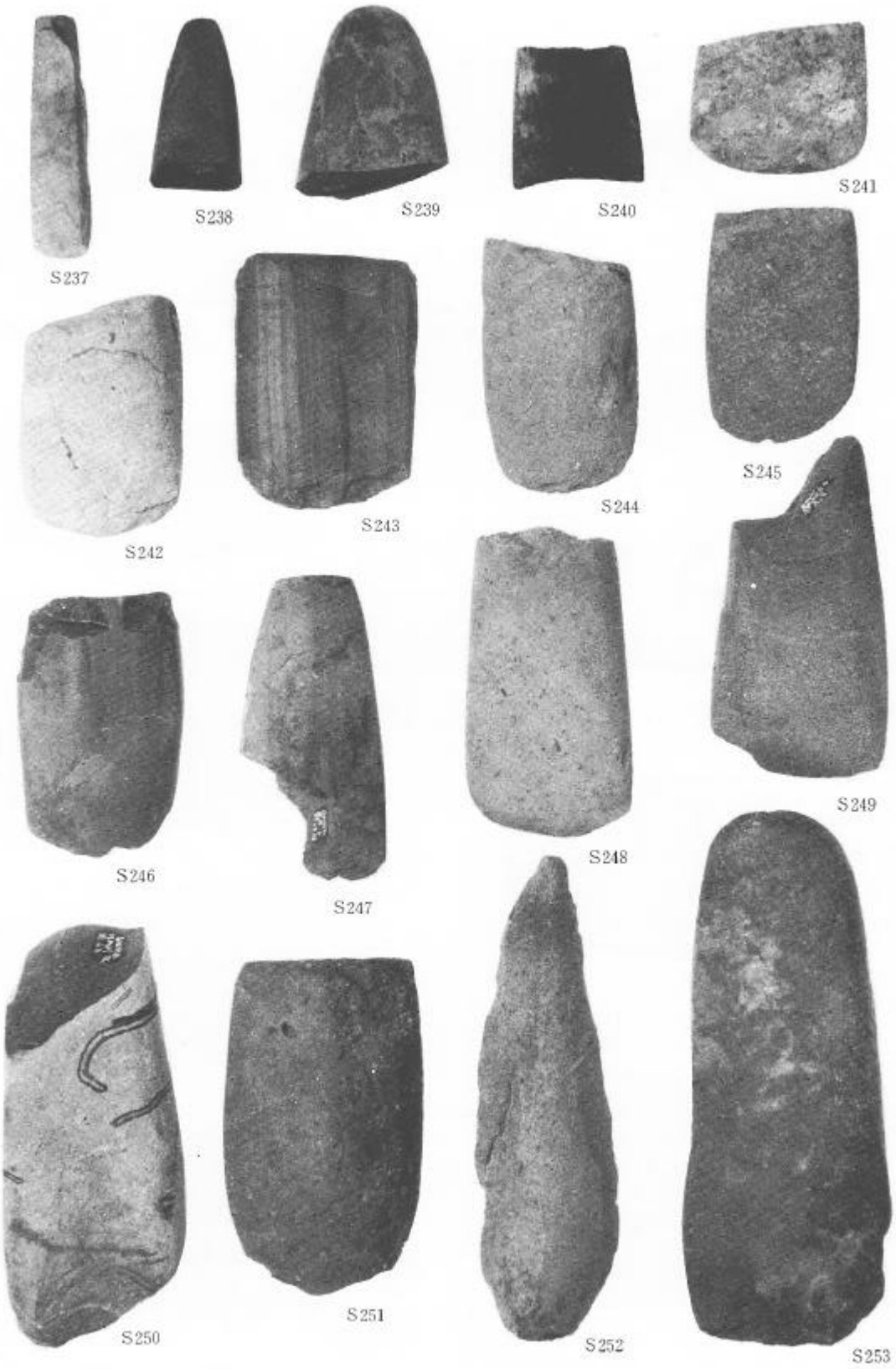

S194
S195
S196
S197
S198
S199
S200
S201
S202
S203
S204
S205
S206
S207
S208
S209
S210
S211
S212
S213
S214
S215
S216
S217
S218
S219

遺構外出土石器

図版34

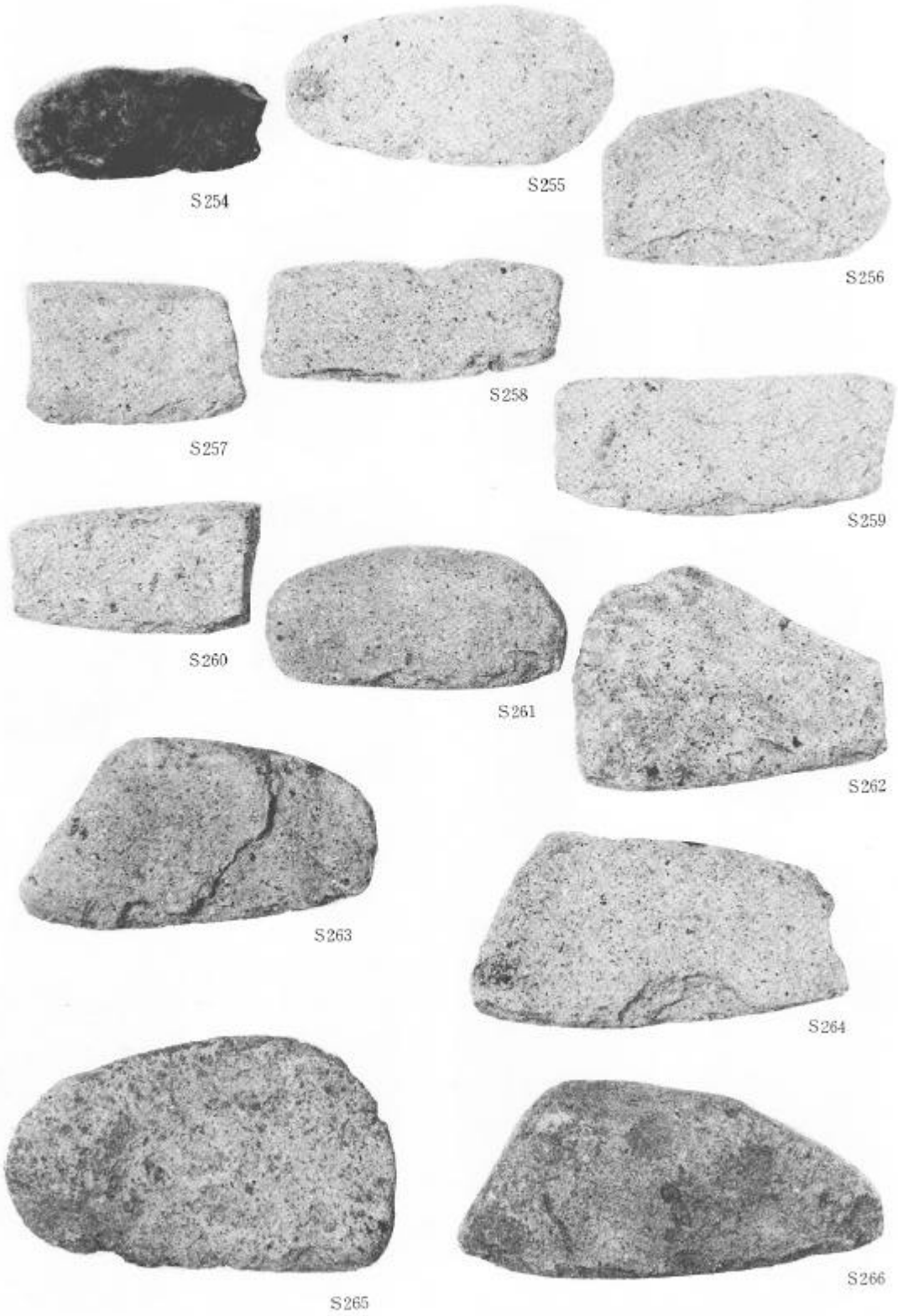


遺構外出土石器


S237
S238
S239
S240
S241
S242
S243
S244
S245
S246
S247
S248
S249
S250
S251
S252
S253

遺構外出土石器

図版36



遺構外出土石器

S267

S268

S269

S270

S271

S272

S273

S274

S275

S276

S277

S278

S279

S280

遺構外出土石器

図版38

S281

S282

S283

S284

S285

S286

S287

S288

S289

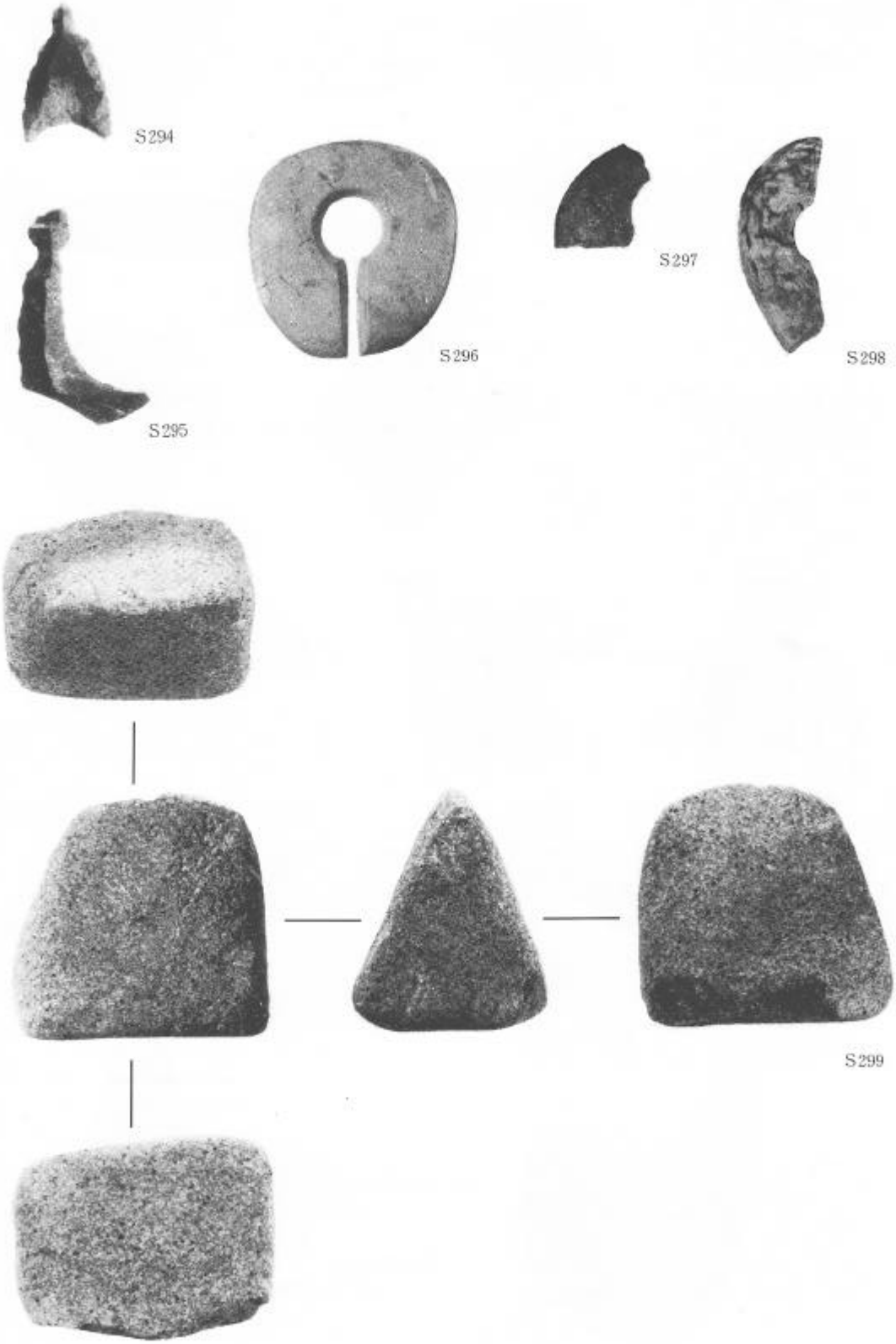
S290

S291

S292

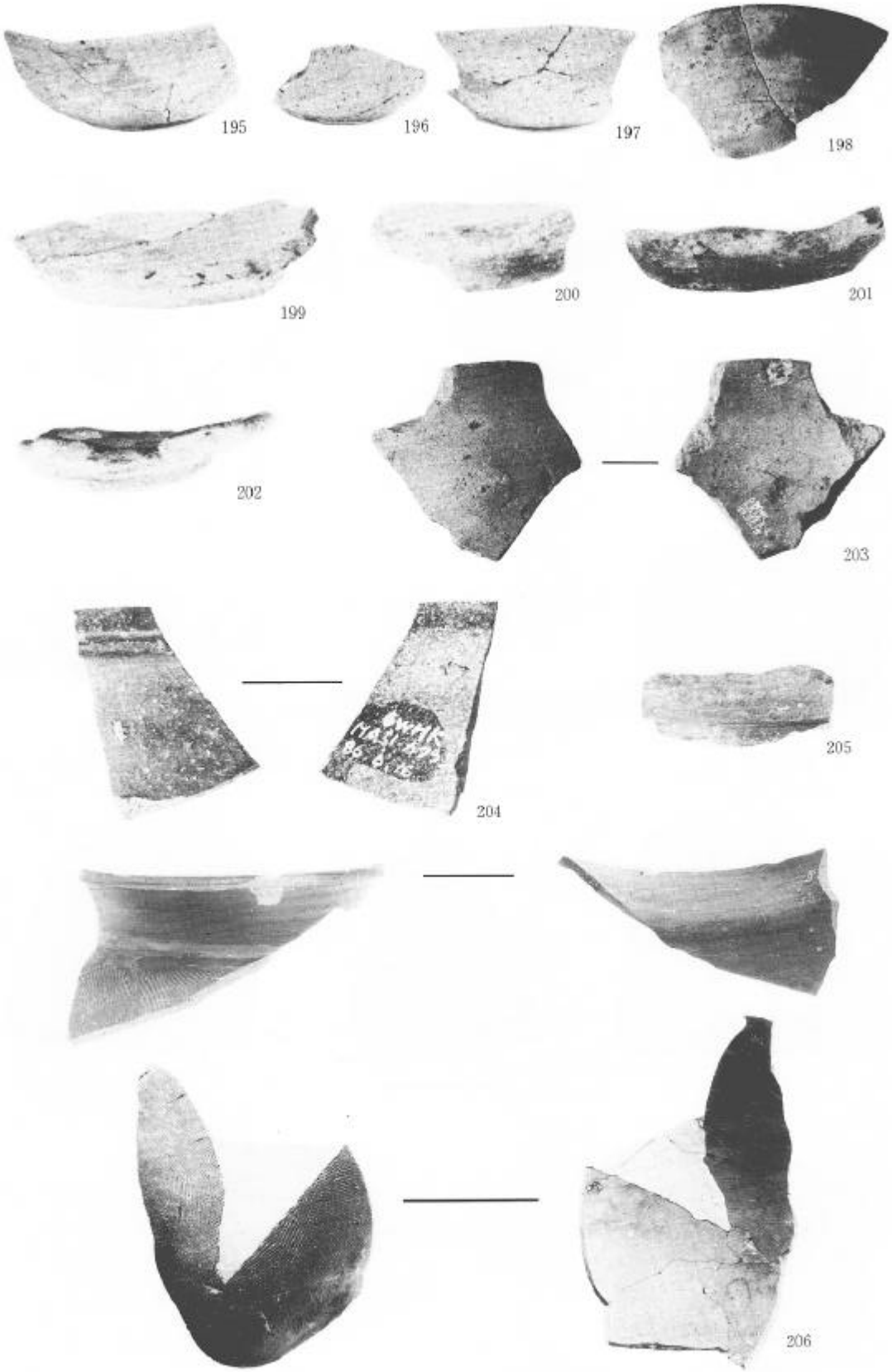
S293

遺構外出土石器

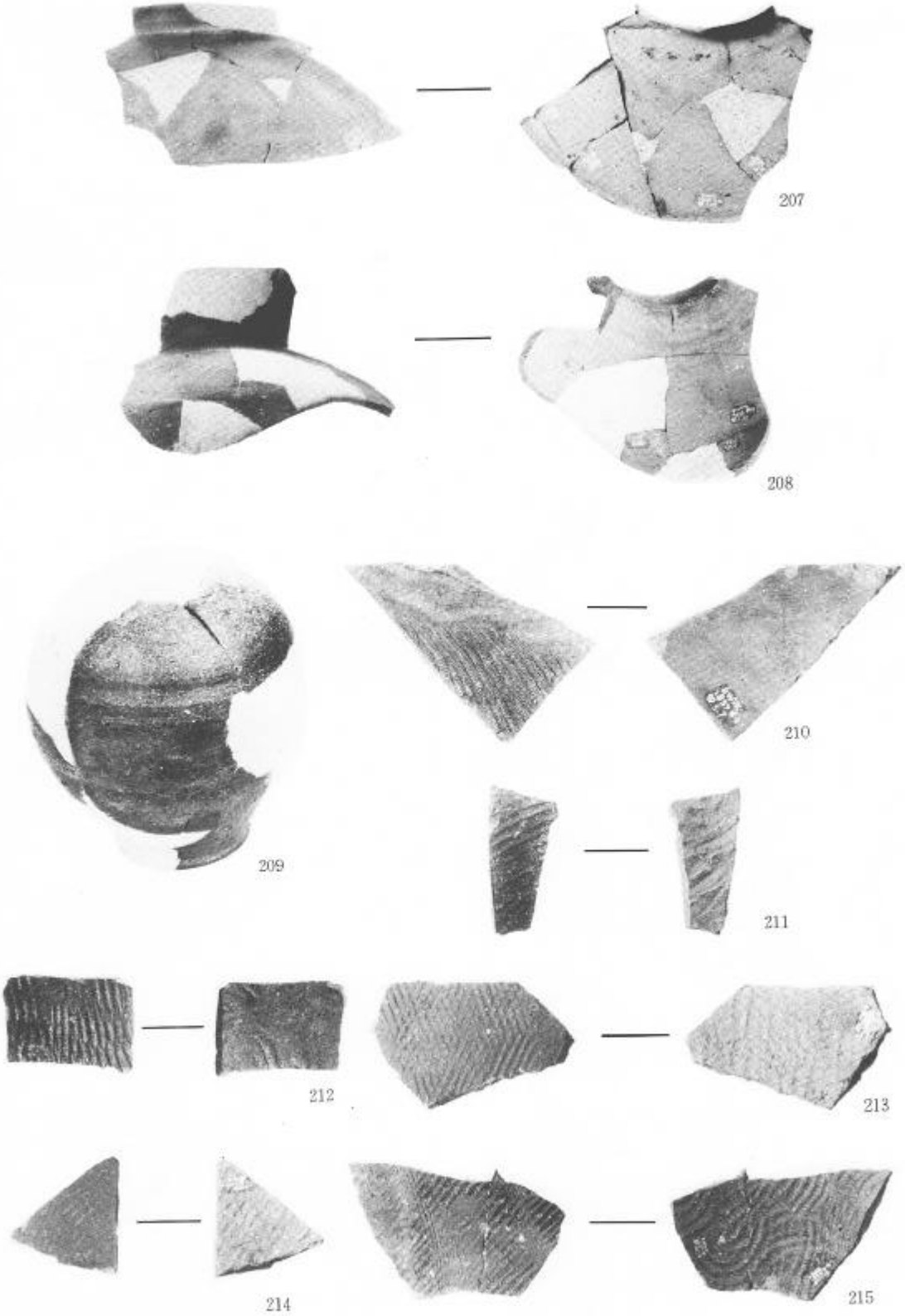


遺構外出土石器・石製品

図版40



遺構外出土土器（土師器・須恵器）



遺構外出土土器（須恵器）